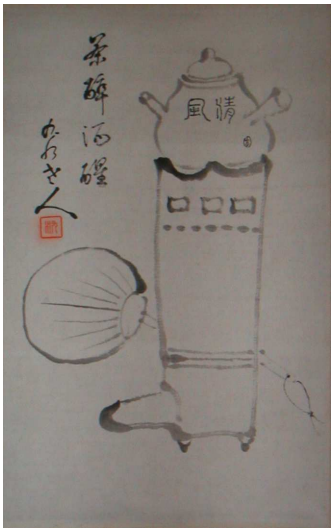
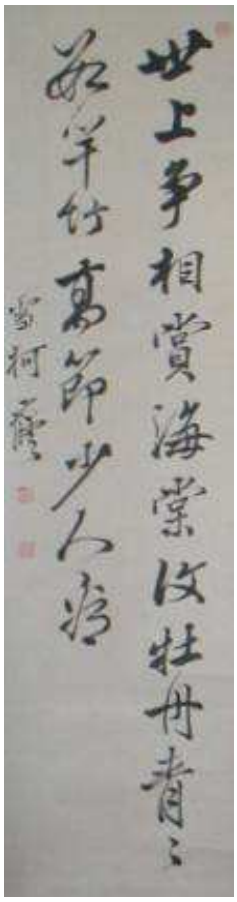
伊勢度会近世名軸図鑑





2013年04月吉日

秋 田 耕 司

伊勢度会近世名軸図鑑

伊勢度会近世名軸図鑑

我が郷土、伊勢度会では非常に多くの書画人を輩出していることが分かってきましたので、画人は伊勢市立郷土資料館発行『神都の書画人』の分類に従い記載し、書家は知識ないままに以下のように分類しました。

画　人

- 四条円山派（1）
- 四条円山派（2）及び諸派
  - 月僊門流
- 浮世絵派
- 狩野派
- 南画派

書　家

- 御家流派
- （蒔田）田器派
- 篆刻・鉄筆派
- 諸派

略歴は以下をを丸写ししていますので、取扱いについてはご注意ください。

「伊勢　度会人物誌」昭和50年伊勢印刷工業(株)編者川端義夫発行
コトバンク http://kotobank.jp/
思文閣　美術人名辞典 http://www.shibunkaku.co.jp/biography/

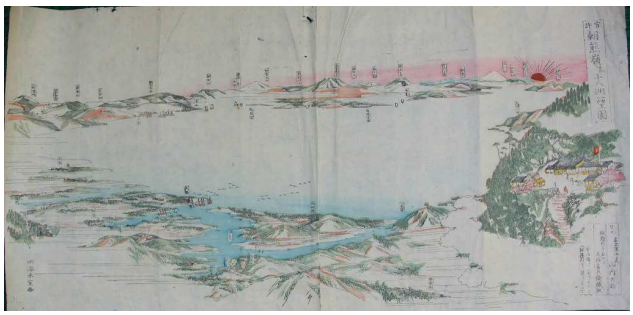
氏名の読み仮名は正確ではありません。

画：四條・円山派１

写生的画風の円山応挙を祖とする円山派と、与謝蕪村の文人画（南画）を基礎としている呉春を祖とする四条派を合わせた呼び名。

『仲國之図』水溜米室

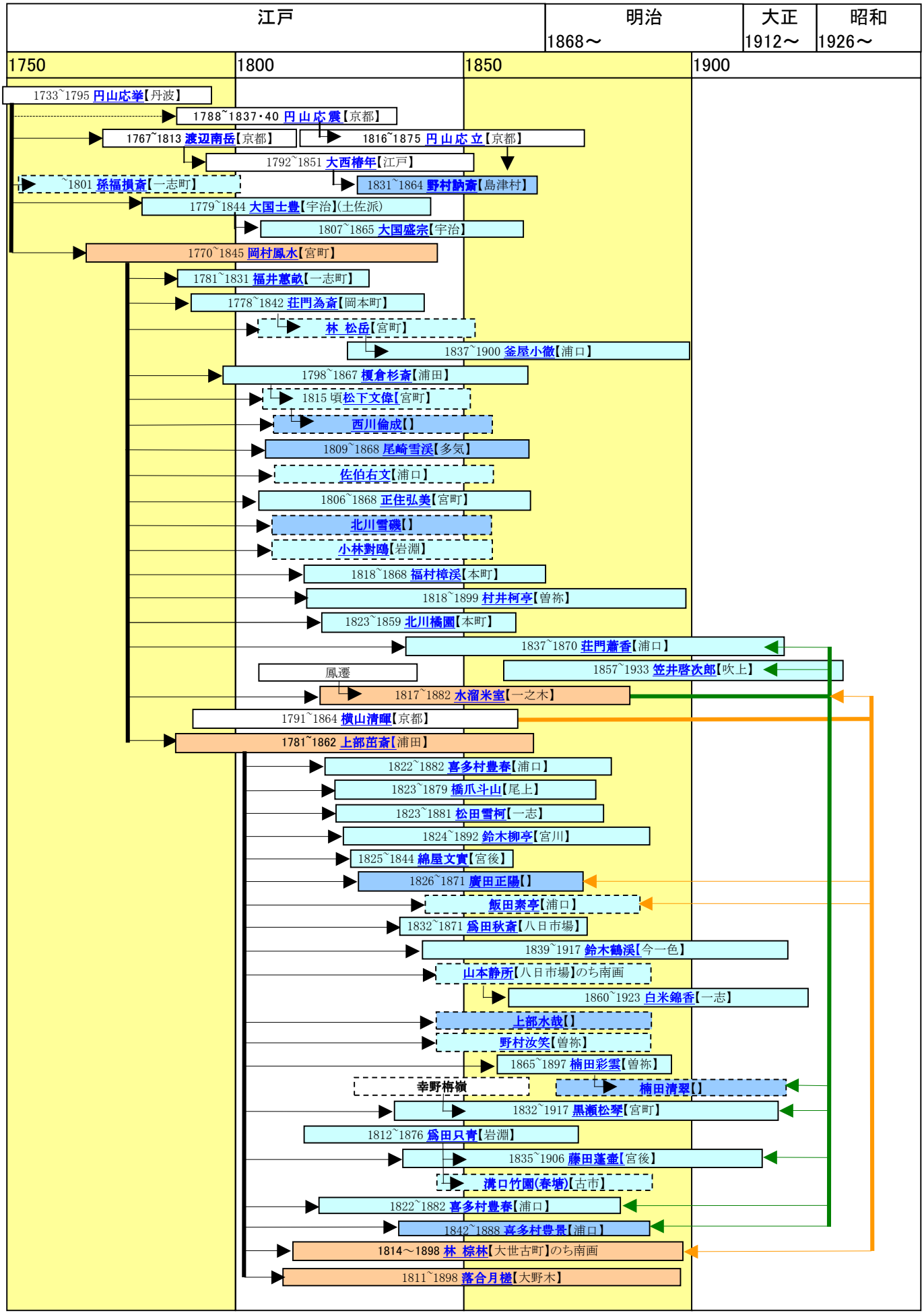
『墨竹圖』松田雪柯（伊勢市に寄贈済）



『官許朝熊峰ヨリ十八州一望図』水溜米室
（K 氏所蔵）

『水墨梅』松田雪柯（伊勢市に寄贈済）

画人（四條・円山派1）系譜


江戸
明治
1868～
大正
1912～
昭和
1926～
1750
1800
1850
1900
1733~1795 円山応挙【丹波】
1788~1837・40 円山応震【京都】
1767~1813 渡辺南岳【京都】
1816~1875 円山応立【京都】
1792~1851 大西椿年【江戸】
~1801 孫福損斎【一志町】
1831~1864 野村訥斎【島津村】
1779~1844 大国士豊【宇治】(土佐派)
1807~1865 大国盛宗【宇治】
1770~1845 岡村鳳水【宮町】
1781~1831 福井憲畝【一志町】
1778~1842 荘門為斎【岡本町】
林 松岳【宮町】
1837~1900 釜屋小徹【浦口】
1798~1867 榎倉杉斎【浦田】
1815 頃松下文偉【宮町】
西川倫成【】
1809~1868 尾崎雪渓【多気】
佐伯右文【浦口】
1806~1868 正住弘美【宮町】
北川雪磯【】
小林對鴎【岩淵】
1818~1868 福村樟渓【本町】
1818~1899 村井柯亭【曽祢】
1823~1859 北川橘園【本町】
1837~1870 荘門蕭香【浦口】
鳳遷
1857~1933 笠井啓次郎【吹上】
1817~1882 水溜米室【一之木】
1791~1864 横山清暉【京都】
1781~1862 上部茁斎【浦田】
1822~1882 喜多村豊春【浦口】
1823~1879 橋爪斗山【尾上】
1823~1881 松田雪柯【一志】
1824~1892 鈴木柳亭【宮川】
1825~1844 綿屋文實【宮後】
1826~1871 廣田正陽【】
飯田素亭【浦口】
1832~1871 爲田秋斎【八日市場】
1839~1917 鈴木鶴渓【今一色】
山本静所【八日市場】のち南画
1860~1923 白米錦香【一志】
上部水哉【】
野村汝笑【曽祢】
1865~1897 楠田彩雲【曽祢】
幸野梅嶺
楠田清翠【】
1832~1917 黒瀬松琴【宮町】
1812~1876 爲田只青【岩淵】
1835~1906 藤田蓬壷【宮後】
溝口竹圃(春塘)【古市】
1822~1882 喜多村豊春【浦口】
1842~1888 喜多村豊景【浦口】
1814～1898 林 椋林【大世古町】のち南画
1811~1898 落合月槎【大野木】

画人（四條・円山派１）略歴

円山応挙 （まるやま おうきょ） 岩次郎、主水、仲均、仲選、一嘯、夏雲、仙嶺、僊斎	【享生没年】63歳 1733~1795 享保18～寛政7【生地】丹波（京都）【住地】【系譜】 【略歴】生家は丹波桑田郡(京都府)の農家。 【書画暦】四条・円山派。円山派の創始者。狩野(かのう)派の石田幽汀(ゆうてい)に学ぶ。遠近法などをとりいれて独自の写生画を創出した。代表作に「雪松図」(国宝)、「七難七福図巻」、大乗寺の障壁画
孫福損斎 （まごふく そんさい） 公或、内蔵之助、隠岐、長儒、眉山	【享生没年】~1801～享和元【生地】一志久保(一志町)【住地】同 【系譜】白堂の男、山口凹巷の兄、後小田姓 【略歴】皆川淇園、柴栗山等に学び、漢学者として有名であった。 【書画暦】円山応挙について画をもよくした。
渡辺南岳 （わたなべ なんがく） 巌、維石、小左衛門	【享生没年】46歳 1767~1813 明和04～文化10【生地】京都【住地】【系譜】【略歴】 【書画暦】江戸後期の円山派の画家。画法を円山応挙に学び、十哲の一人に数えられる。また尾形光琳に私淑する。美人・鱗魚の画を得意とした。
大西椿年 （おおにし ちんねん） 大寿、楚南、運霞堂、霞翁	【享生没年】60歳 1792~1851 寛政4～嘉永4【生地】江戸【住地】【系譜】【略歴】 【書画暦】江戸後期の画家。幕府米蔵を管理する役人で,浅草蔵前に住んでいた。文化6年(1809)江戸にきた京都の画家渡辺南岳について円山派の画法を学ぶ。のちに谷文晁を慕い、諸派の画法を独習した。江戸における数少ない円山派の画家として活躍し、特に亀の画に人気があった。弟子に明治の洋画家川上冬崖がいる。60歳で没し、江戸浅草の金剛院に葬られた。
円山応震 （まるやま おうしん） 仲恭、百里・星聚館・方壷子	【享生没年】49～52歳 1788~1837・40 天明08～天保09・11【生地】【住地】【系譜】応挙の次男木下応受の子、長男円山応瑞の養子【略歴】 【書画暦】江戸後期の画家。人物・山水・花鳥を得意とする。
円山応立 （まるやま おうりゅう） 勝治郎、多都雄、主水、子道、方壷・米斎等	【享生没年】59歳 1816~1875 文化13～明治8【生地】京都【住地】 【系譜】友禅工寺井久次郎の子【略歴】養拙流書法の祖寺井養拙の玄孫 【書画暦】幕末・明治の円山派の画家。はじめ禁裏御所官人島田近江守徳直の猶子となって、円山応震の養子となり同家四世を嗣いだ。安政年間の内裏障壁画制作に参加。人物花鳥を能くした。
野村訥斎 （のむら とつさい） 亀松、萬兵衛、月岑、雪窓	【享生没年】34歳 1831~1864 天保2～元治元【生地】三重県南島町小方竈（窯）（島津村）【住地】京都【系譜】総左衛門の三男【略歴】 【書画暦】花鳥画を好み、16歳江戸に出で、大西椿年の門に入りで刻苦年あり。その技著しく進むだ。萬延元年3月京都に至り、圓山應立に従ひて切磋練磨し、画風一変した。是より訥斎と称した。文久2年11月禁門絵局の釣命を奉ずるに至りたるも、伊勢の田丸で発病して同年2月11日郷里小方窯で帰らぬ人となった。 参考：伊那史学会原田氏のご指導、 http://www.ohyamanet.com/~katadainari/zinbutumain.htm
大国士豊 （おおくに しほう） 盛永、春斎	【享生没年】65歳 1779～1844 安永8年～天保15【生地】宇治【住地】【系譜】【略歴】 【書画暦】四条・円山派(土佐派)。 幼少にして父を失うが、14歳の時京都に出て御所画所土佐家に入学する。一機軸をあみ、名声周囲に聞こえ入門する者が多かった。その後、駿河・遠江・伊豆に遊学し、韮山代官江川太郎左衛門の弟子になる。当時は鷹を私有することは禁じられていたが駿河の府中に限り許されていたので、士豊は同所に留まって日夕鷹を写生し、真に迫った作品であることより、人々は鷹画と称した。
大国盛宗 （おおくに せいそう） 治郎、左太郎	【享生没年】59歳 1807~1865 文化4～慶應元【生地】宇治【住地】同【系譜】盛業の長男 【略歴】父盛業並に井筒守訓、益谷末壽について国学を修め、又鷹羽龍年に漢学を学んだ。【書画暦】中西伯圭に筆道を、叔父士豊に画を学んだ。
岡村鳳水 （おかむら ほうすい） 徽房、左膳、左全、粛叟	【享生没年】76歳 1770～1845 明和7～弘化2【生地】丹波亀山【住地】下中之郷(宮町) 【系譜】岩佐忠兵衛の三男、又太夫の嗣【略歴】 【書画暦】四条・円山派。早くより京都の円山応挙の門に入り十哲の一人に名を上げられたが、画友の笠井末清を訪ねて伊勢に来訪する。画会などを開いて長く滞在する間に縁あって下中之郷（現宮町）の岡村家に入る。神都伊勢に四条・円山派の根を下ろした最初の人で、門下に上部茁斎、榎倉杉斎、荘門為斎などがおり、円山派の画風が大いに広まることになった。

福井蕙畝 （ふくい けいほ） 末勲、葆斎	【享生没年】51歳 1781~1831 天明元～天保2【生地】【住地】下之久保（一志町） 【系譜】荒木田経文の次男、末済の養嗣【略歴】 【書画暦】岡村鳳水門人、画
荘門為斎 （しょうもん ためさい） 直在、此面、處平、此中	【享生没年】65歳 1778～1842 安永7～天保13【生地】岡本町【住地】浦口 【系譜】松本光信の二男であるが荘門家に嗣ぐ。【略歴】 【書画暦】円山派。岡村鳳水が京都から来遊するや、上部茁斎と相謀って岡村大夫の養嗣に迎え、鳳水を伊勢に永住せしめた。鳳水について画を学ぶこと多年、ついに一家を成す。門下も多くあったが名声を欲せず真摯な画人として一生を送る。
林 松岳 （はやし しょうがく） 氏香、周防、連舟、介庵、層丘道人	【享生没年】【生地】【住地】下中ノ郷烏帽子世古（宮町）、丹後【系譜】 【略歴】画名漸く顧るるに及び京都より地方に遊び、遂に丹後の風光を慕ひ、彼地に移り棲んだ。 【書画暦】初め荘門爲斎につきて四條派を学び、後狩野派に転じた。
釜屋小徹 （かまや こてつ） 新八郎、因幡、淡泉	【享生没年】64歳 1837~1900 天保8～明治33【生地】浦口【住地】下中之郷（宮町） 【系譜】古森厚孝（亀淵）の五男、数馬家再興 【略歴】国学を足代弘訓に学び、漢学を龍三瓦、齋藤樂山に就て修め、安政年間、勤王の士・藤本鐵石、大志を齎（もた）らして神都に来り、切りに悲歌慷慨の士を募った。鐵石、淹留、半歳、其講を聴き其志に盟ずるもの20余人、而も時機漸く切迫し京都に帰らんとする時、従ふもの一人もなく、鐵石之を憤慨した。小徹亦痛憤措かず。単身鐵石に従ふて京都に上り共に力を王事に尽くした。 【書画暦】画を林 松岳に学む。
榎倉杉斎 （えのくら すぎさい） 新 武賛(たけおき)、靱負	【享生没年】70歳 1798~1867 寛政10～慶應3【生地】上中之郷（浦田町）【住地】同 【系譜】武繁の次男【略歴】内官権禰宜。正四位上に至つた。 【書画暦】画。岡本鳳水を師として絵画を学び、画風は一に師の風格を黒守し、筆勢を紊（みだ）さず。又有職故実を重んじ、是を訂さざれば筆を下さず。花鳥人物を画き旁ら写生に名を得た。豊前小倉城回禄の災あり、天保11年新築功成りたる時、城主杉齋の画風を愛し、聘してその障壁に画かしめた。同年より嘉永3年迄9ケ年の星霜を経て其功を遂げたが、杉斎死後1ケ月小倉城また火あり、杉齋の画も共に烏有に帰した。
松下文偉 （まつした ふみい） 寛次	【享生没年】1815頃文化･文政頃【生地】下中之郷（宮町）【住地】上之久保（宮町）【系譜】 【略歴】 【書画暦】画を好み、岡村鳳水の門に入り常に絵師の看板を掲げた。又榎倉杉斎に従ひ小倉城の障壁に描く手伝をなした。
西川倫成 （にしおか のりなり） 文偉	【享生没年】【生地】【住地】【系譜】 【略歴】 【書画暦】岡村鳳水、松下文偉門人、画
尾崎雪渓 （おざき せっけい） 友範、平馬、松翁、竹處	【享生没年】60歳 1809~1868 文化6～明治元【生地】多気郡眞手村【住地】同郡荻原村 【系譜】古澤遊斎の男、友由の養嗣【略歴】薮内宗匠門人茶道 【書画暦】岡村鳳水門人、四條流
佐伯右文 （さえき ゆうぶん） 茂十郎	【享生没年】【生地】【住地】堤世古（浦口）【系譜】 【略歴】 【書画暦】岡村鳳水門人 絵画
正住弘美 （まさずみ ひろみ） 正治郎、将監、隼人、千鍾、**粛窓、**	【享生没年】61歳 1806~1868 文化3～慶應4【生地】【住地】下中之郷（宮町） 【系譜】岡村鳳水の長男、平九郎弘能の養嗣 【略歴】趣味として茶を喜び、堀内茶閑に就て千家表流を竟めた。 【書画暦】父岡村鳳水の遺鉢を襲ぎて四條流の画をよくした。
北川雪磯 （きたがわ せっき）	【享生没年】【生地】【住地】【系譜】 【略歴】 【書画暦】岡村鳳水門下
小林對鴎 （こばやし たいおう） 光方、左馬、摂津、直卿	【享生没年】【生地】【住地】岩淵【系譜】光延の男 【略歴】狂言を好みて五十五郎の名を以て舞台に立つたが、其技絶妙であつたといふ。 【書画暦】岡村鳳水に学びて四条派の画を描く。
福村樟渓 （ふくむら しょうけい） 履正、内膳、百祥	【享生没年】51歳 1818~1868 文政元～明治元【生地】田中中世古（本町）【住地】同 【系譜】亀吉の男【略歴】又古学を修め、古典を研究し、歌を嗜むだ。 【書画暦】岡村鳳水の門人にして，四條派の画を描き、同門中の達筆を以て目された。

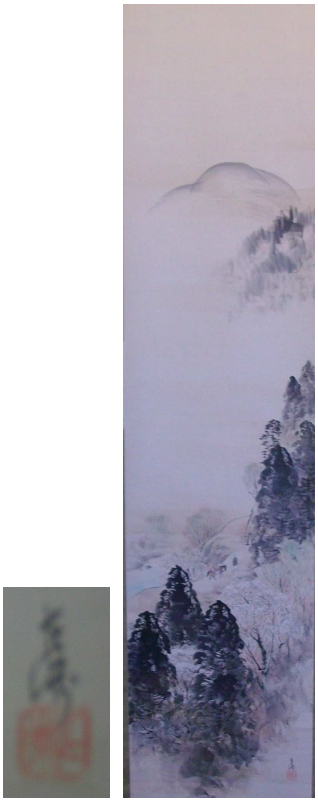
村井柯亭 （むらい かてい） 佐太郎、匠ニ、在竹	【享生没年】82歳 1818~1899 文政元～明治32【生地】曾禰（曽祢）【住地】同 【系譜】佐兵衛の長男【略歴】俳諧を嗜み、これを能くした。 【書画暦】画を岡村凰水に学ぶ。
北川橘園 （きたがわ きつえん） 政武、丹下	【享生没年】37歳 1823~1859 文政6～安政6【生地】【住地】田中中世古（本町） 【系譜】政信の男 【略歴】足代弘訓について古学を修め和歌を習ひ、日夕読書に耽（ふけ）つた。 【書画暦】岡村鳳水の門人で四條派の画を描いた。
荘門蕭香 （しょうもん しゅうこう） 直益、徳裕	【享生没年】34歳 1837~1870 天保8～明治3【生地】浦口【住地】同【系譜】為斎の孫 【略歴】 【書画暦】水溜米室門人、画、篆刻
笠井啓次郎 （かさい けいじろう） 吉利、野雲	【享生没年】76歳 1857~1933 安政4～昭和8【生地】吹上【住地】同【系譜】 【略歴】世襲質商にして、恒に公益事業に尽くし、殊に一誉坊墓地整理の世話人となり、竹内善兵衛氏を助けて、努力し旦義捐した。資性温厚篤実、悠々迫らすして人と交はり、漢学を宇野春渓、俳句を中川麥林、茶道を久志木つねよの諸家に就て学び、俳句並俳画を善くした。 【書画暦】画を水溜米宝に就て学ぶ
水溜米室 （みずため べいしつ） 吉太郎、吉太夫、由義、季倶、蓬壷、表裏	【享生没年】66歳 1817~1882 文化14～明治15【生地】飯南郡 or 一之木【住地】浦口 【系譜】山路五兵衛の男、水溜吉太夫の養嗣 【略歴】後年、俳句を中瀬米牛に学び、遊戯文学にも志ざし冠句の名手であった。 【書画暦】少時岡村鳳水に従いて画道に入り、後京都に遊びて鳳儕の画塾に身を寄せ、又横山清暉の門に転じ、その運筆亦(また)一転化を来した、苦学切磋を怠らざりしことは、3年門を出でず、一年入浴せざりし程にて、四條派の技工精緻を極めた。
横山清暉 （よこやま せいき） 主馬、詳介、暉三、成文、奇文、霞城	【享生没年】73歳 1791～1864 寛政3～元治元【生地】京都【住地】【系譜】 【略歴】 【書画暦】江戸後期の四条派の画家。松村景文に学び、花鳥・山水・人物を能くする。
上部茁斎 （うわべ せっさい） 光済、雅楽之助、子海、横渠	【享生没年】81歳 1781～1862 天明元～文久2 【生地】上中之郷(現：常盤町？浦田町)【住地】大世古 【系譜】橋村正均の子、上部光映の養子 【略歴】外宮権禰宜、正四位下に至った。また茶にも優れた。 【書画暦】四条・円山派。幼より画を好み、兄に従いて狩野派を学び、後岡村鳳水の門に入りて圓山の画風を伝えた。曾て尾張に遊び、嘉泰院陣居中が画く所の隋陸宮図を模写し、大に悟る所ありて其技益進み、画名一時に高くなった。ある時二見浦の真景を摸し、之を鷹司殿下に献じたるに、遂に天覧に入りて叡感浅からず、之を禁中に止めさせられ、更に勅して亀鶴貳幀の図を描かしめ陽ふた。この光栄に浴して以来天覧の印を捺した。又茶道をも能くした。門人百数十人あり、林棕林、鈴木柳亭、落合月槎、橋爪斗山、廣田篁齋(正陽)、松田雪柯、水溜米室等其尤たるものである。
喜多村豊春 （きたむら ほうしゅん） 光政、嘉四郎、嘉讀、以徳	【享生没年】61歳 1822~1882 文政5～明治15【生地】浦口【住地】同【系譜】邦穀の長男 【略歴】 【書画暦】幼より絵画を好み、父邦穀に従ひ浮世絵鳥居派の画法を学び．自ら研究を積みて遂に大成するに至った。市の内外を問はず、其氏神祭礼の日に掲げし大額の似顔絵は主に豊春の描きたるものであった。
橋爪斗山 （はしづめ とうざん） 保富、保太郎	【享生没年】57歳 1823~1879 文政6～明治12【生地】【住地】尾上【系譜】 【略歴】上部越中の家来。 【書画暦】画を上部茁斎に学び、人其画才を称した。
松田雪柯 （まつだ せっか） 元修、縫殿、左近、公静、聊得軒	【享生没年】59歳 1823～1881 文政6～明治14【生地】下ノ久保（一志町）【住地】同 【系譜】適翁の男 【略歴】鎰取内人に補し，明治維新後更に皇太神宮主典に任じ大講義を兼ねた。初め父適翁に漢学を習ひ、後猪飼敬所の門に入り、又、谷三山にも従った。 【書画暦】書は少にして中西伯圭に学び、其没後は上京して貫名（菘翁）海屋に従ひ、其書諭を聴いて大に悟る所があった。山田奉行秋山安房守の爲めに学を講じ、又家塾を開いて漢學並びに書法を教へた。明治11年官を辞して東京に出で巌谷一六の家にあること数年、日下部鳴鶴等と相往来して書名益高く、清國楊守敬の激賞を得たと云はわる。後年三條實美に知られ、其揮毫の額を与へられた。

鈴木柳亭 （すずき りゅうてい） 金次郎、公謹、庄兵衛、孟郎、素岳	【享生没年】69歳 1824~1892 文政7～明治25【生地】【住地】中河原（宮川）【系譜】 【略歴】合羽煙草入を家業とした。 【書画暦】上部茁斎門人にて林棕林と並称されたが棕林は後南画に移り、柳亨独り其流を改めず、茁斎門下の高足となった。
綿屋文實 （わたや ふみさね）	【享生没年】19歳 1825~1844 文政8～天保15【生地】宮後【住地】下中之郷（宮町） 【系譜】岩出弘光の男、文時の養嗣【略歴】 【書画暦】上部茁斎門人、画
廣田正陽 （ひろた まさ） 筑後、篁斎	【享生没年】1826~1871 文政9～明治14【生地】【住地】 【系譜】中須興治の次男、正方の養嗣 【略歴】外宮権禰宜に叙せられたが明治四年神宮改革によって廃官となった。 【書画暦】初、上部茁斎につきて四條派の画を学び、後横山清暉についた。野口小蘋、川端玉章の壮時当て同家に淹留したことがある。
飯田素亭 （いいだ そてい）	【享生没年】【生地】上中之郷町（浦口）【住地】【系譜】 【略歴】常に囲碁を好むだ。 【書画暦】四条派の画人。初め上部茁斎の門人となって素亭と号し、後横山清暉も門に入って竹外と号した。
林 棕林 （はやし そうりん） 松田維幸、刑部、善郷、白眉	【享生没年】85歳 1814～1898 文化11～明治31【生地】大世古町【住地】 【系譜】山田神職松田幸益の男。大世古町村田家に生まれ、後、林 尚信の養嗣となり宮後に住む。【略歴】 【書画暦】幼少より上部茁斎につき、後横山清暉の門に入りて画を学び、孜々励精して写生を積むこと十年、三十余巻を成した。天保六年尾三遠（尾張・三河・遠江）諸州を遊歴し、又井伊侯に遇せられて其江戸桜田邸に滞留し、文晁、渡辺華山、米庵、南湖、椿椿山等と交りて大に得る所があった。安政の頃より南画に転じて画風一変した。八十の時有桶川宮殿下の命により、松鶴の大幅を図して上り、端渓の大硯を賜り、伊藤春畝より實硯堂の三字を書して贈られた。門人多く、磯部百鱗、中野素梅、爲田秋斎、溝口春塘等を出した。当て監田隨斎の余詩中「棕櫚花底酔薫風」とあるを取り彼塾に名づけて酔薫社と称した。
爲田秋斎 （ためだ しゅうさい） 知之、兵部、主水	【享生没年】40歳 1832~1871 天保3～明治4【生地】【住地】八日市場【系譜】只青の男 【略歴】 【書画暦】上部茁斎門人 画
鈴木鶴渓 （すずき かくけい） 健三	【享生没年】78歳 1839~1917 天保10～大正6【生地】一色村（濱郷村）【住地】【系譜】 【略歴】 【書画暦】上部茁斎門人、画
山本静所 （やまもと せいしょ） 帷清、佐十郎、伯直	【享生没年】【生地】【住地】八日市場【系譜】 【略歴】表具師 【書画暦】上部茁斎門人、後南画
白米錦香 （はくまい きんか）	【享生没年】64歳 1860~1923 万延元～大正12 【生地】一志久保（一志町）【住地】浦口、宮後【系譜】福田興朝の次女、満年（大海）の妻 【略歴】【書画暦】山本静所門人 画
上部水哉 （うわべ すいや）	【享生没年】【生地】【住地】【系譜】 【略歴】 【書画暦】上部茁斎門下
野村汝笑 （のむら じょしょう） 正路、弥作、義郷、	【享生没年】【生地】【住地】曾禰新町（曽祢）【系譜】 【略歴】 【書画暦】上部茁斎門人 画
楠田彩雲 （くすだ さいうん） 兵治、清翠	【享生没年】32歳 1865～1897 慶應元～明治30【生地】曾禰町【住地】同【系譜】先代彩雲の男【略歴】皷（つづみ）の名手であった。 【書画暦】初め水溜米室に学び、後磯部百鱗に師事して四條風の画を能くし、絵画展覚会に出品して屢（しばしば）受賞した。
楠田清翠 （くすだ せいすい）	【享生没年】【生地】【住地】【系譜】 【略歴】 【書画暦】楠田彩雲門下

黒瀬松琴 （くろせ しょうきん） 正親、清吉、菅生、勘太夫、親卿	【享生没年】86歳 1832～1917 天保3～大正6【生地】下中之郷（宮町）【住地】常盤、宮後【系譜】應進の男【略歴】明治4年外宮々掌を奉仕し訓導を兼ね、同32年須原大社の社掌となり、後河邊七種社、船江上社に転じた。資性敦厚、風流を嗜んだ。 【書画暦】初め水溜米室につき、後幸野梅嶺に師事して四條派の画をよくし、描写執実にして花鳥を得意とした。明治35年5月皇太子殿下神官御参拝の際、松上双鶴の図を献上し、又は44年5月皇后陛下神官御参拝の節老松亀鶴の図を献上し、與に御嘉納の栄に浴した。
爲田只青 （ためだ しせい） 華明、後三、兵太夫、子徳、夢々亭	【享生没年】65歳 1812~1876 文化9～明治9【生地】岩淵【住地】八日市場、岡本 【系譜】小林對鷗の三男【墓地】天神丘－且過山無えん地 【略歴】俳諧に堪能にして神風館十五世を襲ぎ、其門に遊ぶもの多かった。 【書画暦】書を川上葆に学び、松田雪柯と双璧の称あり、時人其手蹟の美を歎賞して止まなかった。
藤田蓬壷 （ふじた ほうこ） 清規、白菊庵	【享生没年】72歳 1835~1906 天保6～明治39【生地】【住地】宮後 【系譜】次郎右衛門の次男【略歴】 【書画暦】爲田只青、水溜米室門人、俳諧、画
溝口竹園 （みぞぐち ちくえん） 茂作、春流、**春塘**	【享生没年】【生地】【住地】古市【系譜】得志の男 【略歴】 【書画暦】上部茁斎、為田只青門人、絵画、俳諧
喜多村豊春 （きたむら ほうしゅん） 光政、嘉四郎、嘉讀、以徳	【享生没年】61歳 1822~1882 文政5～明治15【生地】浦口【住地】同【系譜】邦穀の長男 【略歴】【書画暦】幼より絵画を好み、父邦穀に従ひ浮世絵鳥居派の画法を学び. 自ら研究を積みて遂に大成するに至った。市の内外を問はず、其氏神祭礼の日に掲げし大額の似顔絵は主に豊春の描きたるものであった。
喜多村豊景 （きたむら ほうけい） 與太郎、與太治、子明、四明	【享生没年】47歳 1842～1888 天宝13～明治21【生地】浦口【住地】同 【系譜】邦穀の次男【略歴】 【書画暦】浮世絵派 水溜米室に師事し、その丹青の妙大に嘱望されたが惜しくも早世した。明治2年天皇陛下行幸の際に、両太神宮遷御の絵巻物を謹写して天覧に供した。
落合月槎 （おちあい げっさ） 俊明、夙夜	【享生没年】88歳 1811～1898 文化8～明治31【生地】大野木村（内城田）【住地】岡本 【系譜】中西某の子息【略歴】 【書画暦】四条・円山派。上部茁斎の門人にて円山派の画を能くし、資性温厚、門人を教育するに妙を得、其下に逸材を輩出した。

画：四條・円山派2、諸派

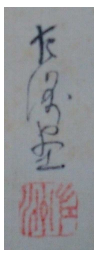
江戸後期から京都で有名になった写生的画風の円山応挙を祖とする円山派と、与謝蕪村の文人画（南画）を基礎としている呉春(江戸中期の絵師、本名：松村豊昌)を祖とする四条派を合わせた呼び名であるが、別の流派であるともされる。



『山路の春』 中村左洲（H 氏所蔵）

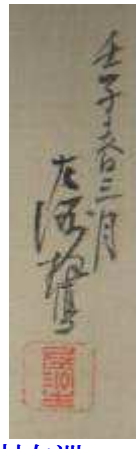
『神苑朝』中村左洲（H 氏所蔵）

『鯉』中村左洲（H 氏所蔵）



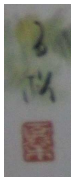
『伊勢海老』（色紙） 中村左洲
（H 氏所蔵）

昭和22年1月『月』 中村左洲
（伊勢市に寄贈済）

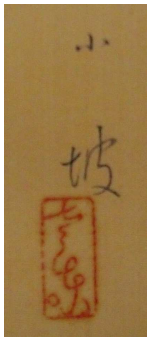


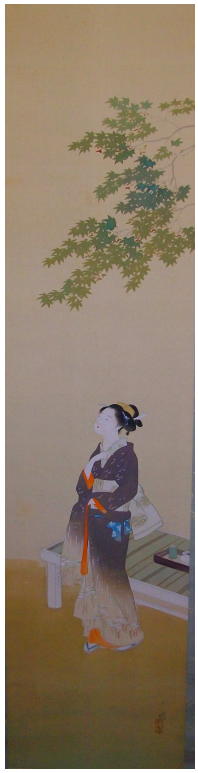
『観音圖』 中村左洲
（伊勢市に寄贈済）

『無題』中村左洲（伊勢市に寄贈済）



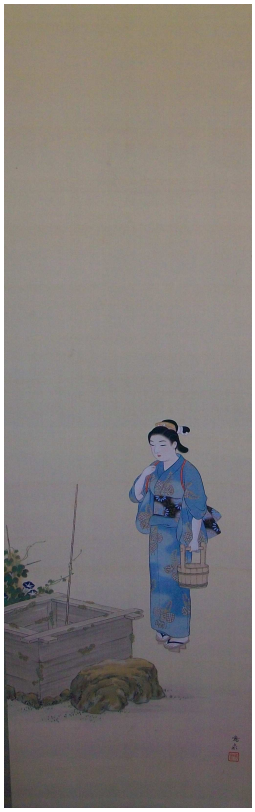
（色紙）中村百松（中村左洲の息子）（H 氏所蔵）





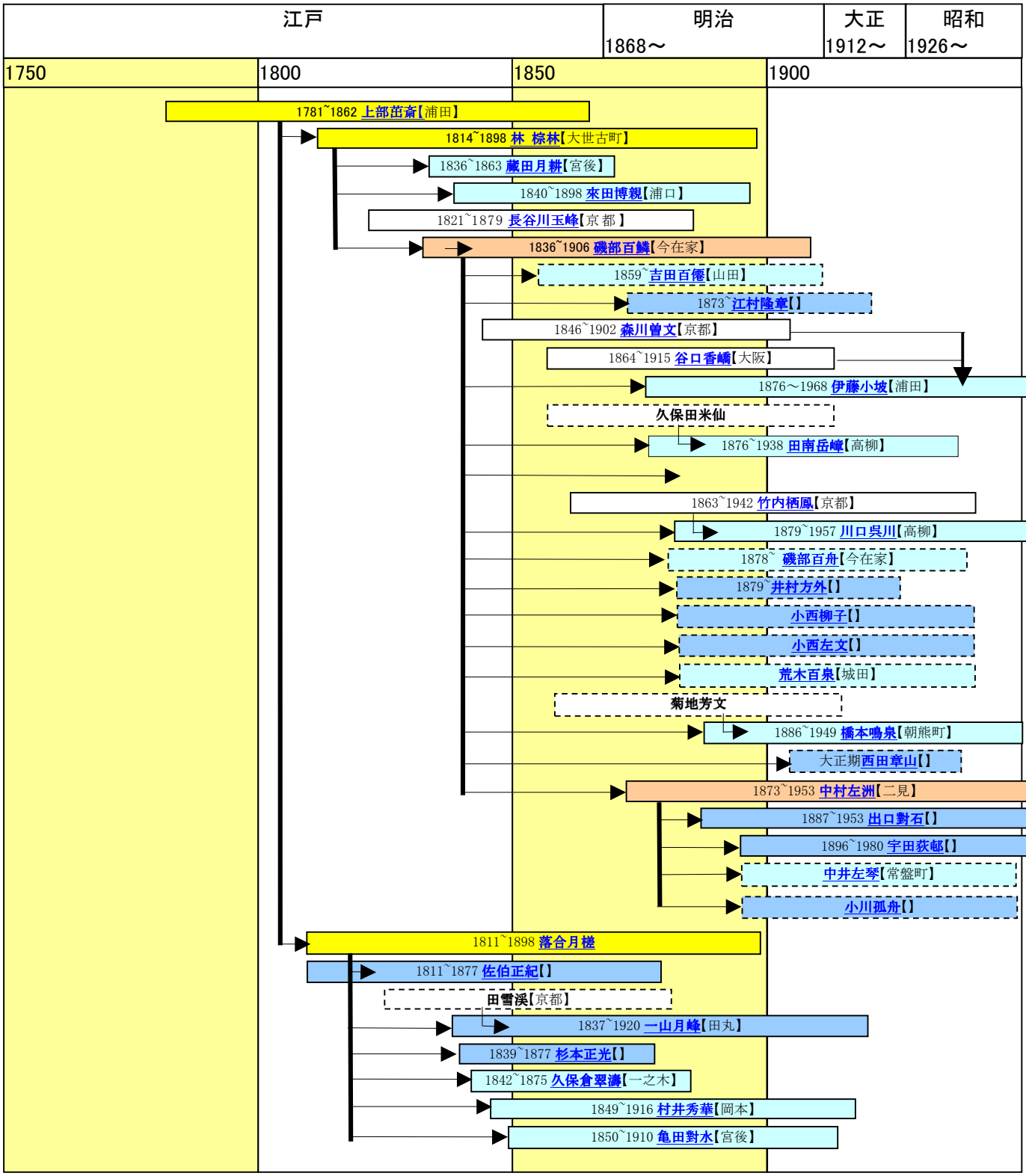
『楓下美人』伊藤小坡
（H 氏所蔵）

『行秋』小坡自題 伊藤小坡
妹誕生を祝い作画を直接
小坡に依頼したと聞いているが？
（伊勢市に寄贈済）

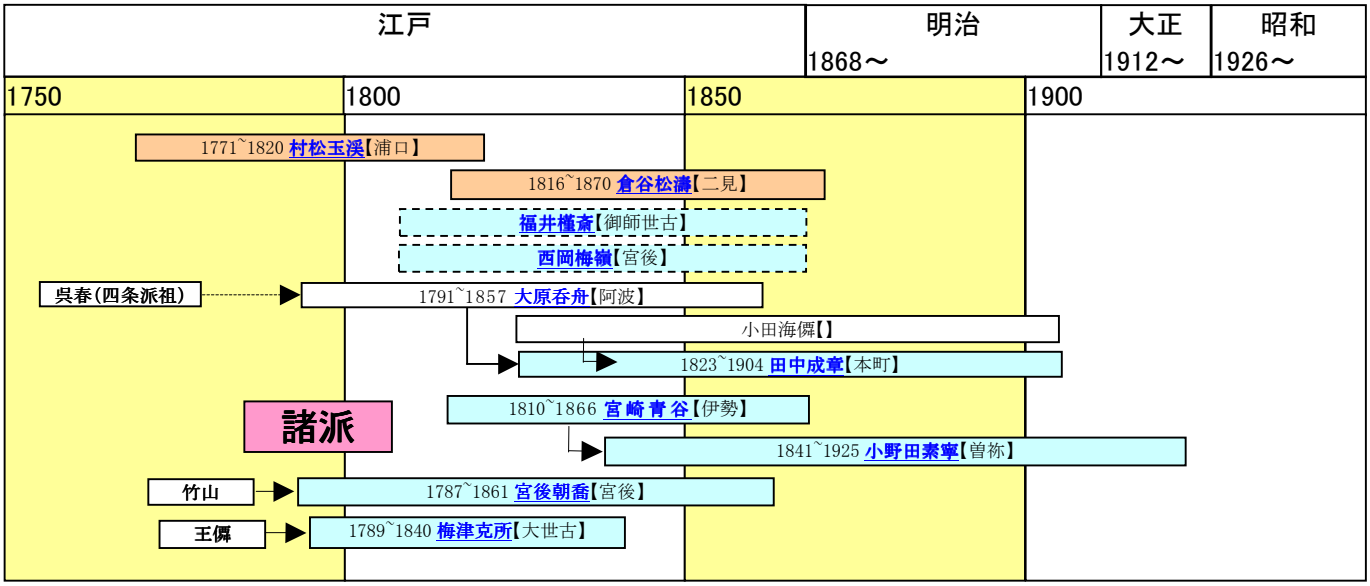


『加賀の千代』橋本鳴泉
（H 氏所蔵）

画人(四條・円山派2)系譜


江戸
明治
1868～
大正
1912～
昭和
1926～
1750
1800
1850
1900
1781~1862 上部苗斎【浦田】
1814~1898 林 椋林【大世古町】
1836~1863 蔵田月耕【宮後】
1840~1898 來田博親【浦口】
1821~1879 長谷川玉峰【京都】
1836~1906 磯部百鱗【今在家】
1859~吉田百僊【山田】
1873~江村隆章【】
1846~1902 森川曽文【京都】
1864~1915 谷口香嶠【大阪】
1876～1968 伊藤小坡【浦田】
久保田米仙
1876~1938 田南岳嶂【高柳】
1863~1942 竹内栖鳳【京都】
1879~1957 川口呉川【高柳】
1878~ 磯部百舟【今在家】
1879~井村方外【】
小西柳子【】
小西左文【】
荒木百泉【城田】
菊地芳文
1886~1949 橋本鳴泉【朝熊町】
大正期西田章山【】
1873~1953 中村左洲【二見】
1887~1953 出口對石【】
1896~1980 宇田荻邨【】
中井左琴【常盤町】
小川孤舟【】
1811~1898 落合月樓
1811~1877 佐伯正紀【】
田雪溪【京都】
1837~1920 一山月峰【田丸】
1839~1877 杉本正光【】
1842~1875 久保倉翠濤【一之木】
1849~1916 村井秀華【岡本】
1850~1910 亀田對水【宮後】

画人（諸派）系譜


江戸
明治
1868～
大正
1912～
昭和
1926～
1750
1800
1850
1900
1771~1820 村松玉渓【浦口】
1816~1870 倉谷松濤【二見】
福井櫂斎【御師世古】
西岡梅嶺【宮後】
呉春（四条派祖）
1791~1857 大原呑舟【阿波】
小田海僊【】
1823~1904 田中成章【本町】
諸派
1810~1866 宮崎青谷【伊勢】
1841~1925 小野田素寧【曽祢】
竹山
1787~1861 宮後朝喬【宮後】
王僊
1789~1840 梅津克所【大世古】

画人（四條・円山派2、諸派）略歴

林 棕林 （はやし そうりん） 松田維幸、刑部、善郷、白眉	【享生没年】85歳 1814～1898 文化11～明治31【生地】大世古町【住地】 【系譜】山田神職松田幸益の男。大世古町村田家に生まれ、後、林 尚信の養嗣となり宮後に住む。【略歴】 【書画暦】幼少より上部茁斎につき、後横山清暉の門に入りて画を学び、孜々励精して写生を積むこと十年、三十余巻を成した。天保6年尾三遠（尾張・三河・遠江）諸州を遊歴し、又井伊侯に遇せられて其江戸桜田邸に滞留し、文晁、渡辺華山、米庵、南湖、椿 椿山等と交りて大に得る所があった。安政の頃より南画に転じて画風一変した。80の時有桶川宮殿下の命により、松鶴の大幅を図して上り、端渓の大硯を賜り、伊藤春畝より實硯堂の三字を書して贈られた。門人多く、磯部百鱗、中野素梅、爲田秋斎、溝口春塘等を出した。当て監田隨斎の余詩中「棕櫚花底酔薫風」とあるを取り彼塾に名づけて酔薫社と称した。
蔵田月耕 （くらた げっこう） 國寧、左京	【享生没年】28歳 1836~1863 天保7～文久3【生地】西河原（宮後）【住地】同 【系譜】國倫の男【略歴】 【書画暦】林棕林門人、画、四条派
來田博親 （きただ ひろちか）	【享生没年】59歳 1840~1898 天保11～明治31【生地】浦口【住地】同【系譜】讃岐の男 【略歴】町吏にして町の財政整理に当り功労あった。 【書画暦】書を松田雪柯に、画を林綜林に学んだ。
長谷川玉峰 （はせがわ ぎょくほう） 長盈・師盈、士進	【享生没年】58歳 1821~1879 文政4～明治12【生地】京都【住地】【系譜】 【略歴】 【書画暦】幕末の四条派の画家 松村景文の門に学び、花鳥画を能くした。
磯部百鱗 （いそべ ひゃくりん） 鐵太郎、愛之助、九大夫、華水、竹所、五瀬 牛谷坂にあった百鱗の碑（今はない）花水翁之碑	【享生没年】71歳 1836~1906 天保7年～明治39年【生地】今在家【住地】 【系譜】元延の長男 【略歴】内宮の御師であった宇治今在家の磯部家に生まれる。八羽光穂、鷹羽龍平につき漢学を修め、爲田只青につき俳諧を学んだ。また故実を中村竹渓に質し、幾年ならずして其技大に進んだ。中年職を神宮に奉じ、旁ら其技の研鑽に余年なかった。 【書画暦】四条・円山派。画は初め 林 棕林に学び、のち京都に出て、長谷川玉峰を師とし、四条・円山派の流麗な画法を樹立し歴史画家として著名になる。遂に東洋絵画会学術委員に挙げられ、或いは京都博覧会に、或いは東洋絵展覧会に其の作品を出して、金賞、銅賞等を授けられた。明治38年征露戦捷奉告のため明治天皇伊勢行幸の砌、其の全幅の精神を籠めたる二見浦の彩画を献納し、天覧に入れ奉つた。嘗（かっ）て明治10年頃、舊師職の一部士族編入を出願せんとした際、宇治地方の惣代は百鱗に面会し、喋喋其有益なることを説明し連署を求めた。百鱗之に応ぜず、惣代交々来つて之を強請するに及び、先年神宮の奉仕を辞し、専心画道に精進する自分には、この五十鈴川辺の画室に、位置管の画筆を侶とし、天然の美を愛するが本願なり、族籍の如き毫（すこし）も関する所なしと、拒絶して顧みなかったという。画友に久保田米仙、今尾景年、鈴木松年、川端玉章等あり。門人に中村左洲、田南岳嶂、川口呉川等を出した。
吉田百僊 （よしだ ひゃくせん） 勝吉、雅楽、海老翁	【享生没年】1859～安政6～不明【生地】宇治山田生【住地】【系譜】【略歴】 【書画暦】四条・円山派。磯部百鱗に師事する。三重絵画協会を組織して後の地方絵画発展に貢献する。
江村隆章 （えむら りゅうしょう）	【享生没年】1873~明治6年～不明【生地】【住地】【系譜】 【略歴】 【書画暦】四条・円山派。
森川曽文 （もりかわ そぶん） 英絢、士倩	【享生没年】56歳 1846～1902 弘化3～明治35【生地】京都【住地】【系譜】【略歴】 【書画暦】日本画家。初め前川五嶺の門に学び、のち長谷川玉峰に師事する。京都府画学校教諭を務め、内国勧業博覧会・絵画共進会や海外の博覧会で受賞する。四条派の正統を継ぎ、山水花鳥を得意とした。門人に三宅呉暁・深田直城らの俊才がいる

谷口香嶠 （たにぐち こうきょう） 嶠之助	【享生没年】51歳 1864～1915 元治元～大正【生地】大坂【住地】【系譜】【略歴】 【書画暦】日本画家。幸野楳嶺に師事し、菊池芳文・竹内栖鳳・都路華香と共に楳嶺門の四天王と称される。有職故実に精通し歴史画を得意とする。京美工・京都絵専教授。
伊藤小坡 （いとう しょうは） 佐登(さと) 牛谷坂にある小坡美術館	【享生没年】92歳 1876～1968 明治9～昭和43【生地】浦田町【住地】 【系譜】猿田彦神社宮司の宇治土公貞幹の長女 【略歴】 【書画暦】はじめ磯部百鱗に学ぶが、明治31年頃、京都に出て森川曽文に学び、のち谷口香嶠に師事。明治41年香嶠門下の伊藤鷺城と結婚。第9回文展に「製作の前」を出品し、入賞三等賞となる。竹内栖鳳の竹杖会に入り上村松園と並ぶ閨秀(けいしゅう女流の意)画家として知られた。歴史風俗画を得意とする。新文展無鑑査。
田南岳嶂(璋) （たなん がくしょう） 錦太郎	【享生没年】62歳 1876~1938 明治9～昭和3【生地】【住地】高柳【系譜】 【略歴】 【書画暦】久保田米仙門人 画
磯部百舟 （いそべ ひゃくしゅう	【享生没年】1878~ 明治11～不明【生地】【住地】宇治今在家【系譜】磯部百鱗の三男 【略歴】 【書画暦】四条・円山派。
竹内栖鳳 （たけうち せいほう） 恒吉、棲鳳、霞中庵	【享生没年】79歳 1863～1942 文久3～昭和17年【生地】京都【住地】【系譜】 【略歴】 【書画暦】日本画家。土田英林・幸野楳嶺の門に学ぶ。京都府画学校卒。横山大観・川合玉堂と並んで日本画壇の大御所的存在であり、多くの名品を残すとともに、京都画壇の総帥として多くの逸材を育成、日本画の近代化に大きく貢献した。京都絵専教授。文展審査員。文化勲章受章。
川口呉川 （かわぐち ごせん）	【享生没年】明治12～昭和32【生地】高柳【住地】【系譜】 【略歴】高柳の商家に生まれる。和歌、狂歌、俳句も好み、和歌を井上頼文、俳句を大主耕雨に師事する。 【書画暦】四条・円山派。磯部百鱗に師事し、四条・円山派を学ぶ。後、京都の竹内栖鳳について写生画を研究する。また京都絵画専門学校に通う。動物画を得意とし、のち伊勢の風俗を好んで描く。
井村方外 （いむら ほうがい）	【享生没年】1879~明治12～【生地】【住地】【系譜】 【略歴】 【書画暦】磯部百鱗門下
久保田俊章 （くぼた しゅんしょう）	【享生没年】【生地】【住地】【系譜】 【略歴】 【書画暦】四条・円山派
小西柳子 （こにし りゅうし）	【享生没年】【生地】【住地】【系譜】 【略歴】 【書画暦】四条・円山派。
小西左文 （こにし さぶん）	【享生没年】【生地】【住地】【系譜】 【略歴】 【書画暦】四条・円山派。
荒木百泉 （あらき ひゃくせん）	【享生没年】【生地】【住地】東外城田村(上地町城田)【系譜】 【略歴】 【書画暦】画人 磯部百鱗の門人
橋本鳴泉 （はしもと めいせん） 直左衛門	【享生没年】63歳 1886~1949 明治19～昭和24【生地】朝熊町【住地】【系譜】【略歴】 【書画暦】円山派。幼少より画才があり磯部百鱗に見込まれて教養を受ける。百鱗没後は京都に出て四条派の大家である菊地芳文の門に入る。四条派に属したがその画風はやや趣を異とするとの評があり、その鮮婉の筆致には定評がある。人物・歴史画を得意とする。
西田章山 （にしだ しょうざん）	【享生没年】大正頃【生地】【住地】【系譜】 【略歴】 【書画暦】四条・円山派

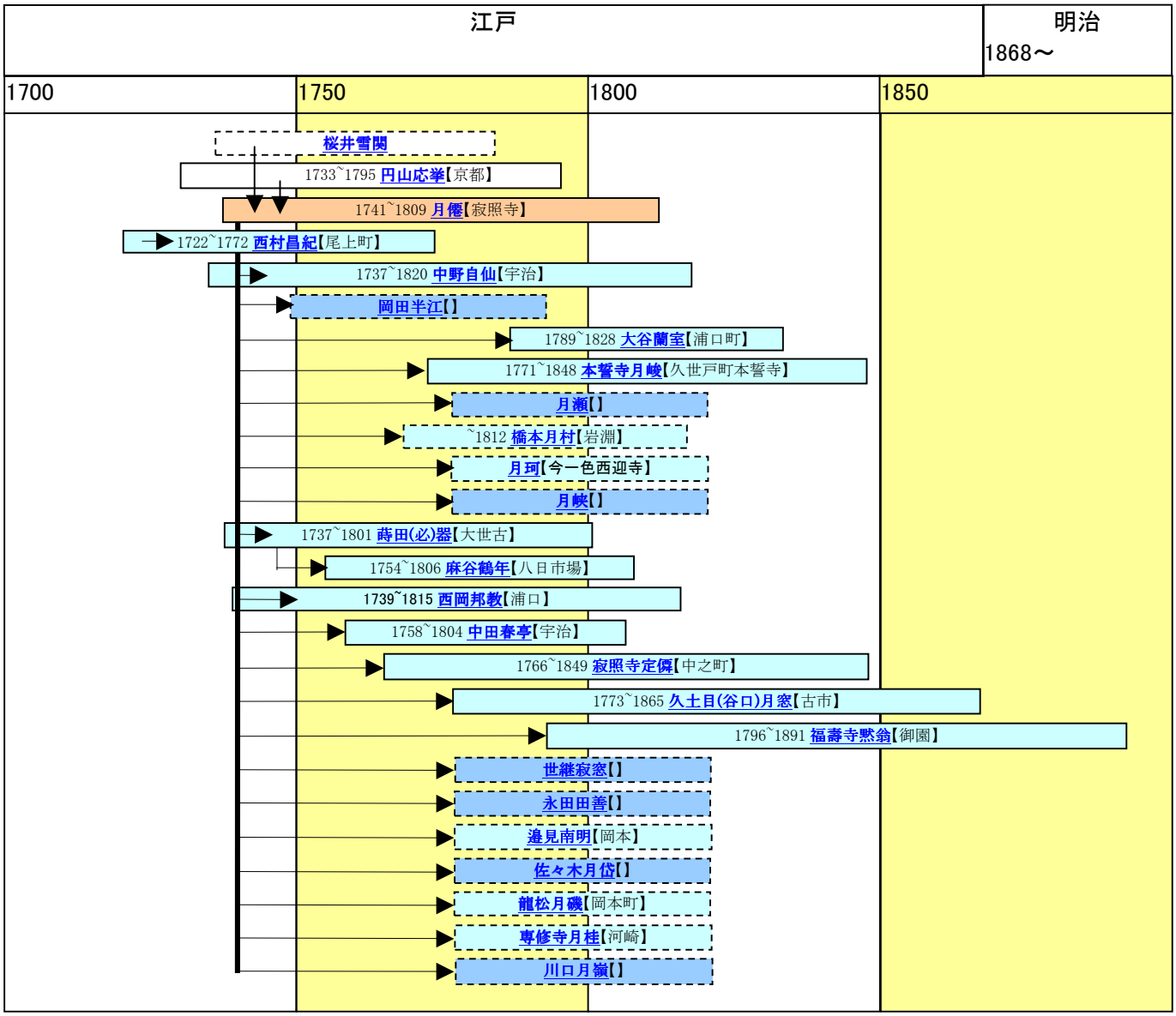
中村左洲 （なかむら さしゅう） 作十	【享生没年】81歳 1873～1953 明治6～昭和28【生地】二見【住地】【系譜】【略歴】 【書画暦】磯部百鱗に師事、四条派を学ぶ。終生二見の地にあって山水や鯛の絵を多く残した。巽画会会員。岐阜絵画展一等賞受賞。文展入選。
出口對石 （でぐち たいせき）	【享生没年】1887~1953 明治20～昭和28【生地】【住地】【系譜】 【略歴】 【書画暦】中村左州門下
宇田荻邨 （うだ てきそん）	【享生没年】1896~1980 明治29～昭和55【生地】【住地】【系譜】 【略歴】 【書画暦】中村左州門下
中井左琴 （なかい さきん） 武一	【享生没年】【生地】【住地】常盤 横浜【系譜】 【略歴】 【書画暦】画 四條派
小川孤舟 （おがわ こしゅう）	【享生没年】【生地】【住地】【系譜】 【略歴】 【書画暦】四条・円山派
落合月槎 （おちあい げっさ） 俊明、夙夜	【享生没年】88歳 1811～1898 文化8～明治31【生地】大野木村（内城田）【住地】岡本【系譜】中西某の子息【略歴】 【書画暦】四条・円山派。上部茁斎の門人にて円山派の画を能くし、資性温厚、門人を教育するに妙を得、其下に逸材を輩出した。
佐伯正紀 （さえき まさのり）	【享生没年】1811~1877 文化8～明治10【生地】【住地】【系譜】 【略歴】 【書画暦】落合月槎門人 絵画
一山月峰 （いちざん げっぽう） 幸太郎、泰道	【享生没年】84歳 1837~1920 天保8～大正9 【生地】尾張刈屋町【住地】田丸上田辺【系譜】 【略歴】上田辺村知足庵の住職。老後は住寺の後方の山林中に草庵を結びで画室とし、雅客と対酌清談することを楽み。又余財を以て堂宇を修繕し、檀家七十余戸に阿弥陀の像を画いて配布した。 【書画暦】性画を好み、初めは丹波（京都）の人、田雪渓に学んだが、後、落合月槎について習ひ。
杉本正光 （すぎもと まさみつ）	【享生没年】1839~1877 天保10～明治38【生地】【住地】【系譜】 【略歴】 【書画暦】落合月槎門下
久保倉翠濤 （くぼくら すいとう） 弘信、嘉門、成卿	【享生没年】33(24)歳 1842~1875 天保13～明治8【生地】一之木【住地】岩淵 【系譜】松井正安の五男、弘道の養嗣【略歴】 【書画暦】上部茁斎、落合月槎、林棕林に学びて画を能くし、川上冬崖について洋画を習ひ、明治7年8月陸軍省図画教授となった。
村井秀華 （むらい しゅうか） 與四郎	【享生没年】68歳 1849~1916 嘉永2～大正5【生地】岡本【住地】一之木 【系譜】高木内蔵の三男、常之の養嗣 【略歴】度會郡書記となり、学務衛生両課に勤むること三十有余年、小学校の設備、普及等に尽力した。 【書画暦】村瀬双石、松田雪柯、落合月槎について学び、書及画を能くした。
亀田對水 （かめだ たいすい） 三衛	【享生没年】61歳 1850~1910 嘉永3～明治43【生地】【住地】西河原（宮後） 【系譜】春門の長男【略歴】神宮禰宜従六位に至った。 【書画暦】画を上部茁齋及び落合月槎に就きて学び、傑作少くなかった。
村松玉渓 （むらまつ ぎょくけい） 行厚、藤太夫	【享生没年】50歳 1771~1820 明和8～文政3【生地】浦口【住地】一之木 【系譜】小森厚周の三男【略歴】 【書画暦】四條派、画
倉谷松濤 （くらたに しょうとう） 彦光、三郎太夫、掃部、萬古軒	【享生没年】55歳 1816~1870 文化13～明治3【生地】二見町松下【住地】浦田 【系譜】奥田儀右衛門の長男 【略歴】田邊祝部 【書画暦】絵画、四条派

福井槿斎 （ふくい きんさい）	【享生没年】【生地】【住地】御師世古（？）【系譜】 【略歴】 【書画暦】四條派 画
西岡梅嶺 （にしおか ばいりょう） 倫成、子渓	【享生没年】【生地】【住地】西河原（宮後）【系譜】 【略歴】 【書画暦】画 四條派
大原呑舟 （おおはら どんしゅう） 鯤、鯤崘、崑崙	【享生没年】66歳 1791~1857 寛政３～安政４【生地】阿波【住地】【系譜】【略歴】 【書画暦】江戸後期の画家。京都に出て大原呑響の養子となる。呉春の門人柴田義董に画法を学び、山水・人物を能くした。筆力は力強く伸び伸びとしている。
田中成章 （たなか なりあき） 正知、助六太夫、司馬、子勇、梅甫	【享生没年】82歳 1823~1904 文政6～明治37 【生地】松阪【住地】田中中世古（本町）、松阪【系譜】長谷川次郎兵衛の次男 【略歴】明治2年山田組年寄を申付けられ、豊受太神宮權圭典となり，同6年12月少講義を兼ねた。蹴掬及び茶道にも悉しく、茶室を建てて聚蟻庵と命名した。鷹を愛し庭内に鷹部屋を建てて霜奉亭と称し、日々従僕と共に市中を巡りて其飼料の雀を刺捕へたが、其熟練せること人皆感ぜざるはなかった。又金魚を飼ひ、其飼育法の上手なることも人のよく知るところであった。明治19年松坂に移住い、専ら画事に従った。 【書画暦】初め画を小田海僊に学び梅圃と号し、後 大原呑舟の門に入りて成章と改め、又著色の法を疋田宇隆に学んだ。其他鐵筆を福井瑞隠に学ぶ。
宮崎青谷 （みやざき せいこく） 定憲、弥三郎、子達	【享生没年】56歳 1810~1866 文化７～慶応2【生地】伊勢【住地】【系譜】 【略歴】斎藤拙堂・猪飼敬所・頼山陽に学び儒学を修め、のち昌平校に入る。 【書画暦】江戸後期の画家。
小野田素寧 （おのだ そねい） 典禮、盤山	【享生没年】85歳 1841~1925 天保12～大正14【生地】曾禰【住地】同 【系譜】雲井紀平の長男、市太夫の養嗣 【略歴】斎藤拙堂及土井贅牙に漢学を、野々口隆正に和歌を，京都の新宮凉民に就きて医術を修めた。仁術の余暇詩を楽んだ。 【書画暦】宮崎青谷に画を学ぶ。
宮後朝喬 （みやじり ちょうきょう） 高朝、袴田館磯水	【享生没年】75歳 1787~1861 天明7～万延2【生地】宮後【住地】同【系譜】朝栄（あさよし）の男 【略歴】外宮禰宜に補し、長官に進み正三位に至り、後特旨を以て従二位に陞（のぼ）つた。久守に歌を学びて孰（いず）れもよくした。 【書画暦】二代目濱村蔵六につきて篆刻を学び、竹山に画を学びて之をよくした。
梅津克所 （うめづ こくしょ） 鐵之助、公益宇蔵、修蔵、主鈴、平子、蘭玉	【享生没年】52歳 1789~1840 寛政元～天保11【生地】大世古【住地】同 【系譜】六車の男【略歴】常に花圃を培溉して楽みとした。 【書画暦】詩賦を喜び、且書及び墨竹に名あり、年11にして千字文を書し、夙に神童の称があった。 書は蒔田必器に従い、画は王僊に学んだ。

画：月僊派

『養拙書月僊画双軸』月僊　寺井養拙
（伊勢市に寄贈済）

画人(月僊派)系譜


江戸
明治
1868～
1700
1750
1800
1850
桜井雪関
1733~1795 円山応挙【京都】
1741~1809 月僊【寂照寺】
1722~1772 西村昌紀【尾上町】
1737~1820 中野自仙【宇治】
岡田半江【】
1789~1828 大谷蘭室【浦口町】
1771~1848 本誓寺月峻【久世戸町本誓寺】
月瀬【】
~1812 橋本月村【岩淵】
月珂【今一色西迎寺】
月峡【】
1737~1801 蒔田(必)器【大世古】
1754~1806 麻谷鶴年【八日市場】
1739~1815 西岡邦教【浦口】
1758~1804 中田春亭【宇治】
1766~1849 寂照寺定僊【中之町】
1773~1865 久土目(谷口)月窓【古市】
1796~1891 福壽寺黙翁【御園】
世継寂窓【】
永田田善【】
逢見南明【岡本】
佐々木月岱【】
龍松月磯【岡本町】
専修寺月桂【河崎】
川口月嶺【】

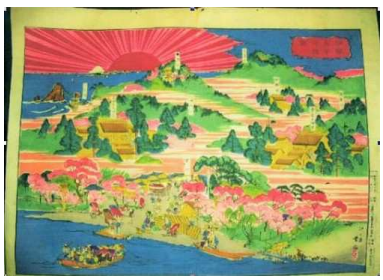
画人（月僊派）略歴

桜井雪関 （さくらい　せっかん）	【享生没年】【生地】【住地】【系譜】 【略歴】 【書画暦】円山派　月僊が門下
円山応挙 （まるやま　おうきょ） 岩次郎、主水、仲均、仲選、一嘯、夏雲、仙嶺、僊斎	【享生没年】63歳 1733~1795 享保18～寛政7【生地】丹波（京都）【住地】【系譜】 【略歴】生家は丹波桑田郡(京都府)の農家。 【書画暦】四条・円山派。円山派の創始者。狩野(かのう)派の石田幽汀(ゆうてい)に学ぶ。遠近法などをとりいれて独自の写生画を創出した。代表作に「雪松図」(国宝)、「七難七福図巻」、大乗寺の障壁画
月僊 （げっせん） 玄瑞、元瑞、玉成、祥譽	【享生没年】69歳 1741～1809 寛保元～文化6【生地】尾張名古屋 【住地】中乃地蔵寂照寺【系譜】丹下八左衛門の男 【略歴】尾張国名古屋の味噌商の家に生まれた。乞食月僊と呼ばれたが、1774 年（安永3年）寂照寺を再興してそこで没した。 【書画暦】浄土宗の僧となって江戸増上寺に住み、桜井雪関(關)に画を学んだ。その後上洛して知恩院に住し、円山応挙に師事して写実的画風の感化を受けた。また、与謝蕪村の影響も受け、さらに諸派に学んで独自の画風を確立した。京都妙法院・愛知県岡崎市昌光律寺・寂照寺に作品が残されている。
寺井養拙 （てらい　ようせつ） 辰、子共、維堂	【享生没年】72歳 1640~1711 寛永17～正徳元【生地】【住地】京都【系譜】【略歴】 【書画暦】江戸時代前期-中期の書家。 佐々木志頭磨に師事。のち明の董其昌(とうきしょう)風を学んで一家をなし、養拙流とよばれた。当時、看板などにこの書体がよくもちいられた。
岡田半江 （おかだ　はんこう）	【享生没年】【生地】【住地】【系譜】 【略歴】 【書画暦】月僊門人
西村昌紀 （にしむら　まさのり） 文網、猪兵衛、雷州	【享生没年】59歳 1722~1772 享保7～安永元【生地】妙見（尾上町）【住地】 【系譜】昌佳の七男【略歴】 【書画暦】月僊門人　画、篆刻
中野自仙 （なかの　じせん）正長、久忠、茂兵衛、鶴居	【享生没年】84歳 1737~1820 元文2～文政3【生地】宇治【住地】同【系譜】正常の次男 【略歴】 【書画暦】月僊門人　書画
大谷蘭室 （おおたに　らんしつ）葆光、尚寿、八郎平、壽堂	【享生没年】39歳 1789~1828 寛政元～文政11【生地】【住地】上中之郷（浦口）【系譜】 【略歴】 【書画暦】月僊門人　画
本誓寺月峻 （ほんしょうじ　げっしゅん）	【享生没年】1771~1848 明和8～嘉永元【生地】【住地】久世戸町本誓寺【系譜】 【略歴】天明5年正月15歳の時江戸増上寺現誉満大僧正の室に入りて修学、寛政3年11月統春誉大僧正につきて伝宗伝戒、享和3年より文化9年迄本誓寺願譽和尚に隋身、同9年11月本誓寺の住職となり、寺内の通路を開修し、築山を造成した。 【書画暦】月僊につきて画を学び、常に彩筆を揮った。
月瀬 （げっせ）	【享生没年】【生地】【住地】【系譜】 【略歴】 【書画暦】月僊門人
橋本月村 （はしもと　げっそん） 文成、良弼、九兵衛、厳夫、錦江	【享生没年】~1812～文化9【生地】【住地】岩淵【系譜】 【略歴】 【書画暦】月僊門人　画
月珂 （げっか）	【享生没年】【生地】【住地】今一色西迎寺【系譜】 【略歴】 【書画暦】絵画月僊風
月峡 （げっきょう）	【享生没年】【生地】【住地】【系譜】 【略歴】 【書画暦】月僊門人

蒔田 器 （まきた うつわ） 必器、田器、喜兵衛、亀六器、**暢斎**、彪山、箕山、金陵	【享生没年】64歳 1737~1801(明和5=1768 と書かれているが)元文2～享和元【生地】【住地】大世古、尾上山西麓【系譜】畑井正興の男、宗孝の養嗣【略歴】家は代々龍太夫の代官であった。 【書画暦】幼時より書を好み、初め河崎南皐に従ひ、長じて書及び鉄筆を韓天壽に受け、書法を東江源鱗に問ひて研鑽し、大に名声を掲げた。又画を月僊に学び、晩年尾上山の西麓に隠栖して其處を小虎渓と称した。或時江戸の某書家が参宮に来り、龍太夫の下女が持てる買物帳の筆蹟を見て田器の名を知った。後年田器江戸に出でて偶然其書家の門を叩きたるに、山田には田器といふ書家が居る筈ぢやと先年の物語りをなし、田器の名乗るを聞いて其奇遇に感じたといふ話がある。
麻谷鶴年 （あさたに つるとし） 弥右衛門、寿、朋斎、黙斎	【享生没年】53歳 1754~1806 宝暦4～文化3【生地】八日市場【住地】同 【系譜】弥右衛門幸家の男 【略歴】菓子舗橘屋の主人。漢学を橋村痴亭に、風流韻事を楽んだ。 【書画暦】画を**蒔田必器**に学ぶ。
西岡邦教 （にしむら ほうきょう） 栄弘、右兵衛、景天	【享生没年】77歳 1739～1815 元文4～文化12【生地】浦口【住地】一志久保 【系譜】家号 海老屋【略歴】 【書画暦】月僊について画法を極め、同門第一の高弟となる。屋号を海老屋といったので、海老屋月仙の称がある。門下に喜多村邦穀、古森痴雲などがいる。
中田春亭 （なかた しゅんてい） 康平、與三右衛門、匠作、樂邦	【享生没年】47歳 1758~1804 宝暦8～文化元【生地】【住地】宇治、京都 【系譜】義連の三男【略歴】 【書画暦】月僊門人、書画
寂照寺定僊 （じゃくしょうじ ていせん）	【享生没年】83(80)歳 1766~1849 明和3～嘉永2【生地】【住地】中之地蔵 【系譜】寂照寺九世【書画暦】 【略歴】月僊の弟子となり、画を能くし，又仏典漢籍に通じ、最華厳経に精しかった。師月僊の碑文は其選する所にして、其文中「不肖事師最久、受恩最深、又恭継席寂照」とあり、老後妙見町清水世古の超勝寺に退隠して余生を送った。
久土目(谷口)月窓 （くどめ げっそう） 世達、孟泉、痴絶庵	【享生没年】93歳 1773~1865 安永2～慶應元【生地】古市【住地】江戸 【系譜】谷口姓【略歴】米穀商 【書画暦】性画を好み、月僊に師事して其奥儀に達し、薩摩藩の抱画師となった。月僊は法を定僊に丹青（絵の具で描くこと）を月窓に、各其真髄を伝へたと云はれる。
福壽寺黙翁 （ふくじゅじ もくおう）	【享生没年】96歳 1798~1891 寛政10～明治24【生地】【住地】御園村大字樫原【系譜】 【略歴】福壽寺を中興した。 【書画暦】常に月僊を仰慕し、同派の画を描き、又書をもよくした。
世継寂窓 （よつぎ じゃくそう）	【享生没年】【生地】【住地】【系譜】 【略歴】 【書画暦】月僊門人
永田田善 （ながた たぜん）	【享生没年】【生地】【住地】【系譜】 【略歴】 【書画暦】月僊門人
邉見南明 （へんみ なんめい） 箕、籟夫、藍田、胎僊	【享生没年】【生地】【住地】岡本、東町【系譜】【略歴】 【書画暦】月僊の門人にして其高弟の一人で、南明月僊の称があった。後南画を描き其画風瓢逸にして雅味多かった。
佐々木月岱 （ささき げったい）	【享生没年】【生地】【住地】【系譜】 【略歴】 【書画暦】四条・円山派 月僊の門流
龍松月磯 （たつまつ げっき） 正憲	【享生没年】【生地】【住地】岡本町【系譜】龍松愚園（正厚）の長男。 【略歴】父は蒔田必器の門人として書道で高名である。 【書画暦】四条・円山派 月僊の門流。月僊の門人の一人。
専修寺月桂 （せんしゅうじ げっけい）	【享生没年】【生地】【住地】河崎【系譜】 【略歴】 【書画暦】月僊門人 画
川口月嶺 （がわぐち げつりょう）	【享生没年】【生地】【住地】【系譜】 【略歴】 【書画暦】月僊門人

画：浮世絵派

内宮五十鈴川之図（明治11年）
喜多村豊景



伊勢参宮順路図（明治13年11月）
喜多村豊州

伊勢参宮名所之図
（明治14年11月）横地長重

伊勢御神楽之図（明治11年6月）
喜多村豊景

伊勢御神楽之図（明治14年6月）
喜多村豊州

伊勢御神楽之図（明治14年6月）
横地長重

高楼聚遠景（聚遠楼＝古市麻吉旅館から観た景色を歌った歌が書かれています）喜多村豊景

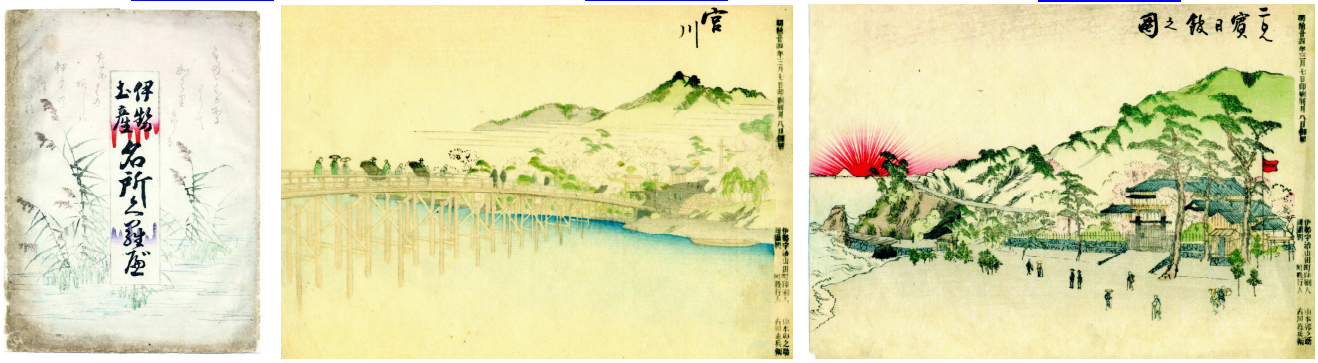
伊勢古市踊之図（明治11年）
喜多村豊景

伊勢古市備前屋桜花楼踊之図
（明治21年）喜多村豊谷

二見浦之図
喜多村豊景

二見浦之図（明治11年）
喜多村豊景

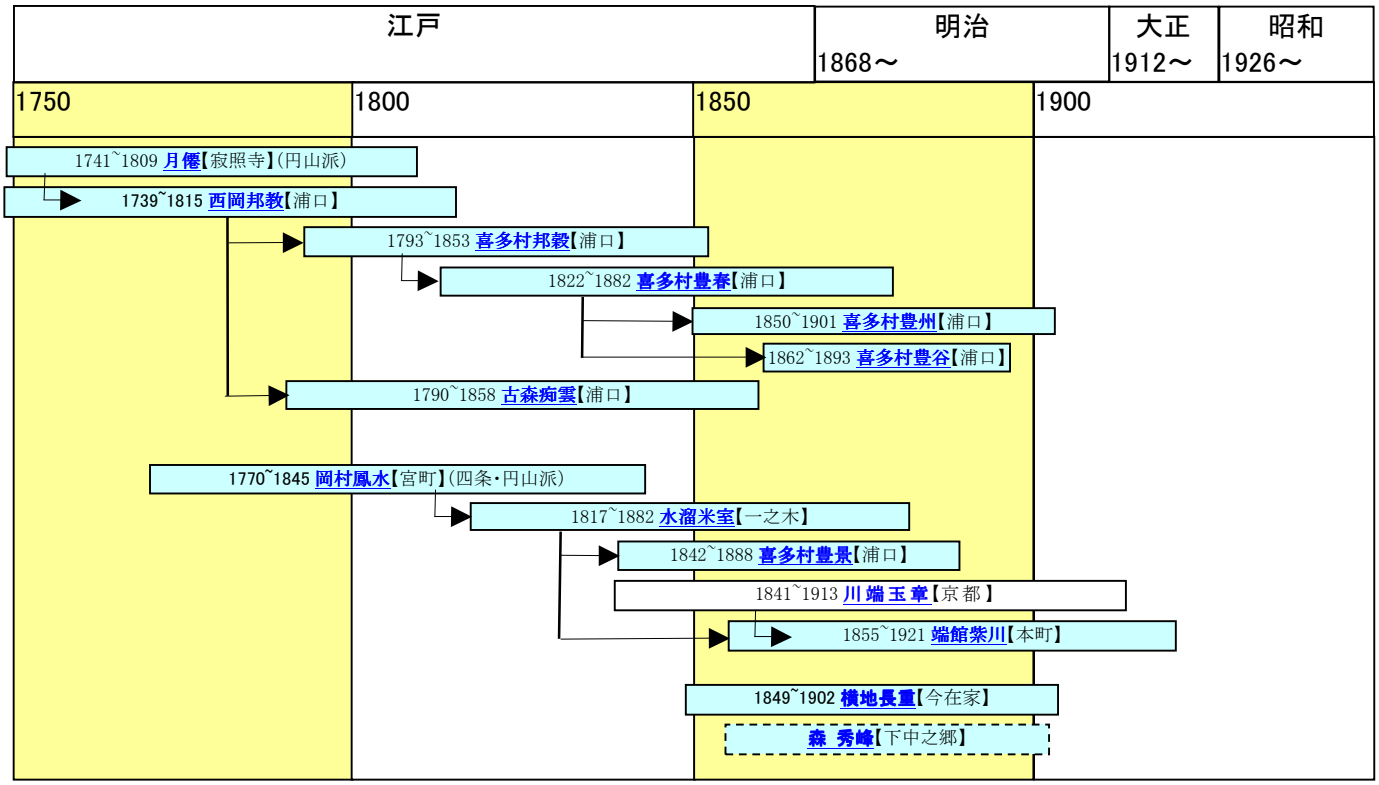
伊勢二見浦真景（明治39年3月）
喜多村豊景



伊勢土産名所くらべ（明治24年3月）8葉 森 秀峰

版画ならびに題名（発行年）等は飯田良樹氏著「伊勢御土産版画の浮世絵師（明治期）」より
許可を得て転載しています。

画人（浮世絵派）系譜



画人（浮世絵派）略歴

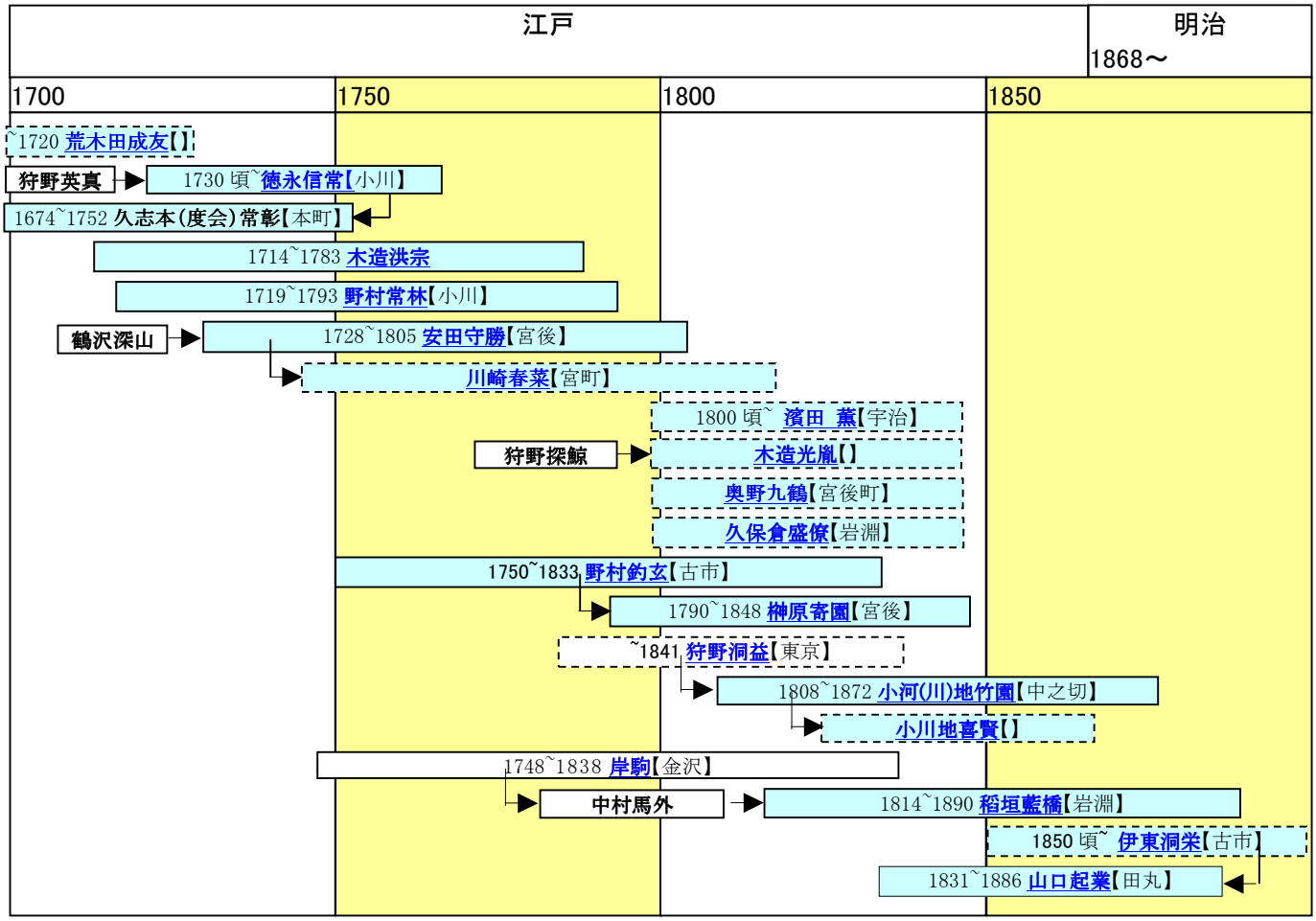
月僊 （げっせん） 玄瑞、元瑞、玉成、祥譽	【享生没年】69歳 1741～1809 寛保元～文化6【生地】尾張名古屋【住地】中乃地蔵寂照寺 【本名】玄瑞、元瑞【通称】【幼名】【別称】【字名】玉成、祥譽【雅号】【系譜】丹下八左衛門の男 【略歴】尾張国名古屋の味噌商の家に生まれた。乞食月僊と呼ばれたが、1774年（安永3年）寂照寺を再興してそこで没した。 【書画暦】浄土宗の僧となって江戸増上寺に住み、桜井雪関(關)に画を学んだ。その後上洛して知恩院に住し、円山応挙に師事して写実的画風の感化を受けた。また、与謝蕪村の影響も受け、さらに諸派に学んで独自の画風を確立した。京都妙法院・愛知県岡崎市昌光律寺・寂照寺に作品が残されている。
西岡邦教 （にしむら　ほうきょう） 栄弘、右兵衛、景天	【享生没年】77歳 1739～1815 元文4～文化12【生地】浦口【住地】一志久保 【系譜】家号　海老屋【略歴】 【書画暦】月僊について画法を極め、同門第一の高弟となる。屋号を海老屋といったので、海老屋月仙の称がある。門下に喜多村邦穀、古森痴雲などがいる。
喜多村邦穀 （きたむら　ほうこく） 光敏、嘉四郎、嘉右衛門、違斎	【享生没年】61歳 1793~1853 寛政5～嘉永6【生地】浦口【住地】同【系譜】北村 【略歴】 【書画暦】西岡邦敦の門に入りて月僊の流を写し、後年浮世絵に志し、鳥居派の似顔絵を試みたが、元来正しき画系に運筆を会得せることとて，画背に卑俗ならざる色調の揺曳するあり、市井のありふれたる似顔絵師とは其選を異にした。浮世絵工の乏しき神都画界にありて異彩を放ったものであった。
喜多村豊春 （きたむら　ほうしゅん） 光政、嘉四郎、嘉讀、以徳	【享生没年】61歳 1822~1882 文政5～明治15【生地】浦口【住地】同 【系譜】邦穀の長男【略歴】 【書画暦】幼より絵画を好み、父邦穀に従ひ浮世絵鳥居派の画法を学び．自ら研究を積みて遂に大成するに至った。市の内外を問はず、其氏神祭礼の日に掲げし大額の似顔絵は主に豊春の描きたるものであった。

喜多村豊景 （きたむら　ほうけい） 與太郎、與太治、子明、四明	【享生没年】47歳 1842～1888 天宝13～明治21【生地】浦口【住地】同 【系譜】邦穀の次男【略歴】 【書画暦】浮世絵派　水溜米室に師事し、その丹青の妙大に嘱望されたが惜しくも早世した。明治2年天皇陛下行幸の際に、両太神宮遷御の絵巻物を謹写して天覧に供した。
喜多村豊州 （きたむら　ほうしゅう） 嘉四郎	【享生没年】52歳　1850～1901　嘉永3～明治34【生地】浦口【住地】同【系譜】豊春の長男 【略歴】 【書画暦】浮世絵派
喜多村豊谷 （きたむら　ほうこく） 政吉、光重、**彩雲**	【享生没年】32歳 1862~1893 文久2～明治26【生地】浦口【住地】八日市場 【系譜】豊春の四男【略歴】 【書画暦】浮世絵派及び山水花鳥画
古森痴雲 （こもり　ちうん） 厚保、善右衛門、国蔵、収蔵、善佐、保之丞、永言、宣三郎	【享生没年】69歳　1790～1858　寛政2～安政5【生地】浦口【住地】同【系譜】厚信の男、兄省吾の嗣 【略歴】また篆刻を好み俳諧を良くし当時知名の文人墨客と交遊する。 【書画暦】西岡邦教に画を、のち小俣蠖庵に南画を学び始其堂に入った。
岡村鳳水 （おかむら　ほうすい） 徽房、左膳、左全、粛叟	【享生没年】76歳　1770～1845　明和7～弘化2【生地】丹波亀山【住地】下中之郷(宮町) 【系譜】岩佐忠兵衛の三男、又太夫の嗣【略歴】 【書画暦】四条・円山派。早くより京都の円山応挙の門に入り十哲の一人に名を上げられたが、画友の笠井末清を訪ねて伊勢に来訪する。画会などを開いて長く滞在する間に縁あって下中之郷（現宮町）の岡村家に入る。神都伊勢に四条・円山派の根を下ろした最初の人で、門下に上部茁斎、榎倉杉斎、荘門為斎などがおり、円山派の画風が大いに広まることになった。
水溜米室 （みずため　べいしつ） 吉太郎、吉太夫、由義、季倶、蓬壷、表裏	【享生没年】66歳 1817~1882 文化14～明治15【生地】飯南郡 or 一之木【住地】浦口 【系譜】山路五兵衛の男、水溜吉太夫の養嗣 【略歴】後年、俳句を中瀬米牛に学び、遊戯文学にも志ざし冠句の名手であった。 【書画暦】少時岡村鳳水に従いて画道に入り、後京都に遊びて鳳儕の画塾に身を寄せ、又横山清暉の門に転じ、その運筆亦(また)一転化を来した、苦学切磋を怠らざりしことは、3年門を出でず、一年入浴せざりし程にて、四條派の技工精緻を極めた。
川端玉章 （かわばた　ぎょくしょう） 滝之助、敬亭、璋翁	【享生没年】72歳 1841~1913 天保12～大正2【生地】京都【住地】【系譜】 【略歴】 【書画暦】日本画家。11才の時中島来章の門に入り、のち小田海僊に学ぶ。上京して高橋由一・ワーグマンに油絵も習う。また円山応挙を慕い近代円山派の泰斗となる。画塾天真堂・川端画学校を設立、門下に結城素明・平福百穂らを輩出する。東美校教授・文展審査員・帝室技芸員。
端館紫川 （はしだて　しせん） 佐太郎、亀齢、	【享生没年】67歳 1855~1921 安政2～大正10【生地】田中中世古（本町）【住地】浦口東京 【系譜】神津謙助の長男、助太夫の養嗣【略歴】 【書画暦】幼にして水溜米室につきて画を学び、明治18年上京して川端玉章に従ひ、宮内省御用を奉仕し、御前揮毫の光栄を得たることあり。各種共進會等に出品して受賞した。
横地長重 （よこち　ながしげ） 寿丸、若狭、錦水、洞亀園、亀園	【享生没年】54歳 1849~1902 嘉永2～明治35【生地】館【住地】今在家【系譜】横地民徳の男 【略歴】文久元年権禰宜兼祇承宮掌大内人に補し、従五位に叙し、正五位下に及んだ。明治4年神宮改革によりて位記を返上したが、明治11年4月更に神宮宮掌に任じ、同14年3月主典、同33年10月権禰宜に進んだ。喜多寄青に俳諧を学び、また和歌も能くした。【書画暦】
森　秀峰 （もり　しゅうほう） 源二	【享生没年】【生地】【住地】下中之郷【系譜】 【略歴】 【書画暦】浮世絵

画：狩野派

狩野派（かのうは）は、室町時代中期（15世紀）から江戸時代末期（19世紀）まで約400年にわたって活動し、常に画壇の中心にあった日本絵画史上最大の画派である。室町幕府の御用絵師となった**狩野正信**を始祖とし、その子孫は、室町幕府崩壊後は織田信長、豊臣秀吉、徳川将軍などに絵師として仕え、その時々の権力者と結び付いて常に画壇の中心を占め、内裏、城郭、大寺院などの障壁画から扇面などの小画面に至るまで、あらゆるジャンルの絵画を手掛ける職業画家集団として、日本美術界に多大な影響を及ぼした。Wikpedia より

画人（狩野派）系譜



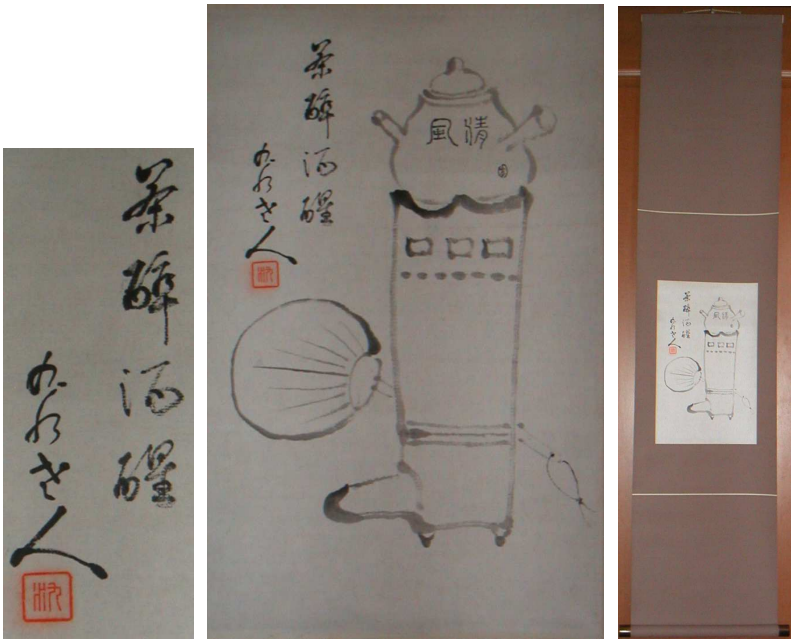
画人（狩野派）略歴

荒木田成友 （あらきだ なりとも）	【享生没年】~1720～享保5【生地】【住地】【系譜】榎倉武季の男 【略歴】 【書画暦】画 狩野派の名手
徳永信常 （とくなが のぶつね） 治郎左衛門	【享生没年】1730 頃生~享保頃～【生地】【住地】小川【系譜】 藤原氏【略歴】 【書画暦】狩野英真門人 画 羽書裏絵の名手
久志本（度会）常彰 （くしもと つねあき） （わたらい つねあき） 延守、常昭、縫殿、主馬、鶯谷、芸亭	【享生没年】78歳 1674~1752 延宝2～宝暦2【生地】田中（本町）【住地】四谷 【系譜】河崎延貞の次男、継彦の養嗣 【略歴】家学を父河崎延貞にうけて和漢の学に詳しく、歌道の含蓄もあり、茶道を千宗旦に受けた。外宮権禰宜に補し、同四位下に叙したが、身神官重代家たるにも拘らず、禰宜に補すれば禁河の制によって宮川外に出つること叶はず、学問の爲に不便なりとて、屢（しばしば）補任を勧められても固辞して受けず、「のぼらしな位の山の山水をただ老の身のたのしみにして」と詠じて、生涯権禰宜を以て終はったのは当人と異なる所であった。又世の学者が生計に拙くして清貧を高しとするに対し、彼は蓄財を能とし、財無ければ好書に会うても之を得る事能はずと云ひ、貨殖いて蓮台寺の山林田畠を獲た。その中央を流るる渓水を鶯谷と云ふので彼の号を得たのであると云ふ。かくして一生中七度京都に往返し、其都度路を異にして途中の名所旧跡を探り必ず記行を物して居る。当て召されて禁中に日本紀を講じ、天聴に達するの光栄を得た。彼の著書頗る多き中に倭魂国風、紙道明弁は国粋の発揮、尊王愛国の義を明かにしたもので、徳川幕府の盛なる当時斯くの如き意見を立てたのは偉としなければならぬ、これは宜長篤胤に先たっこと数十年のことである。又松木智彦長官の顧問として外官年中行事令式を完成せしめた功も記さねばならぬ。 【書画暦】画を徳永信常に学んで狩野派を描く。
木造洪宗 （きづくり きょうそう）	【享生没年】69歳 1714~1783 正徳4～天明3【生地】【住地】【系譜】 【略歴】 【書画暦】狩野風の画を能くした。其描く處の地獄極楽の極密の大幅は一譽坊に納めてあったが、今は吹上町善光寺に移管した。
野村常林 （のむら じょうりん） 康政、金太夫、貞玄	【享生没年】74歳 1719～1793 享保4～寛政5【生地】【住地】小川【系譜】 【略歴】 【書画暦】狩野派 絵画
安田守勝 （やすだ もりかつ） 常勝、新右衛門、得蔵斎	【享生没年】78歳 1728~1805 享保13～文化2【生地】宮後【住地】大世古 【系譜】久志本常彰の男、勝定の養嗣【略歴】 【書画暦】鶴沢深山に学び、狩野派の画を巧みにした。御田植扇の筆者
川崎春菜 （かわさき はるな） 陽名、七郎、左太夫、汲井園、狭乃居	【享生没年】【生地】【住地】下中之郷烏帽子世古（宮町）【系譜】 【略歴】挿花の趣味あり。漢学の素養もあった。晩年子弟を集めて素読を教へ、且寺子屋教育を開始した。 【書画暦】御家流の書を山本源吾に学び、後京都八木利愛に従ふた。 画は安田守勝の門に遊びて狩野派を描いた。
濱田 薫 （はまだ かおる） 吉太夫	【享生没年】1800 頃~寛政頃～【生地】【住地】宇治【系譜】 【略歴】 【書画暦】狩野派 画
木造光胤 （きづくり こういん） 傳左衛門	【享生没年】【生地】【住地】【系譜】 【略歴】 【書画暦】狩野探鯨門人 画
奥野九鶴 （おくの きゅうかく） 光矩、多仲、墨禅斎	【享生没年】【生地】【住地】宮後【系譜】 【略歴】 【書画暦】狩野派 画
久保倉盛僚 （くぼくら せいりょう） 久米之介、盛朝、右近、弘卿	【享生没年】44歳 1670~1713 寛文10～正徳3【生地】四ツ谷【住地】岩淵 【系譜】堤盛員の六男、弘宣の養嗣 【略歴】内宮権禰宜正四位上に至った。又和歌を能くしたが、京都にて卒した。 【書画暦】狩野派の画を描く。

野村釣玄 （のむら ちょうげん）轍、宗叔、子慎、棟信、信友	【享生没年】84歳 1750~1833 寛延3～天保4【生地】【住地】古市 【系譜】謙庵の男、尾張屋甚右衛門の嗣【略歴】 【書画暦】橘守國の門人、後海北友雪に従ひ、土佐派の画を描いた。
榊原寄園 （さかきばら きえん） 近知、東太夫	【享生没年】59歳 1790~1848 寛政2～嘉永元【生地】【住地】宮後【系譜】 【略歴】 【書画暦】野村釣玄門人 狩野派画
狩野洞益 （かのう どうえき） 春信	【享生没年】~1841～天保12【生地】【住地】江戸（東京） 【系譜】板谷広長の次男。狩野洞白(愛信)の養子となり駿河台狩野家をつぐ。【略歴】 【書画暦】 江戸時代後期の画家
小河(川)地竹園 （おがわぢ ちくえん） 喜廣、平八郎、主禮、左門、眞久斎、可朝	【享生没年】65歳 1808~1872 文化5～明治5【生地】中之切（中之切町）【住地】同 【本名】【通称】【幼名】【別称】喜廣、平八郎、主禮、左門【字名】【雅号】眞久斎、可朝 【系譜】喜道の男 【略歴】安政5年6月鏡石石津賀神社祝部、慶應元年11月内宮権禰宜、正六位上に叙した。性剛直にして権門に媚びず、狂歌及び絵画を嗜む。又秋山安房守が安政6年12月末奉行として着任したる時、年末多忙の際，出迎其他の務めに不平を唱ふるもの多かりしも皆憚りて之を公言するものなかったが喜廣祝言を呈するとて「餅つきの中に飛び込む安房守、ながく居りては人があき山」と短冊に認めて差出した。萬延元年12月8日紳路山山火事の際臥牛に似たる一大石を発見して、之を鏡石の附近に移し、牛石と号けた。 【書画暦】画江戸に出でて画を狩野洞益に学むだ。或時山田奉行渡邉肥後守より肖像の依頼を受け、一夜にして之を描き上げ、肥後守を驚かしめた。
小川地喜賢 （おがわぢ きけん）	【享生没年】【生地】【住地】【系譜】 【略歴】 【書画暦】狩野派小川地竹園門下
岸駒 （がんく） 貢然、可観堂・同功館・鳩巣楼	【享生没年】90歳（一説に83歳）1748~1838 寛延元～天保9【生地】金沢【住地】 【系譜】 【略歴】 【書画暦】江戸後期の画家。岸派の祖。京都へ出て有栖川宮に仕え、のち宮中画事を扱う。山水・花鳥・獣類が得意で、虎は特に優れている。
稲垣藍橘 （いながき あいきょう） 主馬、鉄心斎、槐日庵	【享生没年】76歳 1814～1890 文化11～明治23【生地】鳥羽【住地】岩淵【系譜】弥惣右衛門 【略歴】烏羽落の家老職であった。廃藩後、度会府の刑法曹長を勤め。 【書画暦】書は市川米弁に師事し、画は岸駒の高弟、中村馬外に学び能手となった。
伊東洞栄 （いとう どうえい） 六左衛門	【享生没年】1850 頃~嘉永頃【生地】【住地】古市【系譜】 【略歴】 【書画暦】画 狩野派
山口起業 （やまぐち きぎょう） 種吉、伝兵衛、藤園、春浦	【享生没年】56歳 1831~1886 天保2～明治19【生地】田丸【住地】前野 【系譜】野口平八の次男、光顕の養嗣 【略歴】薬種業を営み、有名なる如神散の本舗であった。少時御巫清直の門に入り、博覧強記嶄(ざん)然として同門中に頭角を現はした。明治の初宮崎学校教師となり、後神宮に入りて主典兼権少教正となり専ら力を神宮教の発展と生徒の教養に注いだ。平生倹素己を持し名を好まず。敬神報公の念に篤かった。当時宴會流行したるが悉く之を排斥して出です。常に綿服に小倉袴を穿ちて公席に列する程であつたが、明治初年自町の小亭校開設に際し金50圓を寄進して町内の人々を驚かしめた。晩年家居奨善社を結ぴて積善の宣伝に努力し、和歌を楽しみ、著書亦多かった。 【書画暦】画を伊(東)藤洞栄に学んだ。

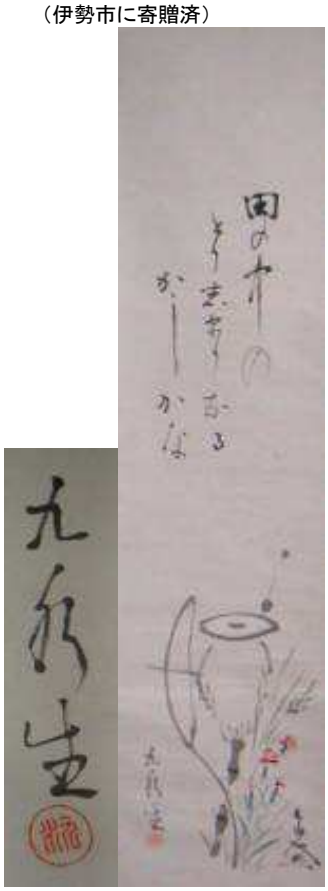
南 画 派

中国の南宗画に由来する日本独特の用語で文人画ともいう。写実でなく「写意」を旨に、「気韻生動（風格・気品がいきいきと満ち溢れている）」を理想として明治前期に流行。代表的画家は、祇園南海（1676～1751）、彭城百川（1698～1753）、柳沢淇園（1706～1758）、池大雅、与謝蕪村、浦上玉堂、青木木米、谷文晁、渡辺崋山、田能村竹田、椿椿山、富岡鉄斎など。

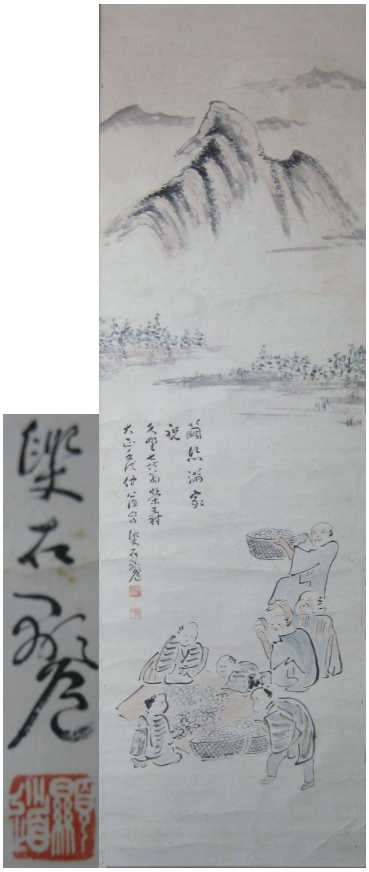


新発見！『茶酔酒醒』秋田九水
伊勢市岩渕3丁目　たつみ表具店にて表装していただきました
（伊勢市に寄贈済）

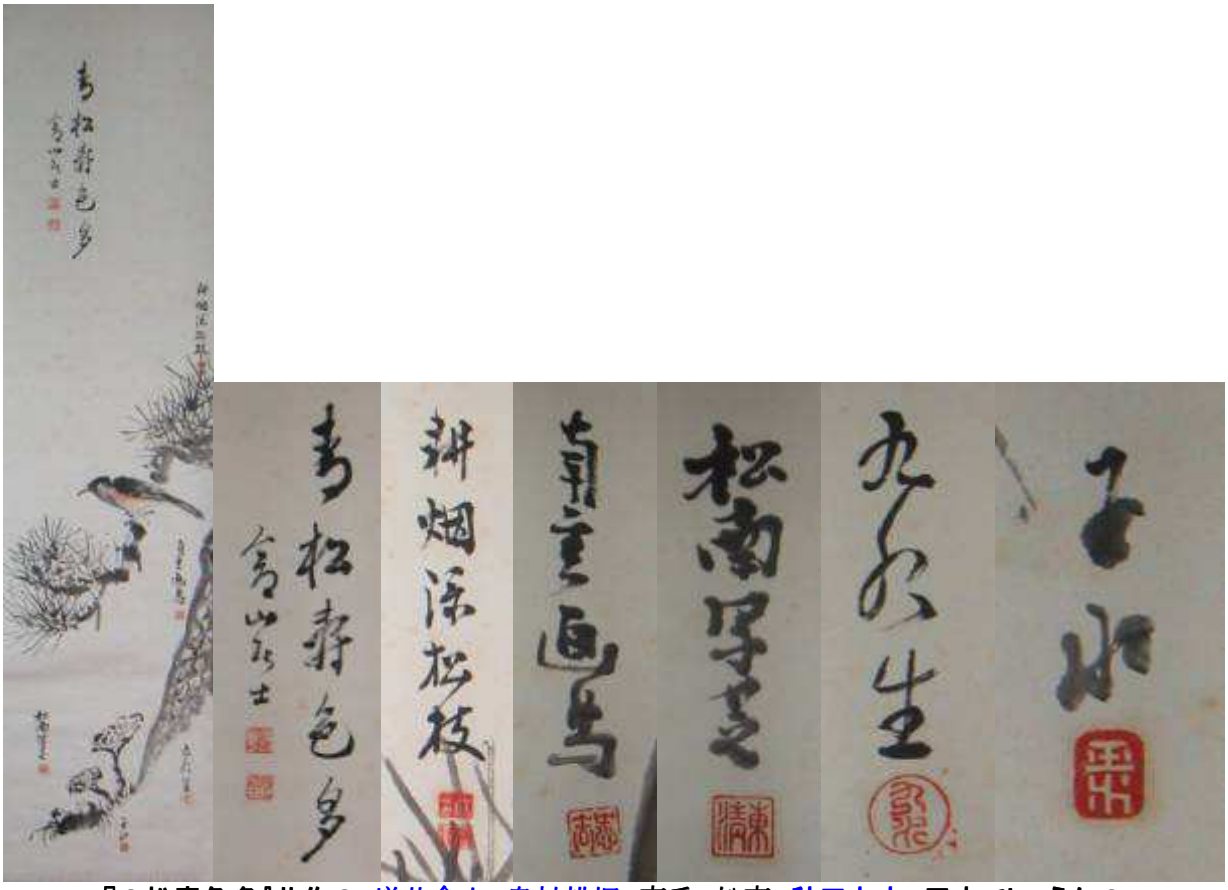
『水墨牡丹』山口五水
（伊勢市に寄贈済）



『案山子』秋田九水
田の中の
とりしまりなる　かかしかな
（伊勢市に寄贈済）



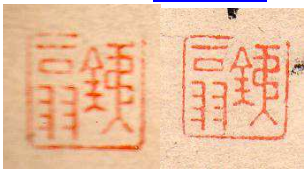
『繭絲満家之図』
森岡雙石(大正11年)
知多市長野氏写真提供



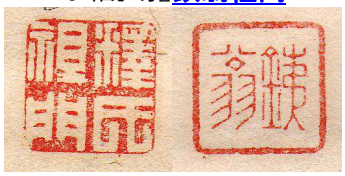
『？松壽色多』共作？ 増井倉山、奥村耕烟、南重、松南、秋田九水、王水でしょうか？

（伊勢市に寄贈済）

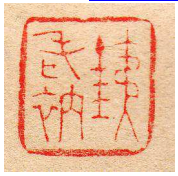
『蘭張込』鉄翁祖門



小幅『菊』鉄翁祖門



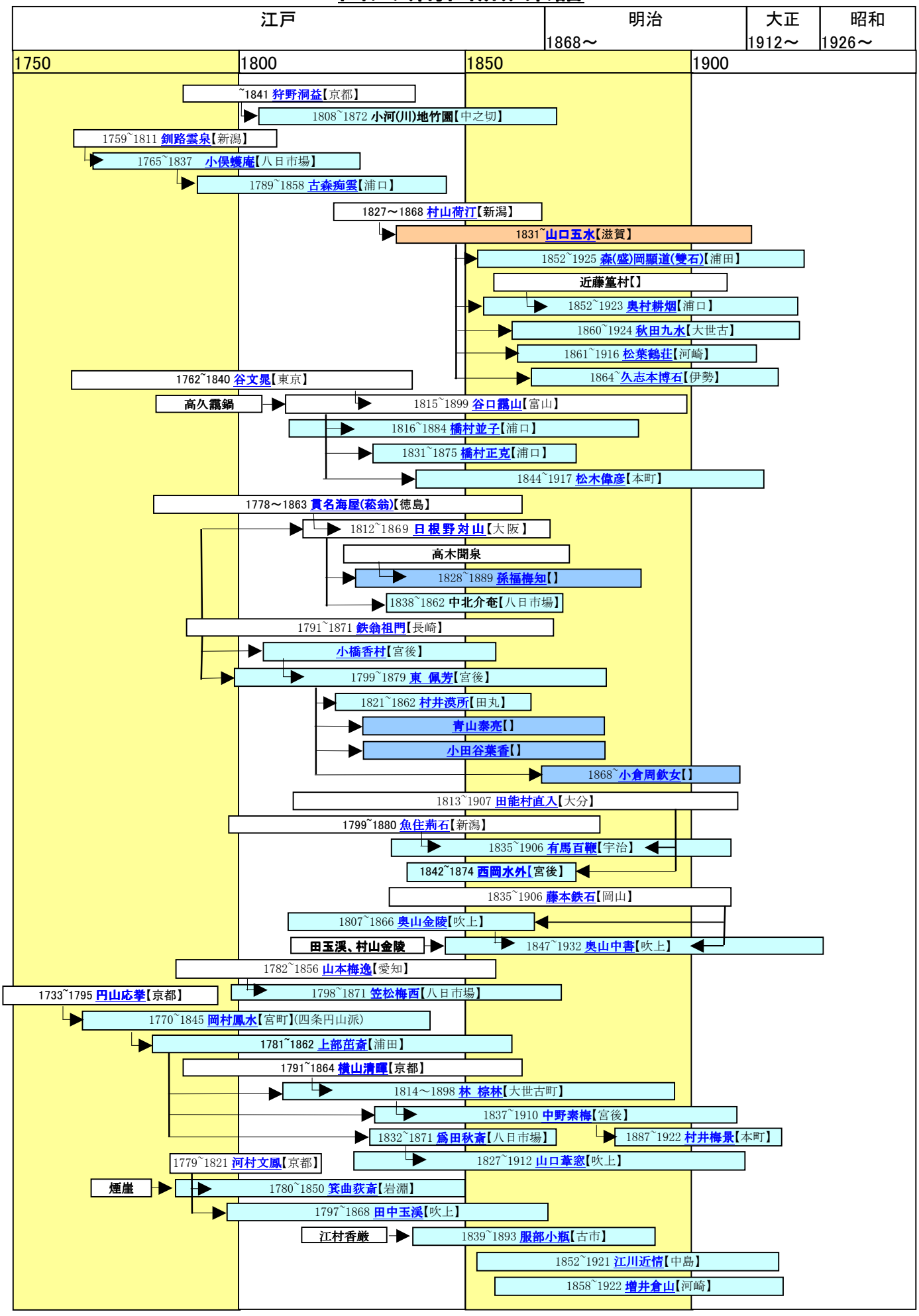
『菊花月』鉄翁祖門



二幅『淺絳山水』谷口靄山　真作と評価されました

『水墨月下蓋鳳圖』
梅逸翁上元弟子陳書
山本梅逸

画人（南画派）系譜


江戸
明治
1868～
大正
1912～
昭和
1926～
1750
1800
1850
1900
~1841 狩野洞益【京都】
1808~1872 小河(川)地竹圃【中之切】
1759~1811 釧路雲泉【新潟】
1765~1837 小俣蟻庵【八日市場】
1789~1858 古森痴雲【浦口】
1827～1868 村山荷汀【新潟】
1831~山口五水【滋賀】
1852~1925 森(盛)岡顯道(雙石)【浦田】
近藤篁村【】
1852~1923 奥村耕烟【浦口】
1860~1924 秋田九水【大世古】
1861~1916 松葉鶴荘【河崎】
1762~1840 谷文晁【東京】
1864~久志本博石【伊勢】
高久靄鍋
1815~1899 谷口靄山【富山】
1816~1884 橘村並子【浦口】
1831~1875 橘村正克【浦口】
1844~1917 松木偉彦【本町】
1778～1863 貫名海屋(菘翁)【徳島】
1812~1869 日根野対山【大阪】
高木聞泉
1828~1889 孫福梅知【】
1838~1862 中北介奄【八日市場】
1791~1871 鉄翁祖門【長崎】
小橋香村【宮後】
1799~1879 東 佩芳【宮後】
1821~1862 村井漠所【田丸】
青山泰亮【】
小田谷葉香【】
1868~小倉周飲女【】
1813~1907 田能村直入【大分】
1799~1880 魚住荊石【新潟】
1835~1906 有馬百鞭【宇治】
1842~1874 西岡水外【宮後】
1835~1906 藤本鉄石【岡山】
1807~1866 奥山金陵【吹上】
田玉渓、村山金陵
1847~1932 奥山中書【吹上】
1782~1856 山本梅逸【愛知】
1733~1795 円山応挙【京都】
1798~1871 笠松梅西【八日市場】
1770~1845 岡村鳳水【宮町】(四条円山派)
1781~1862 上部苗斎【浦田】
1791~1864 横山清暉【京都】
1814～1898 林 椋林【大世古町】
1837~1910 中野素梅【宮後】
1832~1871 爲田秋斎【八日市場】
1887~1922 村井梅景【本町】
1779~1821 河村文鳳【京都】
1827~1912 山口葦窓【吹上】
煙崖
1780~1850 箕曲荻斎【岩淵】
1797~1868 田中玉渓【吹上】
江村香厳
1839~1893 服部小瓶【古市】
1852~1921 江川近情【中島】
1858~1922 増井倉山【河崎】

画人（南画派）略歴

池大雅 （いけのたいが） 勤、無名、秋平、公敏、子職、貸成、烏滸釣叟、霞樵、竹居	【享生没年】54歳 1722~1776 安永5【生地】京都【住地】【系譜】【略歴】 【書画暦】江戸中期の文人画家。画扇屋を営みながら舶載の画譜などを通して中国南宗画を独学する一方、柳沢淇園や祇園南海の教えを受け、日本画の伝統と西洋絵画の表現法をとり入れて独自性と風格に富んだ画風を形成、日本南画の祖と呼ばれた。
狩野洞益 （かのう どうえき） 春信	【享生没年】~1841～天保12【生地】【住地】京都 【系譜】板谷広長の次男。狩野洞白(愛信)の養子となり駿河台狩野家を継ぐ。【略歴】 【書画暦】 江戸時代後期の画家
小河(川)地竹園 （おがわぢ ちくえん） 喜廣、平八郎、主禮、左門、眞久斎、可朝	【享生没年】65歳 1808~1872 文化5～明治5【生地】中之切（中之切町）【住地】同 【系譜】喜道の男 【略歴】安政5年6月鏡石石津賀神社祝部、慶應元年11月内宮権禰宜、正六位上に叙した。性剛直にして権門に媚びず、狂歌及び絵画を嗜む。又秋山安房守が安政6年12月末奉行として着任したる時、年末多忙の際，出迎其他の務めに不平を唱ふるもの多かりしも皆憚りて之を公言するものなかったが喜廣祝言を呈するとて「餅つきの中に飛び込む安房守、ながく居りては人があき山」と短冊に認めて差出した。萬延元年12月8日神路山山火事の際臥牛に似たる一大石を発見して、之を鏡石の附近に移し、牛石と号けた。 【書画暦】画江戸に出でて画を狩野洞益に学んだ。或時山田奉行渡邉肥後守より肖像の依頼を受け、一夜にして之を描き上げ、肥後守を驚かしめた。
釧路雲泉 （くしろ うんせん）	【享生没年】52歳宝暦9～文化8【生地】越後千々石【住地】【系譜】【略歴】 【書画暦】幼少の頃、父に従って長崎に遊学し中国人について学問を受ける。山水画を得意とした。父の没後九州を振り出しに四国・中国・近畿・江戸・越後等諸国を巡り歩いた。出雲崎で客死。
小俣蠖庵 （おまた かくあん） 孟寛、孟奨、茂四郎、子猛、名六、 **栗斎**（篆刻）、柴翁	【享生没年】73歳 1765～1837 明和2～天保8【生地】川崎世古（常盤） 【住地】横橋 八日市場【系譜】 【略歴】豊受宮の神楽(かぐら)職。世々外宮神楽職にして、宮掌大内人に補し、また家業として味噌を売った。外宮神楽職の家に生まれる。生家は常盤町にあり味噌商であった。 【書画暦】南画派。江戸中期の篆刻家。書画を能くし、篆刻をに学んで一家を成す。性清雅博識、書画を好み、富裕であったので之を貯うるもの多く、従って其鑑織に長じた。画を越後の釧路雲泉に学びて最山水に工みに、書は蘇子膽、趙子昂、董玄宰に出入りして能く其法を得、篆刻を芙蓉門の源維良に従い其妙を得、又玉隣上人に就いて明楽（江戸期に明朝から日本に伝えられた廟堂(びょうどう)音楽の名称)をもよくし。孰れも皆其堂奥に入り門下頗多く幾多の秀才を輩出した。福井端隠（篆刻）、古森痴雲（南画派）、中西笠山（篆刻）、阪田葛丘（篆刻）等其尤なるものである。人格崇高、始終温容を以って人に接し、恬淡にして寡慾、慈悲を悦び、人の賊難に遇いたるを聞き、忽ち二十餘枚の画を爲して其人に贈り、以て復興の資となさしめ、青木木米（京都の陶工）の流澪して一妓楼にし、隠るるを聞き、之を救いて其志を翅べしめた。又嘗て中山寺書画会席上古森厚保（＝痴雲、南画派）の一石を携えて鉛筆を請えるに際し、月夜に彫らんか又は闇夜に彫らんかと戯言しながら懐中にして水月観の三字を刻し、運刀絶妙を極めたとの逸話もある。少壮の時より別号を好み、其数一百に達した。蠖庵とは晩年貧困にして居室身を容るるに艱かりし頃の称にて、主として書画に用い、篆刻には栗齋を称した。
古森痴雲 （こもり ちうん） **厚保**、善右衛門、国蔵、収蔵、善佐、保之丞、永言、宣三郎	【享生没年】69歳 1790～1858 寛政2～安政5【生地】浦口【住地】同【系譜】厚信の男、兄省吾の嗣 【略歴】俳諧を良くし当時知名の文人墨客と交遊する。 【書画暦】西岡邦教（浮世絵派）に画を、のち小俣蠖庵に南画を学び始其堂に入った。また篆刻を好んだ。

村山荷汀 （むらやま かてい） 椒、仲宜、秀一郎、半牧	【享生没年】41歳 1827～1868 文政10～明治元【生地】越後【住地】【系譜】 【略歴】幕末・維新の志士 【書画暦】長谷川嵐溪に師事。のち京都へ出て藤本鉄石・伴林光平・江馬天江・山中静逸らと交わる。
山口五水 （やまぐち ごすい）	【享生没年】不詳～1831～天保2年【生地】近江【住地】【系譜】 【略歴】 【書画暦】もともと神官であったが画を村山荷汀に学び大成したとされる。水口から伊勢に移り住んでからは多くの門下を排出し南画を広めた功労者的存在である。門下に久志本博石、奥村耕烟、秋田九水、盛（森）岡雙石、松葉鶴荘がいる。
森岡顯道 （もりおか けんどう） 椎彰、**雙石**、北崖、城南、南亭、	【享生没年】74歳 1852~1925 嘉永5～大正14【生地】尾張横須賀(現、愛知県東海市横須賀町)【住地】浦田【本名】【通称】【幼名】【別称】【字名】椎彰【雅号】雙石、北崖、城南、南亭【別号】【系譜】良右衛門の次男 【略歴】尾藩の儒中出梅軒に経学を学び校貴明倫堂に入り、執れも之を能くした、又国語を石橋知空、漢学を中山弘斎に、詩を村田梅村に学んだ。明治19年以降神宮教院に奉職し、同会幹事となり、後度会本部長となった。冷泉伯につき歌道を研究し、又常に煎茶を好み小川流の秘奥を究めた。 【書画暦】山口五水に南画を、横井藻誉に書を学び、孰(いず)れも之を能くした。
奥村耕烟 （おくむら こういん） 次郎、治郎、石外山人	【享生没年】72歳 1852～1923 嘉永5～大正12【生地】浦口【住地】岩渕 【系譜】喜早清淵の次男 奥村家を継いだ【略歴】 【書画暦】書は龍三瓦に学ぶ。漢学。近藤篁村及び山口五水門人。南画を学ぶ。
秋田九水 （あきた きゅうすい） 喜助	【享生没年】64歳 1860～1924 万延元～大正13【生地】大世古【住地】同【系譜】先代喜助の長男 【略歴】代々呉服商を営んだが、明治20年洋物商に転業した。公共心に富み、同28年**太田小三郎** 等と協力して**宮川電気株式会社**を創立し推されて社長となり、その発展に尽力した。35年山田二見間の電車開通を企て翌年之を完成し、続いて両宮間の電車開通、二見間の連絡を完成した。後津電灯会社、及び松阪電気会社と合同し**三重合同電気株式会社**となるに及んで退職した。(大正11年 1922)同社に於いてはその多年の功労に酬いるために慰労金若干を以ってし、且つ会社前に胸像(1927年 中村武平氏作 屋外彫刻調査保存研究会の調査による)を建設して之を表彰した。明治22年来選ばれて町会議員、市会議員、市参事会員となり市政に参与した。 【書画暦】晩年画を**山口五水**に学んだ。
松葉鶴荘 （まつば かくそう） 吉蔵、伊八	【享生没年】56歳 1861~1916 万延2～大正5【生地】河崎【住地】田中中世古【系譜】奥井吉兵衛の次男。 【略歴】初め砂糖商を営み、後明治30年9月松葉合名会社を組織して卷糖販売の事に従った。蓋し山田に於いての合名会社の創始であった。また橋村正環を聘(へい)し、家族挙つてその漢学の講筵(えん)に列し、また井上頼文に和歌を問うた。 【書画暦】その事業を他に譲って隠退し専ら文雅風流の道に入り、近江の画人山口五水につきて画を学び、黒竹を巧みにした。
谷 文晁 （たに ぶんちょう） 文朝	【享生没年】78歳 1762~1840 宝暦12～天保11【生地】江戸【住地】【系譜】【略歴】 【書画暦】幼少より画技を好み、元・明・清画や狩野派・土佐派・文人画等の諸画法を折衷した新画風を創造し、江戸文人画壇の重鎮となる。門下に渡辺崋山・立原杏所らを輩出する。
久志本博石 （くしもと はくせき） 南雲、鶯谷庵	【享生没年】1864～元治元年～【生地】【住地】【系譜】 【略歴】 【書画暦】山口五水に師事し南画を学ぶ。
谷口靄山 （たにぐち あいざん） 貞、士幹	【享生没年】84歳 1815～1899 文化12～明治32【生地】越中（富山）【住地】【系譜】【略歴】 【書画暦】南画家。谷文晁・高久靄鍋に就き、山水・花鳥を能くした。南画協会創立に尽力し、田能村直入と共に京都画壇の長老として重んじられた。
橋村並子 （はしむら へいし） 萬須	【享生没年】69歳 1816~1884 文化13～明治17【生地】上中ノ郷度会（浦口）【住地】同【系譜】正並の女、正立の妻 【略歴】足代弘訓に和歌を学び、之をよくした。「志かのうらや夕霧はれてにほの海　のこる入日の波あらふなり」 【書画暦】南画の大家谷口靄山につきその技を学び、家政の余暇に彩筆を振ひ、

橋村正克 （はしうら まさかつ） 壽丸、宰記、礼郷、春圃	【享生没年】45歳 1831~1875 天保2～明治8【生地】上中ノ郷（浦口）【住地】同【系譜】正立の男 【略歴】外官権禰宜、正四位上に至った。足代弘訓に歌を学び、小川流の煮茶を修めた。「影もよく匂ひも深し朧夜の月と花との中岡の宿」と、料亭中岡（錦水楼）の未だ微々として世に顕はれざりし頃、此楼の風景を詠じて独り其美を唱道して居ったが、後果して繁盛を見るに至り、同楼の主人之を徳として、彼が自筆の歌を扁額とし、又器具にも之を寫して永く紀念とした。故ありて共妻を去りたる時、「見捨てしは吾ばかりなり宿かへて叉咲き匂へ姫百合の花」と短冊に書いて送つたとの話がある。 【書画暦】谷口靄山に画を学びて堪能であった、又貫名海屋に書を問う。
松木偉彦 （まつき くすひこ） 子温、香雲・五峰、松年	【享生没年】74歳 1844～1917 弘化元～大正6【生地】田中中世古（本町）【住地】同、宮後【系譜】武彦の男、品彦の養子 【略歴】嘉永2年外宮権禰宜に補せられたが、明治4年神宮改革によりて一旦、解職となり、更に同禰宜となりまた内宮にも奉仕した。また神宮の故典儀式に通暁し、殊に殿内の秘事を知れるは当時其右に出づる者無く、明治22年の正遷宮に際して、祭主の宮の内奏によりて顧問を迎付けられた。著書に『五峰印譜』がある。資性温雅、読書を松田雪柯に、又大坪流の馬術を鳥羽藩の林又蔵に習った。 【書画暦】南画を谷口靄(あい)山に学んだ。篆刻を福井端隠に学び、最其薀奥に達したのは篆刻で、高芙蓉の伝統を受けたのは栗齋(小俣蠖庵)、端隠並びに偉彦である。嘗って(かって)伊藤博文の爲めに石印を刻し、博文よりは扁額を書して之に酬いられた。
鉄翁祖門 （てつおう そもん） 姓：日高	【享生没年】81歳 1791～1871 寛政3～明治4【生地】肥前長崎【住地】【系譜】 【略歴】臨済宗の僧・長崎春徳寺住持。 【書画暦】画家。石崎融思(ゆうし)に師事、のち清から来日した江稼圃(こう-かほ)に文人画をまなぶ。木下逸雲(いつうん)、三浦梧門(ごもん)とともに長崎三大文人画家と称された。作品に「四君子図屏風」など。
小橋香村 （こはし こうそん） 平、衡信蔵、君輿、雪簑	【享生没年】【生地】【住地】宮後【系譜】 【略歴】 【書画暦】僧鐵翁門人、南画
東 佩芳 （女 ひがし ばいほう） 小蝶、恋花	【享生没年】81歳 1799~1879 寛政11～明治12【生地】川端村（城田村）【住地】宮後 【系譜】小林栄秀の三女、夢亭の妻 【略歴】21歳にして東 夢亭に嫁し、頗（すこぶる）内助の功があった。性質温和、漢学を夫に学び、詩、歌、茶、盆石等の嗜も深く、晩年女子を集めて習字、裁縫，国文等を教えた。夢亭没後その遺著、鋤雲亭隨筆及び夢亭詩鈔各三巻の上梓を見るを得たのは、女史の力に依るものである。晩年自ら死期を知り、侍女を伴って宮川宮崎等の桜花を観巡り、翌日端座瞑目して終焉した。 【書画暦】画を初め小橋香村に従って学んだが、後長崎の僧鉄翁に師事するに及んで其風一変した。名声四方に聞うるに及んで張紅蘭、江馬細香、亀井少琴等と交を訂した。当て扇面に蘭を画きて師に贈り、翁更に之を清朝の華混田に贈り、混田之を賞して裏面に賛及び梅花を描いて鉄翁に返し来れるもの東家に珍収せられて居る。
村井漠所 （むらい ばくしょ） 常之、與四郎、士教、三橋	【享生没年】42歳 1821~1862 文政4～文久2【生地】田丸【住地】河崎 【系譜】金森得水の次男 【略歴】東夢亭の高弟にして詩を能くし、松田葵亭、松田適翁、江川閑雪等と並び称せられた。【書画暦】画を東 佩芳女史に学ぶ。
小倉周欽女 （おぐら しゅうきんじょ）	【享生没年】明治初～【生地】【住地】 【略歴】和歌 【書画暦】画 東佩芳門人
青山泰亮 （あおやま やすすけ）	【享生没年】【生地】【住地】【系譜】 【略歴】医を業とし、克く仁術を行い、人格高潔、郷人に畏敬された。風流の志深く、詩を東 夢亭に学び、其風格に私淑した。正住傅太夫の株を譲りて師職となった。 【書画暦】画を東 佩芳に学んだ。
小田谷葉香 （おだたに ） はる	【享生没年】【生地】【住地】【系譜】権太夫の女 【略歴】 【書画暦】東佩芳門人 写本を楽とす。

貫名海屋(菘翁) （ぬきな かいおく） 吉井 苞、君茂・子善、海客、海叟、菘翁、方竹山人、須静山人	【享生没年】86歳 1778～1863 安政7～文久3【生地】阿波国【住地】【系譜】 【略歴】晩年には下鴨神社に奉仕し、諸国を遊歴した。 【書画暦】書は西宣行に師事して宋法を学ぶ。近世第一の能書家と称され、須静塾を開く。
日野根対山 （ひねの たいざん） 盛長、成信、小年、茅海、錦林子	【享生没年】57歳 1812~1869 文化９～明治２【生地】大坂（大阪府）【住地】【系譜】 【略歴】 【書画暦】幕末の南画家。画は貫名菘翁に学び、また鉄翁祖門に私淑した。特に山水画に長じて近世南画壇の巨擘と称される。
孫福梅知 （まごふく うめとも） 鐵次郎、公好、修理、子遠、楓蔭	【享生没年】62歳 1828~1889 文政１１～明治22【生地】宮後【住地】一志久保 【系譜】足代基弘の次男、包蒙の養嗣【略歴】 【書画暦】高木聞泉、日根野対山門人、南画
中北介奄 （なかきた かいあん） 貫之進、隆清、緑蔭亭	【享生没年】24歳 1838~1862 天保9～文久2【生地】津【住地】八日市場 【系譜】小野直清の三男、喜平の養嗣 【略歴】紙商 【書画暦】天性画を好み、日根野對山の門に入り、を能くした。
田能村直入 （たのむら ちょくにゅう） 顧絶、小虎	【享生没年】94歳 1813～1907 文化１０～明治40【生地】豊後（大分）【住地】【系譜】 【略歴】 【書画暦】南画家。田能村竹田に学び、竹田にその才能を認められ養嗣子となる。南宗画学校を開くなど、南画壇の向上に尽力した。
魚住荊石 （うおずみ けいせき ） 毅、士剛、葭浦、聴山	【享生没年】82歳 1799~1880 寛政１１～明治１３【生地】越後(新潟県)【住地】大坂 【系譜】【略歴】 【書画暦】江戸後期-明治時代の画家。江戸で谷文晁に学ぶ。
有馬百鞭 （ありま ひゃくべん） 麿助、希駿、醉漁	【享生没年】72歳 1835～1906 天保6～明治39【生地】鳥羽【住地】宇治、志摩国府村 【系譜】鳥羽藩士の家に生まれ 千里の男 【略歴】明治維新後、藩の権大属に任じ、初めて民政にも参与した。退官後、常安寺に塾「日新校」を開き、多くの英才を教養した。明治8より神宮に奉仕し、権禰宜従七位まで進む。 【書画暦】南画派 。幼少より詩画を好み、画は魚住荊石、田能村直入に学ぶ。書は隨風上人、松田雪柯を師とし後に大師法を京都の北泉に学び一家を成した。
西岡水外 （にしおか すいがい） 古福、子慎	【享生没年】33歳 1842~1874 天保１３～明治7【生地】【住地】宮後【系譜】訓棟の男 【略歴】 【書画暦】田能村直入門人 画
藤本鉄石 （ふじもと てっせき） 真金、鋳公、鉄寒士、都門売茶翁	【享生没年】48歳 1815～1863 文化１２～文久3年【生地】備前【住地】【系譜】 【略歴】幕末の尊攘派志士。書画・和歌・漢詩を能くし兵法に通ず。天誅組総裁として激しく尊攘論を主張した。 【書画暦】南画
奥山金陵 （おくやま きんりょう） 清次郎 家憲 中書、叔章、桃陰閉窻	【享生没年】1807~1866 文化４～慶應2【生地】吹上【住地】【系譜】神田松斎の三男 【略歴】竹中南峯及び花岡青洲について医術を修め、能く患者を憂撫し、医業近隣に振ふた。また経書を松本愚山に詩文を廣瀬旭窓に学び、 【書画暦】南画 藤本鉄石と交通して画法を受け、元治元年鉄石の義挙を助けたとも云われて居る。
山本梅逸 （やまもと ばいいつ） 親亮、明卿、梅佚、春園、玉禅、梅華、 天道外史	【享生没年】74歳 1782～1856 天明2～安政3【生地】尾張【住地】【系譜】 【略歴】 【書画暦】江戸後期の画家。中林竹洞と共に京に出て一家を成す。頼山陽・貫名海屋・梁川星巌らと親交し、詩歌・煎茶・鑑識にも長じた。晩年尾張に戻り藩の御用絵師となる。
笠松梅西 （かさまつ ばいせい） 信義、庄蔵、義郷、煙浦	【享生没年】74歳 1798~1871 寛政１０～明治4【生地】【住地】八日市場【系譜】 【略歴】爲田只青に俳諧を学んだ。 【書画暦】小俣栗齋に篆刻を、山本梅逸に画を学びて雅人間に知られた。

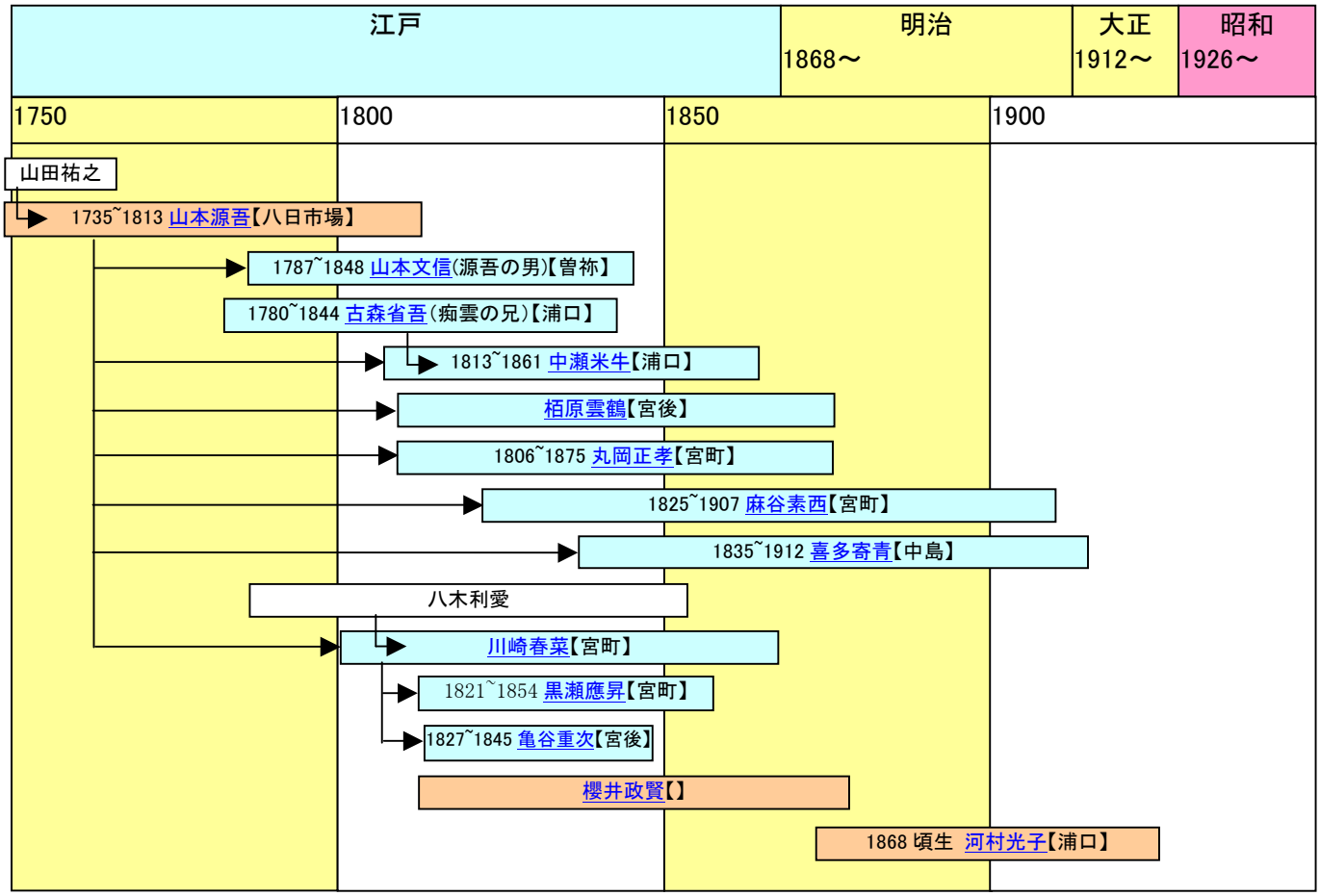
奥山中書 （おくやま ちゅうしょ） 家鮒、眉峰、墨竹軒、桃雲庵	【享生没年】86歳 1847~1932 弘化4～昭和7【生地】吹上【住地】同【系譜】金陵の次男 【略歴】幼時父に漢学及び医方を習ひ、又龍三瓦、鷹羽雲涼涼、御巫清直に就いて皇漢の学を修めた。明治維新後京都及び東京に遊び、大村達吉並に侍医賢伊東盛貞について修業し、遂に東京及埼玉県に於て医術を開業し、居ること2年にして帰郷した。在京中長三州、巌谷一六等と交遊し、又安田老山、田崎草雲等の説を聞き、猶家蔵せる明の朱鷺の墨竹によりて研究した。三州は其画の巧妙なるを賞賛して、墨竹軒の額を書して齢貽つた。茶道を京都の千碌々斎より伝へ、俳諧に熟達して神風館十八世を継承し、書画茶器等の鑑識にも長じた。大正10年一誉坊墓地大整理に当りて後援し、該地に建立する記念碑の案文を起草した。又平素其筆録し置ける神都人物の記録は今回編纂せる人物志の資料となるもの多かった。蓋し趣味該博にして熟れも超凡、博覧強記にして能く古実を諳（そら）んし、又故人の品格を評隲すること巧妙にして客の頤を解くの慨あった。遺稿の詩文中其一二を左に録した。 【書画暦】書を田玉渓に学び、嘗て、勤王家にして南画の名手たる藤本鐵石及村山金陵(半牧＝荷汀の父)の許に滞在せるに際し、日夜両氏より南画の真訣を聴き、好みて墨竹を画いた。又篆刻を好みて中西笠山、福井端隠に之を学ぶ。
円山応挙 （まるやま おうきょ） 岩次郎、主水、仲均、仲選、一嘯、夏雲、仙嶺、僊斎	【享生没年】63歳 1733~1795 享保18～寛政7【生地】丹波（京都）【住地】【系譜】 【略歴】生家は丹波桑田郡(京都府)の農家。 【書画暦】四条・円山派。円山派の創始者。狩野(かのう)派の石田幽汀(ゆうてい)に学ぶ。遠近法などをとりいれて独自の写生画を創出した。代表作に「雪松図」(国宝)、「七難七福図巻」、大乗寺の障壁画
岡村鳳水 （おかむら ほうすい） 徽房、左膳、左全、粛叟	【享生没年】76歳 1770～1845 明和7～弘化2【生地】丹波亀山【住地】下中之郷(宮町) 【系譜】岩佐忠兵衛の三男、又太夫の嗣【略歴】 【書画暦】四条・円山派。早くより京都の円山応挙の門に入り十哲の一人に名を上げられたが、画友の笠井末清を訪ねて伊勢に来訪する。画会などを開いて長く滞在する間に縁あって下中之郷（現宮町）の岡村家に入る。神都伊勢に四条・円山派の根を下ろした最初の人で、門下に上部茁斎、榎倉杉斎、荘門為斎などがおり、円山派の画風が大いに広まることになった。
上部茁斎 （うわべ せっさい） 光済、雅楽之助、子海、横渠	【享生没年】81歳 1781～1862 天明元～文久2【生地】上中之郷(現：常盤町？浦田町) 【住地】大世古 【系譜】橋村正均の子、上部光映の養子 【略歴】外宮権禰宜、正四位下に至った。また茶にも優れた。 【書画暦】四条・円山派。幼より画を好み、兄に従いて狩野派を学び、後岡村鳳水の門に入りて圓山の画風を伝えた。曾て尾張に遊び、嘉泰院陣居中が画く所の隋陸宮図を模写し、大に悟る所ありて其技益進み、画名一時に高くなった。ある時二見浦の真景を摸し、之を鷹司殿下に献じたるに、遂に天覧に入りて叡感浅からず、之を禁中に止めさせられ、更に勅して亀鶴貳幀の図を描かしめ陽ふた。この光栄に浴して以来天覧の印を捺した。又茶道をも能くした。門人百数十人あり、林棕林、鈴木柳亭、落合月槎、橋爪斗山、廣田篁齋(正陽)、松田雪柯、水溜米室等其尤たるものである。
横山清暉 （よこやま せいき） 主馬、詳介、暉三、成文、奇文、霞城	【享生没年】73歳 1791~1864 寛政3～元治元【生地】京都【住地】 【本名】【通称】主馬、詳介【幼名】暉三【別称】【字名】成文、奇文【雅号】霞城【別号】【系譜】【略歴】 【書画暦】江戸後期の四条派の画家。松村景文に学び、花鳥・山水・人物を能くする。
林 棕林 （はやし そうりん） 松田維幸、刑部、善郷、白眉	【享生没年】85歳 1814～1898 文化11～明治31【生地】大世古町【住地】 【系譜】山田神職松田幸益の男。大世古町村田家に生まれ、後、林 尚信の養嗣となり宮後に住む。【略歴】 【書画暦】幼少より上部茁斎につき、後横山清暉の門に入りて画を学び、孜々励精して写生を積むこと十年、三十余巻を成した。天保六年尾三遠（尾張・三河・遠江）諸州を遊歴し、又井伊侯に遇せられて其江戸桜田邸に滞留し、文晁、渡辺華山、米庵、南湖、椿 椿山等と交りて大に得る所があった。安政の頃より南画に転じて画風一変した。八十の時有桶川宮殿下の命により、松鶴の大幅を図して上り、端渓の大硯を賜り、伊藤春畝より實硯堂の三字を書して贈られた。門人多く、磯部百鱗、中野素梅、爲田秋斎、溝口春塘等を出した。当て監田隨斎の余詩中「棕櫚花底酔薫風」とあるを取り彼塾に名づけて酔薫社と称した。

中野素梅 （なかの そばい） 初之丞、仲之介、瓢琴	【享生没年】74歳 1837~1910 天保8～明治43【生地】宮後【住地】岩渕【系譜】 【略歴】年々奥州出羽に配札（御師）し、維新廃職後は蝋燭其他の営業をなした。又小林摂津について和泉流の狂言を習ひ、明治年間斯界の名士落莫の際、孤塁を守つて名手と称せられた。性瓢逸にして数々人の頤を解き、且諸技芸に通暁し、殊に音律に精しく、慶應年間電気に関する智識の未開なる時に「テレガラフ」と唱へて一種の発電機を模し、其一端を他に握らしめ、震動を与へて其の驚くを見て快哉を呼んだ。又一年羽後に遊びて鳥海山の土を持来り古雅なる陶印を刻して知人に頒ち、又「クルミ」に種々の彫刻を施し人に与へた。 【書画暦】画を上部茁斎、林 棕林について学ぶ。
村井梅景 （むらい ばいけい） 仲三	【享生没年】37歳 1887~1922 明治20～大正11【生地】豊川町（本町）【住地】同【系譜】幸吉の次男【略歴】理髪職を営む 【書画暦】南画派。中野素梅の門人。
爲田秋斎 （ためだ しゅうさい） 知之、兵部、主水	【享生没年】40歳 1832~1871 天保3～明治4【生地】【住地】八日市場【系譜】只青の男【略歴】 【書画暦】上部茁斎門人 画
山口葦窓 （やまぐち いそう） 亥之助、三平	【享生没年】86歳 1827~1912 文政10～明治45【生地】吹上【住地】神社【系譜】正木勝見の男【略歴】大工を業とした。 【書画暦】性画を好み、職業の余暇 爲田秋斎に学び、絵馬の製作に巧妙であった。
河村文鳳 （かわむら ぶんぽう） 亀、駿声、五游、有毛、首陽館	【享生没年】43歳 1779~1821 安永8～文政4【生地】京都【住地】【系譜】【略歴】 【書画暦】江戸時代後期の画家。はじめ岸駒(がんく)に、のち各派の画家に学んで独自の画風を築き、人物・山水画にすぐれた。文化4年「文鳳画譜」をあらわす。俳諧にも秀いで、多くの俳画を描いた。
箕曲荻斎 （みのまがり おぎさい） 在久、甚太夫、甚平、成圃、桐渓、	【享生没年】71歳 1780~1850 安永9～嘉永3【生地】岩淵【住地】同 【系譜】角谷八太夫の男、在六の養嗣【略歴】 【書画暦】文鳳、煙崖門人、南画
田中玉渓 （たなか ぎょくけい） 易慎、勘太夫、永画、尺厳	【享生没年】72歳 1797~1868 寛政9～明治元【生地】吹上【住地】同【系譜】喜八郎 【略歴】代々三日市太夫次郎の代官にて長老の席を占め、若年の頃は毎年奥州の壇家廻り配札をなし、老後は専ら子弟の教育に当り、家塾を開きては教を受くるもの数百人机を並ぶるもの常に席に満ちた。風流韻事を好み、詩を東夢亭、龍三瓦に、其他大鼓をよくし、茶道の古式に通じ、多趣味にして各皆其堂に入った。又和漢の書画幅を蒐蔵し、毎朝床間に懸け、代るがわる之を愛観したが、孰（いず）れも名幅ならざるはなかった。老後眼を病み、号下に昧叟と書したが、遂に失明した。早く妻を失ひ、亦長女を亡ひ、晩年を淋しく送った。 【書画暦】書を中西伯圭に学び、八分並楷書を能くして妙域に達したが、艸（そう）行の書は後に月儕に私淑する所があった。後京都に出でて画を文鳳に学んだ。例月詩及画の色紙に認めたるものを吟友並門人より募集し、扁額に納めて世木神社内天神社前に掲げて之を献納し、且稽古の資とした。
服部小瓶 （はっとり こへい） 正質、徳三	【享生没年】55歳 1839~1893 天保10～明治26【生地】古市【住地】同【系譜】長兵衛の長男【略歴】医を業とした。 【書画暦】土井贅牙に就いて詩文及び書法を学び、晩年江村香厳につき南画を習うた。
江川近情 （えがわ きんじょう） 成之、士信、両日庵	【享生没年】70歳 1852~1921 嘉永5～大正10【生地】中島【住地】同【系譜】閑雲の長男【略歴】幼にして家学を受け、龍三瓦に従ひて漢学を修め、 【書画暦】三井戴星に就て書道を学び、書は最其長ずる所にして、弘法大師の流を慕ひ、之に貫名海屋の風を参酌して一家を成した。嘗て漢魏より明清に至るまで、及び本朝近古の名士の奇話逸事を蒐録して両日菴史話を著はし、又空海の真蹟や古法帖を模写するもの70余帖に及んだ其揮毫に係る行書千字文は上木せられて世に流布して居る。明治25年書学会を起して書道を教授し、門人頗る多かった。後同32年山田中学校に聘やられて習字を教授した。
増井倉山 （ますい そうざん） （擁の手片がない）、久之助、孔容、秋香、玄斎	【享生没年】65歳 1858～1922 安政5～大正11【生地】河崎【住地】同、岩渕 【系譜】義爲の長男 【略歴】明治26年神宮宮掌に任じ、権禰宜正八位まで至り、勲八等を授けられた。 【書画暦】松田雪柯、日下部鳴鶴に師事し、漢魏六朝の書法も極めた。また詩画を能くした。南画派。

書：御家流派

御家流とは身分の高い家において伝承される流儀、あるいは藩における公式の流儀のこと。したがって、本来は家や藩によって異なる流儀を指すことになるが、芸道では単に御家流と言った場合に特定の流儀を指すことがある。
書道においては、主に武家の公式文書に使われた尊円流の流れを指す。
尊円流（そんえんりゅう）とは尊円法親王（1298～1356 伏見天皇第6皇子）が起こした書の流派（書流）であり、**青蓮院流**（しょうれんいんりゅう）、**御家流**（おいえりゅう）、**粟田流**（あわたりゅう）とも呼ばれる。Wikpedia より

書家（御家流派）系譜



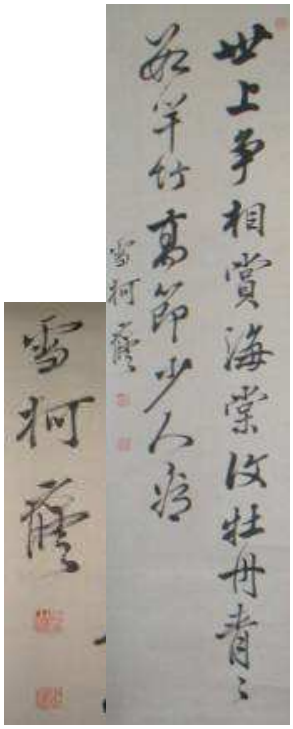
書家（御家流派）略歴

山本源吾 （やまもと げんご） 【本名・別称・字・号】 文樹、弥太夫、雲鴻堂	【享生没年】79歳 1735~1813 享保20～文化10【生地】【住地】八日市場、曾禰【系譜】河野氏 【略歴】初め一之木町に住し、子女を集めて書道を教へたが、弟子日に増し、名声日を追うて高まり、其狭隘を感ずるに及んで、曾禰町（今の五富利氏附近）に移り、常に百名計の子女を教へた。徳川時代、神領庶民教育の復興者として、其功労偉大なるものである。 【書画暦】有栖川宮家に仕へ、久しく京都に在り、御家流の書法を山田祐之に学び、山田に御家流を伝えたる始祖である。
山本文信 （やまもと ふみのぶ） 孫太夫、**源吾**	【享生没年】62歳 1787~1848 天明7～弘化5【生地】曽祢【住地】同【系譜】源吾の男 【略歴】父の遺業を承けて寺子屋教育に力を致し、その門の賑はしきこと当時市内第一で、其筆蹟の見事なるは父に勝り、毎朝数多の子女に書き与ふる習字手本は宛ら版木に附したらん如く一点一劃を違へず、日々200乃至250枚の手本を書し、十幾年間一日も倦むことなく、一向弟子の教養に努めたる、其精力絶倫と称すべきであった。【書画暦】御家流の書家、二代雲鴻堂。
古森省吾 （こもり しょうご） 当之助、厚光、善右衛門、善助、省我	【享生没年】65歳 1780~1844 安永9～弘化元【生地】浦口【住地】同 【系譜】厚信の男、痴雲の兄 【略歴】徳田椿堂に学びて俳諧を能くし夜雨亭二世を継いだ。性漫遊を好み風交諸国に普ねく、また草花を愛し花菖蒲菊蕣華等諸百後園に咲き乱れ花季最美観を呈した。守栄院に碑があった。 【書画暦】
中瀬米牛 （なかせ べいぎゅう） 三郎、 一(三水片に區)斎	【享生没年】49歳 1813~1861 文化10～万延2【生地】浦口【住地】同【系譜】 【略歴】師の遺鉢を継ぎ浦口町に寺子屋を開いた。又俳諧をよくし夜雨調を得、後遂に其第五世を襲いだ。 【書画暦】書道に熱心にて、古森省吾並びに山本源吾に就きて学び能筆の誉あり。
栢原雲鶴 （かはら うんかく） 正康、荘司、雛鶴、雲處	【享生没年】【生地】【住地】宮後【系譜】 【略歴】国学和歌を本居春庭に学び、草蹟殊に妙にして、後年寺子屋を開設し子女の教育に尽瘁した。 【書画暦】御家流の書を山本源吾に就て修める。
丸岡正孝 （まるおか まさたか） 末肇、帯刀、孫十郎、元傅、黙翁	【享生没年】68歳 1806~1875 文化3～明治8【生地】【住地】鳥帽子世古（宮町）【系譜】 【略歴】神宮掌大内人に補し正六位に叙せられた。本居春庭の門に入りて国学和歌を修めた。 【書画暦】山本源吾に就いて学び御家流の書を能くした。源吾の没後、寺子屋を開き子女の教育に従事し弟子其門に充ちた。
麻谷素西 （あさたに そせい） 直三、弥右衛門、香果園	【享生没年】83歳 1825~1907 文政7～明治40【生地】下中之郷(宮町)【住地】八日市場 【系譜】井坂長左衛門の長男 【略歴】菓子舗。其製になる饅頭は遠近に知られた。俳諧を爲田只青に学び、共に之をよくした。また囲碁を好み、骨董を愛し所蔵も多かった。明治2年肝煎役、同10年戸長となった。また同志と共に殖産会社を起し、其他公共事業に盡くす所多かった。 【書画暦】書を山本源吾に学ぶ。
喜多寄青 （きた きせい） 親好、六蔵、左文、松涛園	【享生没年】76歳 1835~1912 天保6～明治45【生地】中島【住地】同【系譜】喜多家九代 【略歴】漢学を龍三瓦に、又京都の俳人、梅通につきて俳諧を研究した。明治5年大麻御用係となりてより以来神宮に奉仕し、明治11年神宮々掌、同14年主典となり、15年4月造神宮頭代を命ぜられ、27年正八位に叙せられた。24年職を辞して、閑生涯に入り、専ら風月を友として後進を誘掖し、且汎ぐ天下の同好者と交りて名声高きを致した。性敦厚にして同情に富み、人に接するに城壁を設けず、特に門弟に対しては懇切なりしかば、人皆其徳を称した。 【書画暦】書法を山本源吾に学ぶ。

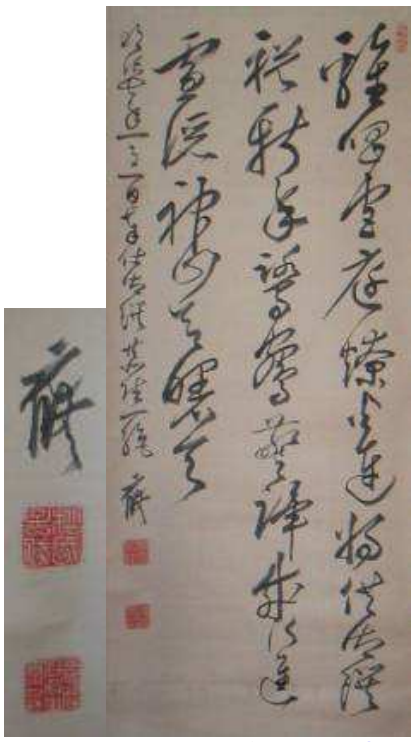
川崎春菜 （かわさき　はるな） 陽名、七郎、左太夫、汲井園、狭乃居	【享生没年】【生地】【住地】下中之郷烏帽子世古（宮町）【系譜】 【略歴】挿花の趣味あり。漢学の素養もあった。晩年子弟を集めて素読を教へ、且寺子屋教育を開始した。 【書画暦】御家流の書を山本源吾に学び、後京都八木利愛に従ふた。 画は安田守勝の門に遊びて狩野派を描いた。
黒瀬應昇 （くろせ　おうしょう） 政平、左十郎	【享生没年】34歳 1821~1854 文政4～嘉永7【生地】下中之郷（宮町）【住地】同【系譜】 【略歴】盲人清水珍一に和歌を学び、屢（しばしば）其代筆をなした。後、御巫清直（国学者）の門に入りて国学を学び、池の坊流の生花を能くした。 【書画暦】河崎春菜に従ひて書道を修め、又狩野派の画を能くした。
亀谷重次 （かめや　しげつぐ） 典助、新太郎、巴州、春玉	【享生没年】19歳 1827~1845 文政10～弘化2【生地】西河原（宮後）【住地】小林村（御園村） 【系譜】橋本實盛の男、寛道の養嗣 【略歴】長じて国文儒学仏典を父實盛に、和歌律令を足代弘訓に学ぶ。澁川流柔術を外祖重政に受けて、其薀奥を極めた。 【書画暦】5歳にして能く書を習ひ、長じて書方を河崎春菜（左太夫）に学ぶ。
櫻井政賢 （さくらい　せいけん）	【享生没年】【生地】【住地】【系譜】 【略歴】御巫清直（国学者）につきて国学和歌に通暁し、特に長歌をよくした。謡曲を巧にして、神路山、牛鬼等の作あり、又俳諧を好み、殊に坐談に長じ、談諭風発倦くを知らざるの慨があった。又祖先の墓地を整理し、其域内に標石を立て、これに寸尺を刻みて後円に備ふる等其注意周到なるを見るに足るものである。晩年、芭蕉行脚，高砂尉姥等の紙人形を作り、又受付の杖を作り和歌を彫って人に頒った。 【書画暦】御家流の書を能くした。
河村光子 （かわむら　みつこ） 充子	【享生没年】明治初年頃生【生地】【住地】堤世古（浦口）【系譜】春雄の妻 【略歴】和歌の嗜深く。又裁縫を能くし、維新前後、子女を集めて書方並びに裁縫を教へた。 【書画暦】御家流の仮名書に妙を得、当時女流の書家として敬はれた。

書：田器派及び諸派

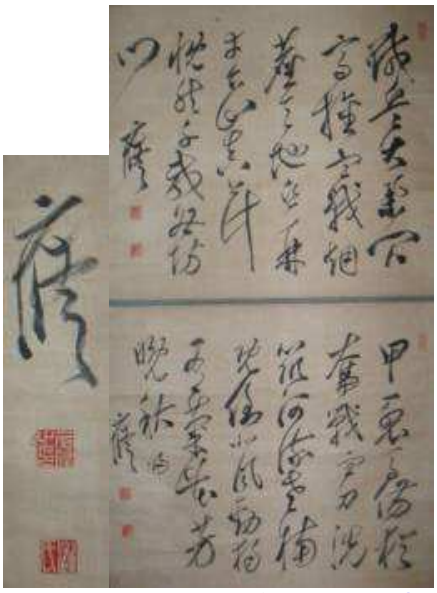
蒔田(田)器を祖としたグループなどを示します。



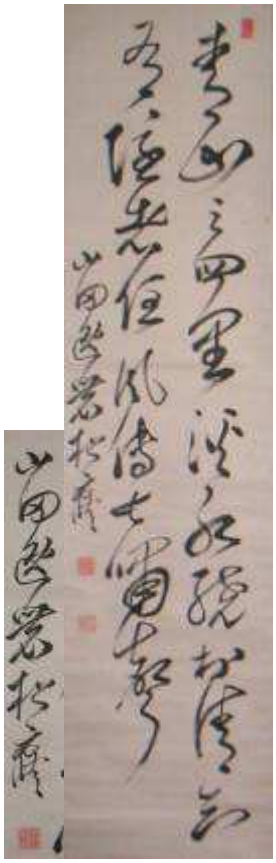
『詠竹五絶』松田雪柯



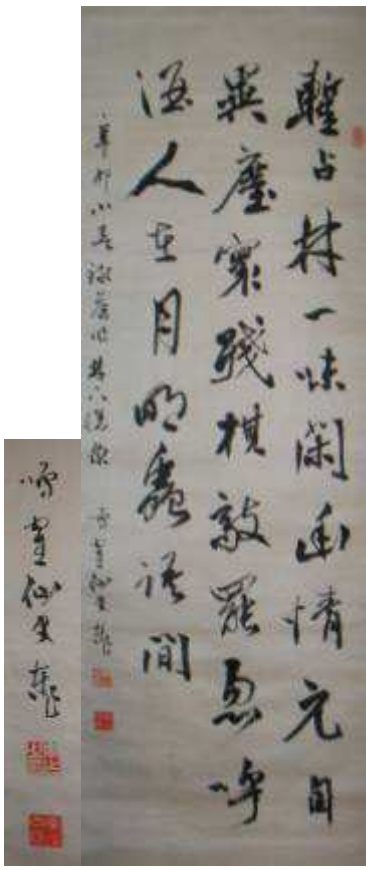
『元旦年仕御餅七絶』松田雪柯



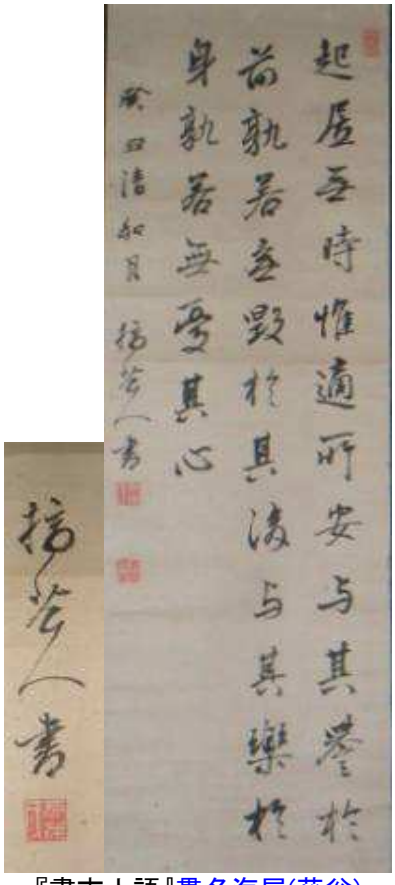
『楠菊池二公之七言絶句』松田雪柯



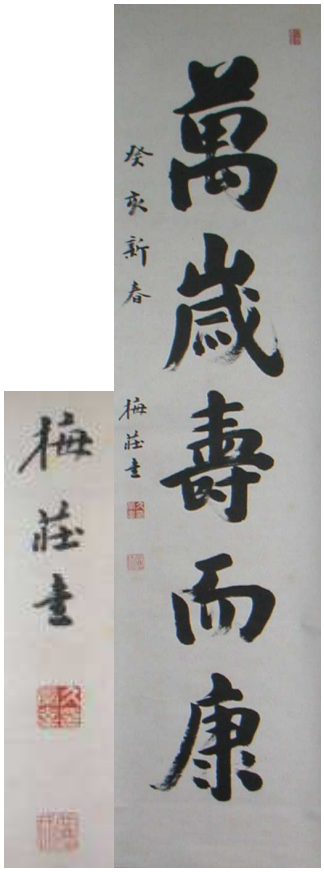
『五絶学書』松田雪柯



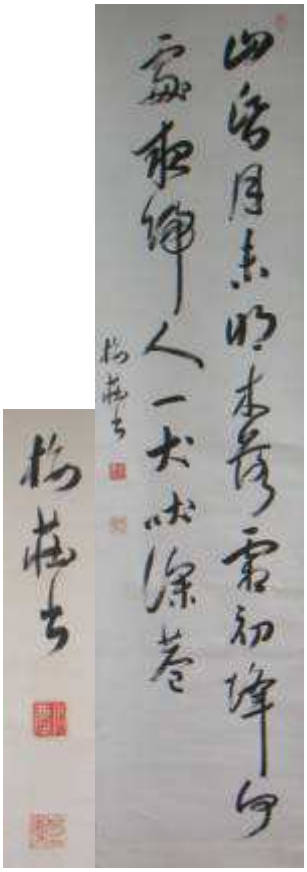
『書七絶』日下部鳴鶴【滋賀県】

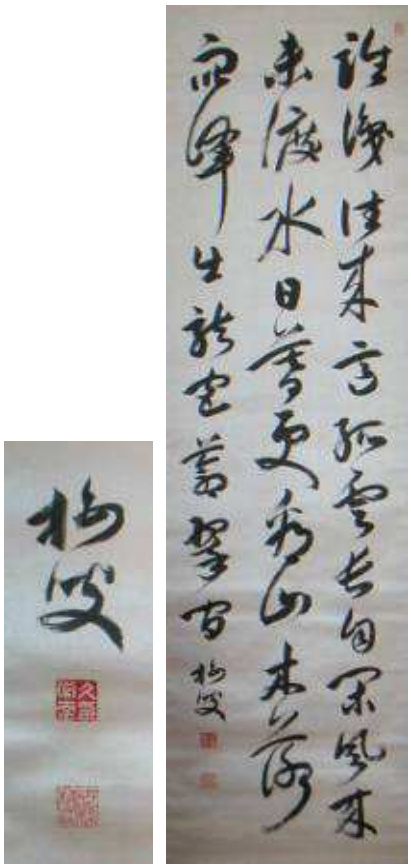


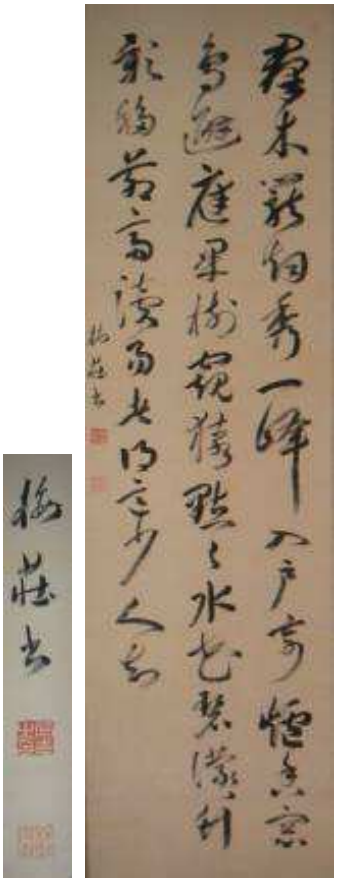
『書古人語』貫名海屋(菘翁)

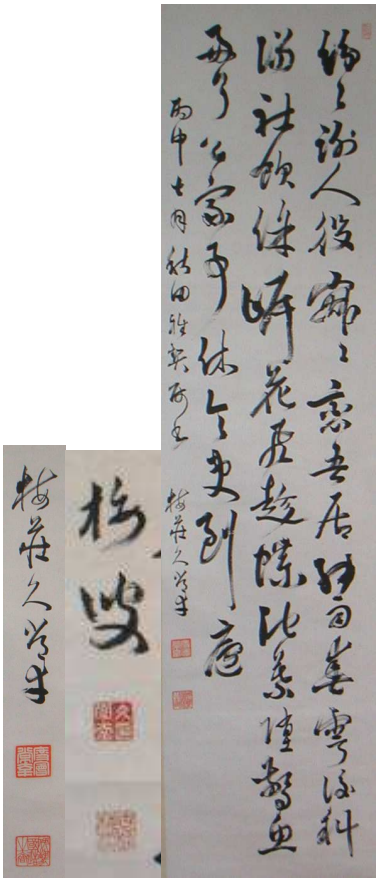


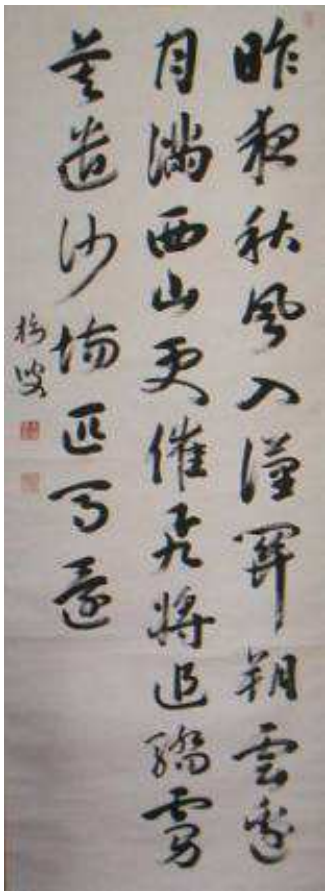
『一行詩』久志本梅荘

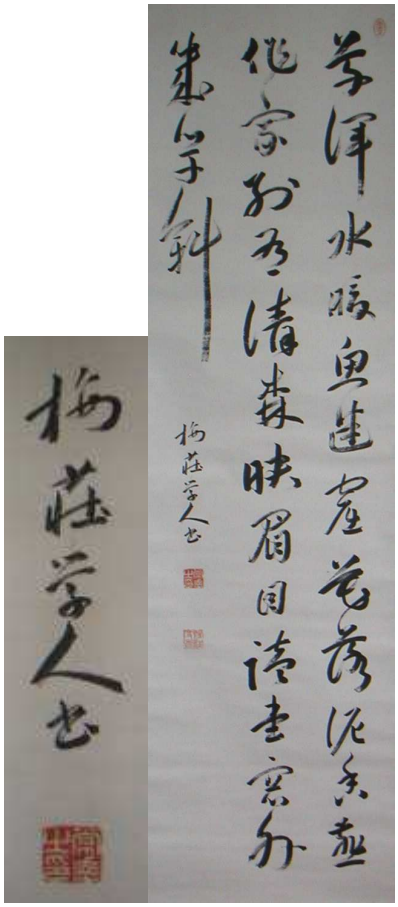

『二行詩』久志本梅荘


『草書五古』久志本梅荘

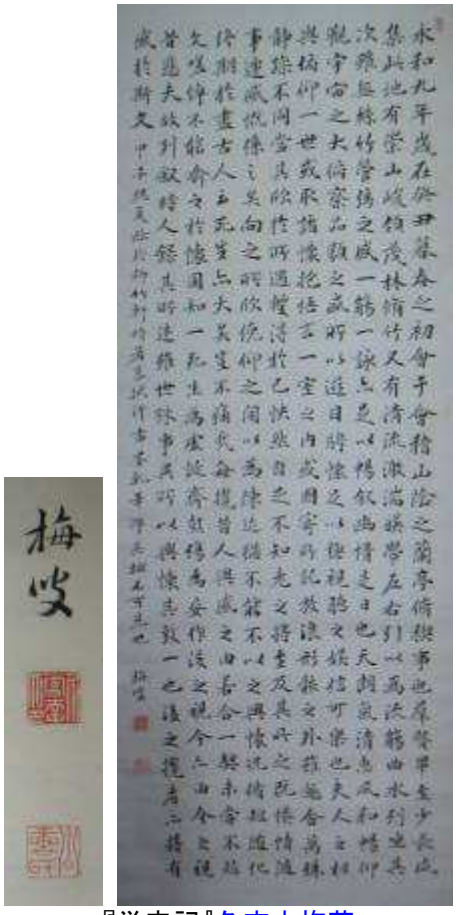

『行草書五律』久志本梅荘


『五言詩』久志本梅荘

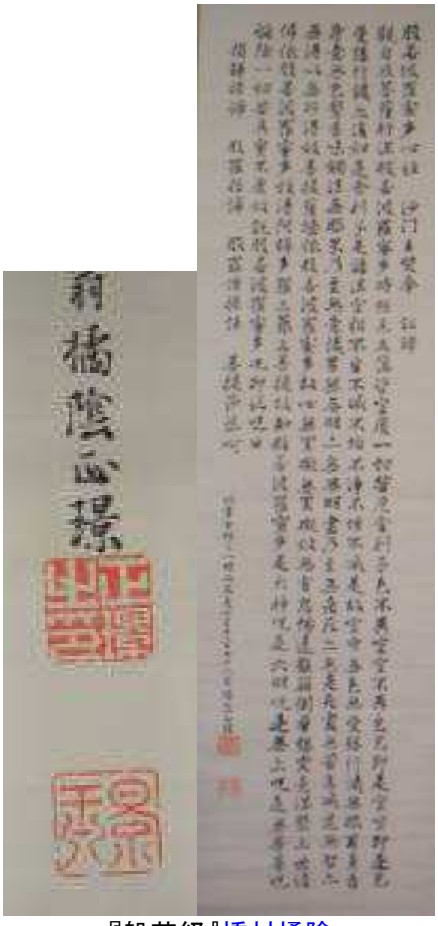

『秋之詩』久志本梅荘



『七律』久志本梅荘



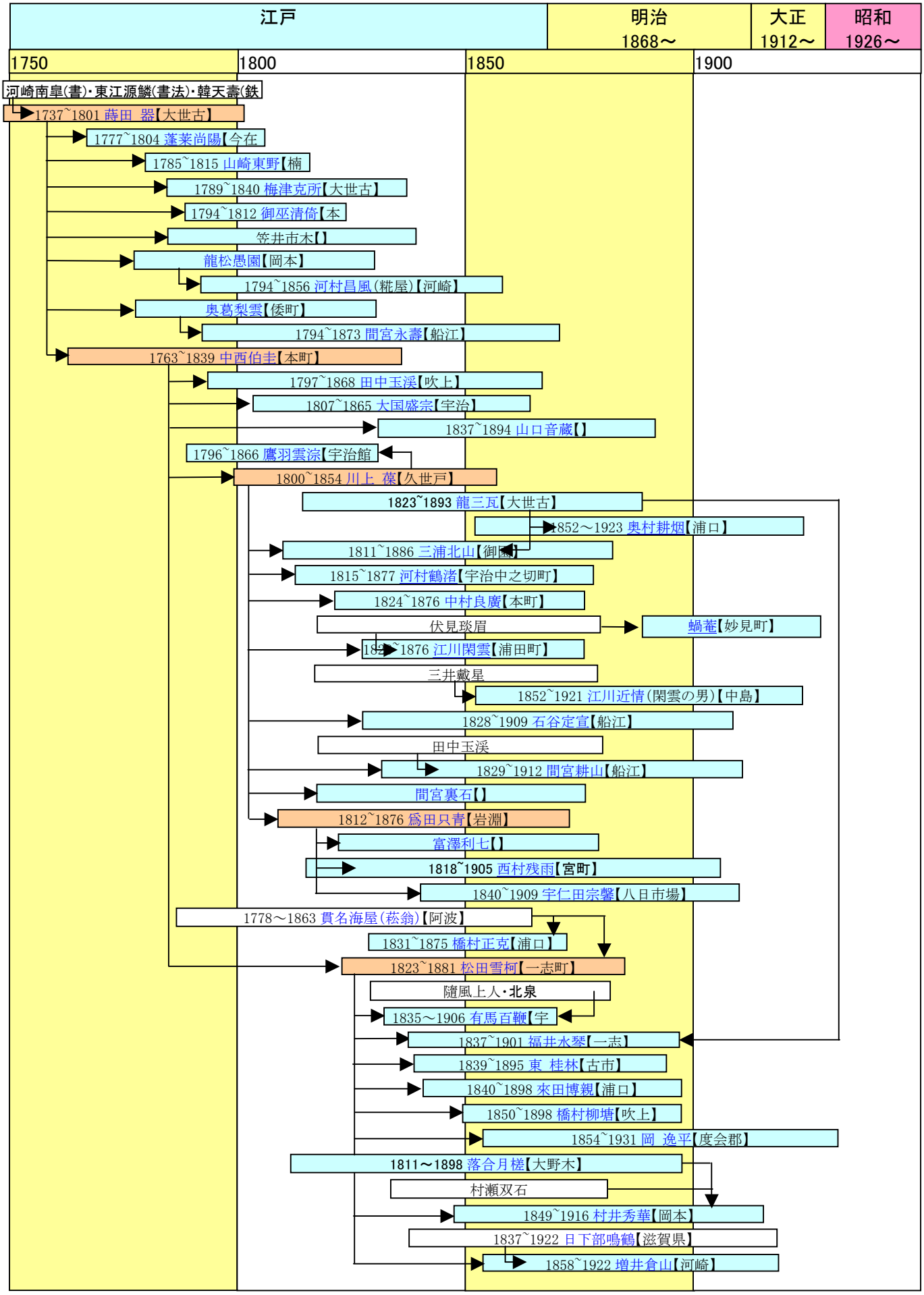
『栄辛記』久志本梅荘



『般若経』橋村橘陰

『蘭亭之記』橋村橘陰

書家（田器派及び諸派）系譜



書家（田器派及び諸派）略歴

蒔田 器 （まきた うつわ） 【本名・別称・字・号】 必器、田器、喜兵衛、亀六器、**暢斎**、彪山、箕山、金陵	【享生没年】64歳 1737~1801(明和5=1768 と書かれているが)元文2～享和元 【生地】【住地】大世古、尾上山西麓【系譜】畑井正興の男、宗孝の養嗣 【略歴】家は代々龍太夫の代官であった。 【書画暦】幼時より書を好み、初め河崎南皐に従ひ、長じて書及び鉄筆を韓天壽に受け、書法を東江源鱗に問ひて研鑽し、大に名声を掲げた。又画を月僊に学び、晩年尾上山の西麓に隠栖して其處を小虎渓と称した。或時江戸の某書家が参宮に来り、龍太夫の下女が持てる買物帳の筆蹟を見て田器の名を知った。後年田器江戸に出でて偶然其書家の門を叩きたるに、山田には田器といふ書家が居る筈ぢやと先年の物語りをなし、田器の名乗るを聞いて其奇遇に感じたといふ話がある。
蓬莱尚陽 （ほうらい しょうよう） 右京	【享生没年】28歳 1777~1804 安永6～文化元【生地】今在家【住地】同【系譜】尚賢の男 【略歴】 【書画暦】田器＝蒔田 器門人、書
山崎東野 （やまざき とうの） 末肇、元端、黙翁	【享生没年】31歳 1785~1815 天明5～文化12【生地】楠部（四郷村）【住地】同 【系譜】末孝の次男 【略歴】医術を平安の畑黄山に、詩文を山口凹庵に学んで、共に之を能くした。 【書画暦】書法を蒔田田器に問ひ之を能くした。
梅津克所 （うめづ こくしょ） 鐵之助、公益宇蔵、修蔵、主鈴、平子、蘭玉	【享生没年】52歳 1789~1840 寛政元～天保11【生地】大世古【住地】同 【系譜】六車の男【略歴】常に花圃を培溉して楽みとした。 【書画暦】詩賦を喜び、且書及び墨竹に名あり、歳11にして千字文を書し夙に神童の称があった。 書は蒔田必器に従い、画は王僊に学んだ。
御巫清倚 （みかんなぎ せいき） 十三郎、士参、豊川	【享生没年】19歳 1794~1812 寛政6～文化9【生地】【住地】田中中世古（本町） 【系譜】村井武里の男、清富の養嗣【略歴】 【書画暦】漢学に長じ、蒔田田器門の秀才として人々の嘱望を受けたが、惜哉夭折した。常時高向村木曳幟を書し、賞讃を博した。
龍松愚園 （たつまつ ぐえん） 正厚、桓卿、逸叟	【享生没年】【生地】【住地】岡本【系譜】 【略歴】詩文をよくした。 【書画暦】蒔田必器の門人にして書道に高名。
河村昌風 （かわむら しょうふう） 勝蔵、清兵衛	【享生没年】63歳 1794~1856 寛政6～安政3【生地】河崎【住地】宮後 【略歴】味啼醤油業を営むだが、火災に罹り、当時岩出某の営みたる宮後町糀屋を譲り受け移転した。又俳諧、狂歌の道に遊んだ。 【書画暦】書を龍松愚園に学ぶ。
奥葛梨雲 （おくくず りうん） 幾世屋三四郎、時雍、堯民、米野、丹井	【享生没年】【生地】【住地】常明寺門前町(倭町)【系譜】【略歴】 【書画暦】時田必器の門人にて書を好くした。練習すること累年。寒夜は水を机辺に置き、手屈して筆管を執ること能はざれば手を冷水に浸して暖を取るを常とした。一年東都浅草寺観世音菩薩の開張に当たり、古市の大籠備前屋小三郎白羅紗を用ひて織を作り、揮毫を梨雲に嘱した。彼は寒中水垢離をとり沐浴齋戒、精意を籠めて観世音の三字を大書し自ら一世の絶筆となした。果して全国より寄進せる幟中其筆蹟の見事なるもの此右に出づるはなかったと云ふ。某候其書風を愛して措かず、百五十石を以て抱へんことを申出されたが、梨雲自ら読書に乏しき由を述べて固辞した。以て其書道に達せしのみならす、気骨あり見識ある人であったことが分る。
間宮永壽 （まみや えいじゅ） 兵次郎、兵司、端芳	【享生没年】79歳 1794~1873 寛政6～明治6【生地】船江【住地】同 【系譜】間宮耕山の父【略歴】 【書画暦】奥葛梨雲門人、書

中西伯圭 （なかにし はっけい） 弘琰、小五郎、玄蕃、此面、子圭、佩蘭、白鶴園	【享生没年】77歳 1763~1839 宝暦13～天保10【生地】田中中世古（本町）【住地】同【系譜】弘佐の次男 【略歴】外宮権禰宜、正四位上に至った。又詩を橋村痴亭に、漢学を阪柳園に受け、狩野派の画をも學むだ。 【書画暦】書を蒔田必器の門に学び、その真髄を窺ふた。川上葆は其高足である。嘗て師必器及小俣粟斎と同行して京都に遊び、必器が酔後扇面に一計を書したるを見、その書少しも平生と異なるなきに浩歎し、彼は終生学ぶも此域に達するの見込なしとて、爾来又筆を執らなかった。必器驚いて懇諭至らざるなく、遂に復勉強して妙技に達した。
田中玉渓 （たなか ぎょくけい） 易慎、勘太夫、永画、尺厳	【享生没年】72歳 1797~1868 寛政9～明治元【生地】吹上【住地】同【系譜】喜八郎 【略歴】代々三日市太夫次郎の代官にて長老の席を占め、若年の頃は毎年奥州の壇家廻り配札をなし、老後は専ら子弟の教育に当り、家塾を開きては教を受くるもの数百人机を並ぶるもの常に席に満ちた。風流韻事を好み、詩を東夢亭、龍三瓦に、其他大鼓をよくし、茶道の古式に通じ、多趣味にして各皆其堂に入った。又和漢の書画幅を蒐蔵し、毎朝床間に懸け、代るがわる之を愛観したが、孰（いず）れも名幅ならざるはなかった。老後眼を病み、号下に昧叟と書したが、遂に失明した。早く妻を失ひ、亦長女を亡ひ、晩年を淋しく送った。 【書画暦】書を中西伯圭に学び、八分並楷書を能くして妙域に達したが、艸（そう）行の書は後に月儕に私淑する所があった。後京都に出でて画を文鳳に学んだ。例月詩及画の色紙に認めたるものを吟友並門人より募集し、扁額に納めて世木神社内天神社前に掲げて之を献納し、且稽古の資とした。
大国盛宗 （おおくに せいそう） 治郎、左太郎	【享生没年】59歳 1807~1865 文化4～慶應元【生地】宇治【住地】同【系譜】盛業の長男 【略歴】父盛業並に井筒守訓、益谷末壽について国学を修め、又鷹羽龍年に漢学を学んだ。 【書画暦】中西伯圭に筆道を、叔父士豊に画を学んだ。
山口音蔵 （やまぐち おとぞう） 義達	【享生没年】58歳 1837~1894 天保8～明治27【生地】野原村（七保村）【住地】同 【系譜】【略歴】容貌魁偉凛（りん）として犯すべからざるの気風あり。資性剛直にして厳正、義に勇み人に阿諂（とう）せず。常に読書を好み、また甲州の三枝與助より算法漢学を、井徳辰より国学を、橘蔵之助より剣道を学んだ。明治5年以来野原村の副戸長、戸長を勤め、同22年7月村長に当選し、同26年退職した。此間約21年、励精一日の如く村治の改善と進歩を図り治績大に挙つた。明治8年自ら耕地宅地等の大測量に当り経費を節減し、同9年黒坂野原両村を合併し、野原野添両村飛地の所轄組替をなし、又両村間の道路を修繕し尾合川に橋梁を架した。また辻喜代蔵につきて農事改良の説を聴き、村民に其実施を勧誘し米麦の良種を取寄せ、養蚕を奨励し、荒廃の地を拓き、植林を奨励し、知新小学校の開設、教育施設の改善を計り、祖霊殿を建設して神葬式を行はしめた其功績等数ふるに遑（いとま）あらず。屢（しばしば）公私より賞金を授具された。 【書画暦】殊に書を能くし、顔真卿王義之の風を慕ひ、中西伯圭に私淑した。
鷹羽雲涼 （たかは うんそう） 龍年、主税、壮潮、瀑翁、半鱗士、天紳子	【享生没年】71歳 1796~1866 寛政8～慶應2【生地】館【住地】同、鳥羽町 【系譜】未有の男 【略歴】初め山口凹巷に漢学を学むだが或時其家系を見て発奮し、歳14江戸に出で、林檉宇（ていう）及び岡本花亭の門に遊び講学の傍に詩文を練った。猪飼敬所、齋藤拙堂、菊地五山、大窪詩佛等と交り、知を岡部近江守に受け、又鳥羽の薄儒小濱撲斎と善かった。天保初年帰郷、十余年間神宮に奉仕し、五十鈴川新橋の東詰に蓑唱庵を構え、風月を賞し、経書詩文を講じ，浦田改亭、十文字古青、有馬百鞭等を其門に出した。文久二年鳥羽藩に仕へ、奉行格に列し，督学に任じ、顧問を兼ねた。 【書画暦】川上葆に書を学む

川上 葆 （かわかみ ほう） 昌長、源十郎、秋成、布施庵	【享生没年】55歳 1800~1854 寛政12～嘉永7【生地】久世戸【住地】同 【系譜】川上家の宗家 【略歴】家は世々味噌屋であった。幼にして父を喪ひ、13歳にして家を継ぎ、母に就きて家業を営むだ。祖先の倹素を以て家を興したることを思ひ、常に自ら戒飾し、己を薄くして人に施し、以て陰徳をなした。天保の飢饉に際し施行小屋を設け、粥を煮て之を施す数月、暮夜下人を貧家に遣り、窃に金穀を投入せしめた。又金六百両を出して汐合川渡船場の費用に充て、無料にて往来せしめた。謙遜にして、山田奉行より羽書取締役を命ぜられて奉行所に出勤するに当り、途中は帯刀を脱し門に及んで、初めて之を帯したと云ふ。 【書画暦】書法を中西伯圭に学び，造詣深く、自ら一家をなし門人甚多かった。
龍 三瓦 （りゅう さんが） 維孝、主計、伯仁、東洲、松菊草堂	【享生没年】71歳 1823~1893 文政6～明治26【生地】大世古【住地】東京 【系譜】雪窓の男 【略歴】幼にして学才あり、歳17浪華に出でて篠崎小竹の門に遊び、後又斎藤拙堂に学んだ。業成って郷里に帰ったが、閑居して濫りに人と交はらず、日夜諸家所蔵の書を借読するを楽しみとした。維新の際、国学の御巫清直と相対峙して漢学詩文等の碩学の一人で、門生も多かった。明治元年宮崎学校の都講となり、次て山田学校の教授となったが、廃校の後、東京に出でて著述に従事し、同9年修史館に入り、又群馬県師範学校、学習院に歴任した。嘗て（かって）東京図書館に抵りて書を覧るに未曾て見ざるの書が多かった。三瓦扑喜勇躍日に行厨を携へて之を読み、朝より暮に及び、三年余一日も欠くことなかった。蓋し此館開設以来勉強斯くの如き人を見ず、館其功労を賞して、其目録数部を下附し、特に書籍の帯出を許したが、此時三瓦已に悉く同館の書を読了して居つたと云ふ。【書画暦】
奥村耕烟 （おくむら こういん） 次郎、治郎、石外山人	【享生没年】72歳 1852～1923 嘉永5～大正12【生地】浦口【住地】岩渕【系譜】喜早清淵の次男 奥村家を継いだ【略歴】 【書画暦】書は龍三瓦に学ぶ。漢学。近藤篁村及び山口五水門人。南画を学ぶ。
三浦北山 （みうら ほくざん） 義徳、権兵衛、林仙、北儡	【享生没年】76歳 1811~1886 文化8～明治19【生地】小林村（御園村）【住地】同、常盤【系譜】旧姓大畑 【略歴】山田奉行所の吏。 【書画暦】龍三瓦、川上葆につきて漢学、書法を学び、殊に能書の聞えがあった。
河村鶴渚 （かわむら かくしょ） 小八、清六、清兵衛	【享生没年】62歳 1815~1877 文化12～明治10【生地】中之切【住地】河崎【系譜】岸田小左衛門の長男、昌風の養嗣 【略歴】性俳諧を好み、養父につきて研讃し。 【書画暦】書を川上葆に学びてよくした。
中村良廣 （なかむら よしひろ） 政蔵、左右三、善兵衛、其桃	【享生没年】53歳 1824~1876 文政7～明治9【生地】田中中世古（本町） 【住地】堤世古（浦口）【系譜】樋口秀惇の四男、善兵衛の養嗣 【略歴】旧主足代弘訓に就きて和歌を学び、俳詣にも通じた。性温厚篤実で、親戚知己等の世話をなし、若し其不和葛藤を生ずることあれば、必ず其仲裁をなし、融和せしめざれば措かず、其他年少者を教訓指導し、改過遷善の実を挙げしめたること少なからず、人皆其徳を称した。 【書画暦】川上葆につきて書を学び、楷行草の三体を能くした。
蝸菴 （かくあん） 道虎、拳従、虎渓、虎泣庵	【享生没年】【生地】【住地】妙見町虎尾山麓【系譜】 【略歴】雲水の僧。 【書画暦】伏見琰眉の門に入り書道を竟め、揮毫見るべきもの多く、時人其霊腕を称した。
江川閑雲 （えがわ かんうん） 約之、半九郎、禮郷	【享生没年】49歳 1828~1876 文政11～明治9【生地】上中之郷【住地】中島 【系譜】河崎政厚の五男、清保の養嗣 【略歴】山田羽書取締役の一人であったが明治維新後度会府に出仕して中屬となった。又詩を東夢亭に尋ね、当時一流の風流家にして、揮毫を乞ふものが多かった。 【書画暦】書を川上 葆及伏見琰眉に学び、

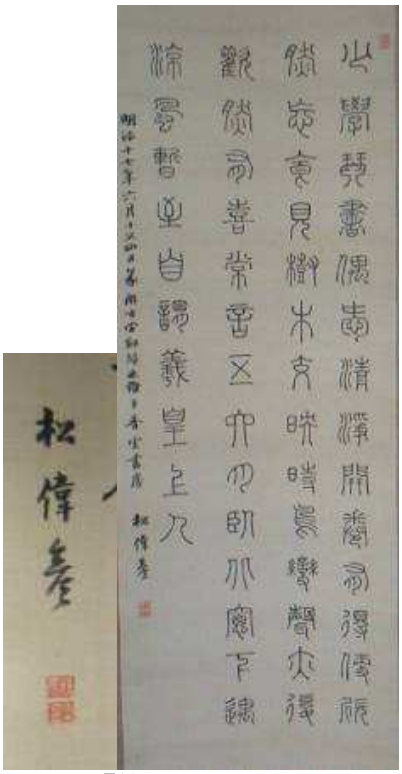
江川近情 （えがわ きんじょう） 成之、士信、両日庵	【享生没年】70歳 1852~1921 嘉永5～大正10【生地】中島【住地】同 【系譜】閑雲の長男【略歴】幼にして家学を受け、龍三瓦に従ひて漢学を修め、 【書画暦】三井戴星に就て書道を学び、書は最其長ずる所にして、弘法大師の流を慕ひ、之に貫名海屋の風を参酌して一家を成した。嘗て漢魏より明清に至るまで、及び本朝近古の名士の奇話逸事を蒐録して両日菴史話を著はし、又空海の真蹟や古法帖を模写するもの70余帖に及んだ其揮毫に係る行書千字文は上木せられて世に流布して居る。明治25年書学会を起して書道を教授し、門人頗る多かった。後同32年山田中学校に聘やられて習字を教授した。
石谷定宣 （いしや ていせん） 辻吉、耕雲、昌山	【享生没年】81歳 1828~1909 文政11～明治42【生地】船江【住地】同 【系譜】正順の長男 【略歴】性文学武芸を好み。漢学を鷹羽雲淙に，国学を足代弘訓に学び、武術を水戸藩士助川三郎に、柔道を鳥羽藩士荒井十内に受けた。夙に勤王の志あり、師助川三郎其他の水戸藩士と共に事を謀り、かの桜田事件に際して嫌疑を受け、将に自盡せんとしたが、同志に救はれて伯父川上氏の別望にかくれて難を免れた。明治維新後は又世事を談せす、文墨に親しむだが，同九年衆に推されて船江町の戸長となった。時恰も農民暴動起るに会したが、自ら青年等を引率して之を防ぎ、一歩も同町内には入らしめなかった。【書画暦】書を川上 葆に学んだ。
間宮耕山 （まみや こうざん） 壽、兵次郎、静和書屋、静華老人	【享生没年】84歳 1829~1912 文政12～明治45【生地】船江【住地】同 【系譜】兵次郎の男、幼：田蔵【略歴】 【書画暦】書を川上葆に學び、又田中玉渓を師友とした。明治年間山田有数の書家にて、その揮毫の天覧に入ったものがあった。
間宮裏石 （まみや りせき） 兵衛門、琴芳	【享生没年】【生地】【住地】船江【系譜】 【略歴】 【書画暦】川上葆門人、書
爲田只青 （ためだ しせい） 華明、後三、兵太夫、子徳、夢々亭	【享生没年】65歳 1812~1876 文化9～明治9【生地】岩淵【住地】八日市場、岡本 【系譜】小林對鷗の三男 【略歴】俳諧に堪能にして神風館十五世を襲ぎ、其門に遊ぶもの多かった。【墓地】天神丘一且過山無えん地 【書画暦】書を川上葆に学び、松田雪柯と双璧の称あり、時人其手蹟の美を歎賞して止まなかった。
富澤利七 （とみさわ りひち）	【享生没年】【生地】【住地】【系譜】 【略歴】旅館藤屋の主人。資性温順、其祖業を継承するや、家風を確守し、質素潔白を旨としたので、高尚優雅の旅客東西より麕(きん)集し、其名声益揚がった。又囲碁を好んだ。 【書画暦】業務の余暇を以て、爲田只青につきて書方を習ひ、其高足となり、
西村殘雨 （にしむら ざんう） 安衡、寅五郎、六郎、葛垣	【享生没年】88歳 1818~1905 文政元～明治38【生地】下中之郷（宮町） 【住地】四谷一之木【系譜】安延の男 【略歴】性勤直狷介にし気聞強記であった。神風館十七世を襲いだ。 【書画暦】爲田只青について俳諧及書法を学ぶ。
宇仁田宗馨 （うにだ そうけい） 香斎、有年	【享生没年】70歳 1840~1909 天保11～明治42【生地】一志郡香良洲町 【住地】八日市場【系譜】藤川良斎の三男、久平の養嗣 【略歴】漢学を松田雪柯及び福井端隱に学んだ。資性温厚にして徳望あり、明治4年代々勤めたる山田両替座の廃でらるるや、度会県の中屬となり、会計課長を務め、更に同県の廃止と共に三重県に転じて屬となり、同10年致仕、同年神宮に奉仕し、豊受太神宮禰宜として出納課長に任せられ、又大講義に補せられ、更に神宮教院二等教監となり、同11年退職した。同19年太田小三郎等と**神苑会**を設立して其監事となり.終世其事務を掌った。又同22年更に**参宮鉄道**を設立して其取締役となり、同28年**宮川電気株式会社**を創立して其取締役となり、同32年北海道十勝国に於て三百町歩の払い下げを受け、県下より数十戸の移住を勧誘して其開墾に当らしめ、**南勢開拓会社**と称し、其社長として努力した。 【書画暦】書及俳諧を爲田只青に学ぶ。

貫名海屋(菘翁) （ぬきな かいおく） 吉井 苞、君茂・子善、海客、海叟、菘翁、方竹山人、須静山人	【享生没年】86歳 1778～1863 安政7～文久3【生地】阿波国【住地】【系譜】 【略歴】晩年には下鴨神社に奉仕し、諸国を遊歴した。 【書画暦】書は西宣行に師事して宋法を学ぶ。近世第一の能書家と称され、須静塾を開く。
橋村正克 （はしうら まさかつ） 壽丸、宰記、礼郷、春圃	【享生没年】45歳 1831~1875 天保2～明治8【生地】上中ノ郷（浦口）【住地】同 【系譜】正立の男 【略歴】外官権禰宜、正四位上に至った。足代弘訓に歌を学び、小川流の煮茶を修めた。「影もよく匂ひも深し朧夜の月と花との中岡の宿」と、料亭中岡（錦水楼）の未だ微々として世に顕はれざりし頃。此楼の風景を詠じて独り其美を唱道して居ったが、後果して繁盛を見るに至り、同楼の主人之を徳として、彼が自筆の歌を扁額とし、又器具にも之を寫して永く紀念とした。故ありて共妻を去りたる時、「見捨てしは吾ばかりなり宿かへて又咲き匂へ姫百合の花」と短冊に書いて送つたとの話がある。 【書画暦】谷口靄山に画を学びて堪能であった、又貫名海屋に書を問う。
松田雪柯 （まつだ せっか） 元修、縫殿、左近、公静、聊得軒	【享生没年】59歳 1823～1881 文政6～明治14【生地】下ノ久保（一志町）【住地】同【系譜】適翁の男 【略歴】鎰取内人に補し，明治維新後更に皇太神宮主典に任じ大講義を兼ねた。初め父適翁に漢学を習ひ、後猪飼敬所の門に入り、又谷三山にも従った。 【書画暦】書は少にして中西伯圭に学び、其没後は上京して貫名（菘翁）海屋に従ひ、其書諭を聴いて大に悟る所があった。山田奉行秋山安房守の爲めに学を講じ、又家塾を開いて漢学並びに書法を教へた。明治11年官を辞して東京に出で巌谷一六の家にあること数年、日下部鳴鶴等と相往来して書名益高く、清國楊守敬の激賞を得たと云はわる。後年三條實美に知られ、其揮毫の額を与へられた。 一志町にある 松田雪柯翁旧跡碑
久志本梅荘 （くしもと ばいそう） 常幸、公慶、**梅叟**、師竹軒	【享生没年】72歳 1855～1927 安政2～昭和2【生地】東京四谷【住地】山田→同 【系譜】常庸の男 【略歴】外宮禰宜に補せられ正五位上に至ったが、明治4年官制改革の為め職を解かれ、明治18年父と共に東京に移住した。学習院教授となり、また高松宮殿下の命を拝し、後又澄宮殿下に法帖を上つた。其他貴顯紳士の其門に入り教を受けるもの多かった。資性温雅にして風流を嗜しみ、各地より揮毫を乞うもの多く、気が向けば筆管を携えて諸国を漫遊した。 【書画暦】幼にして画を松田雪柯に学び、後更に碑帖により百家に出入りし、研鑽益深く、遂に斯道の奥義を極むるに至った。
橋村橘陰 （はしむら きついん） **正環**、景玉、石瓢子、	【享生没年】74歳 1845~1919 弘化2～大正2【生地】一志郡松崎村【住地】一志久保 【系譜】中山正廣の次男、正衛の養嗣 【略歴】資性剛直不羈（き）、夙に松田雪柯の門に入って漢籍を学び、外宮祠官として家職を襲いで居たが、明治17年職を辞して東京に出で諸名士に交わり、また行餘学舎を興して子弟を教授した。後再び郷里に帰りて神宮権禰宜に任じ従六位に叙せられ、神宮皇學館教授を兼ねた。【書画暦】
有馬百鞭 （ありま ひゃくべん） 麿助、希駿、醉漁	【享生没年】72歳 1835～1906 天保6～明治39【生地】鳥羽【住地】宇治、志摩国府村 【系譜】鳥羽藩士の家に生まれ 千里の男 【略歴】明治維新後、藩の権大属に任じ、初めて民政にも参与した。退官後、常安寺に塾「日新校」を開き、多くの英才を教養した。明治8より神宮に奉仕し、権禰宜従七位まで進む。 【書画暦】書は隨風上人、松田雪柯を師とし後に大師法を京都の北泉に学び一家を成した。 南画派。幼少より詩画を好み、画は魚住荊石、田能村直入に学ぶ。

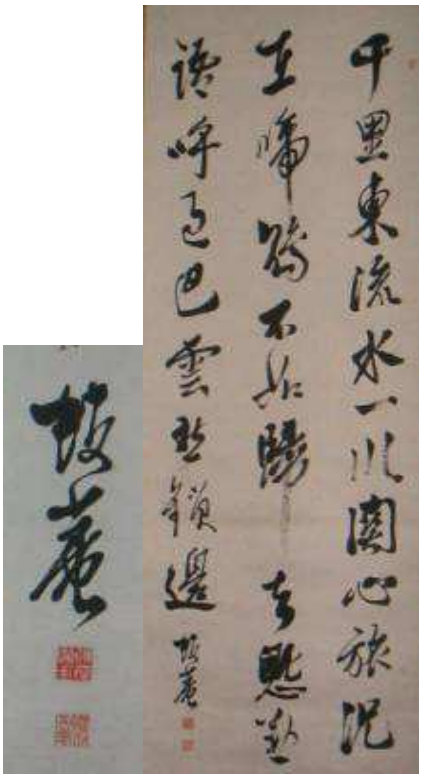
福井水琴 （ふくい すいきん） 末経、若狭、士朗	【享生没年】65歳 1837~1901 天保8～明治34【生地】下之久保（一志）【住地】同 【系譜】端隠の長男 【略歴】御巫清直につきて国文及和歌を習ひ、父端隠より篆刻及び茶道を受けた。天保10年6年6月外宮権禰宜従五位下となり累進正四位下に至ったが、明治4年神宮改革により廃官となった。同22年9月両宮正遷宮及び同33年9月内宮臨時遷宮に雇を勤め、同34年神都霊祭会の斎主となった。 【書画暦】龍三瓦並びに松田雪柯につきて漢文及筆道を学ぶ。父端隠より篆刻を受けた。
東 桂林 （ひがし けいりん） 茂平、彦十郎	【享生没年】57歳 1839~1895 天保10～明治28【生地】飯南郡仁柿村（松阪付近） 【住地】古市【系譜】林棕林の男、夢亭の養嗣 【略歴】神宮禰宜に任じ，後大神神社、結城神社宮司を歴て再び神宮禰宜に任じ、従五位動五等に叙し瑞實章を賜はつた。 【書画暦】夙に松田雪柯の門に入りて漢籍書法を学び、詩文を能くし其風格高逸で、書は殊に大字に巧であった。
來田博親 （きただ ひろちか）	【享生没年】59歳 1840~1898 天保11～明治31【生地】浦口【住地】同【系譜】讃岐の男 【略歴】町吏にして町の財政整理に当り功労あった。 【書画暦】書を松田雪柯に、画を林綜林に学んだ。
橋村柳塘 （はしむら りゅうとう） 延利、親正、廣郷	【享生没年】49歳 1850~1898 嘉永3～明治31【生地】吹上【住地】同【系譜】出口常栄の男、正路家再興 【略歴】外宮権禰宜、従五位下に至り、後神宮々掌となった。 【書画暦】松田雪柯について漢学書法を学び、従学するもの多かった。
岡 逸平 （おか いっぺい） 士燁、江湯、自提居士	【享生没年】78歳 1854~1931 安政元～昭和6【生地】泉村（神原村）【住地】同【系譜】 【略歴】河崎恪齋につきて漢学を、又冷泉伯につきて小川流煎茶を学んだ。明治6年9月第一大区小十六区副戸長、同7年8月泉村戸長となりて村治に参興し、同25年10月神原村長に選ばれてより再三選任し、又県会議員郡会議員及び同参事会員に常選した。日清戦役の功により木杯一個を又日露戦役の功により動七等に叙せられ白色桐葉章を賜はった。青年時代には詩文、書法に没頭したが、中年に至り奔然覚る所あり農、林業の改良、奨励、村政改革、自治の向上を計って大に郷土の為に尽した。又白蓮協会を創設し、時々名士大家の講話を乞ひ、民衆一般の思想浄化に努め，明治22・3年頃**宇治、五ケ所間の道路改修**を計画し交通運輸の便利を計った。交友頗（すこぶる）多く、矢土錦山、巌谷一六、永源寺管長芦津定全、西宮海青寺中原南天棒の如き其尤なろものであった。 【書画暦】松田雪柯につきて書道を修める。
落合月槎 （おちあい げっさ） 俊明、夙夜	【享生没年】88歳 1811～1898 文化8～明治31【生地】大野木村（内城田）【住地】岡本 【系譜】中西某の子息【略歴】 【書画暦】四条・円山派。上部茁斎の門人にて円山派の画を能くし、資性温厚、門人を教育するに妙を得，其下に逸材を輩出した。
村井秀華 （むらい しゅうか） 與四郎	【享生没年】68歳 1849~1916 嘉永2～大正5【生地】岡本【住地】一之木【系譜】高木内蔵の三男、常之の養嗣 【略歴】度會郡書記となり、学務衛生両課に勤むること三十有余年、小学校の設備、普及等に尽力した。 【書画暦】村瀬双石、松田雪柯、落合月槎について学び、書及画を能くした。
日下部鳴鶴 （くさかべ めいかく） 東作、子暘、野鶴・鶴叟	【享生没年】85歳 1837～1922 天保8～大正11【生地】滋賀県【住地】【系譜】【略歴】 【書画暦】書家。初め巻菱湖・貫名菘翁の風を慕うが、楊守敬の来朝により、大きな影響を受ける。のち中国に遊び、兪曲園・呉大澂・楊見山・呉昌碩らと交わった。その格調高い書風で近代書道界に多大な影響を与える。
増井倉山 （ますい そうざん） （擁の手片がない）、久之助、孔容、秋香、玄斎	【享生没年】65歳 1858～1922 安政5～大正11【生地】河崎【住地】同、岩渕 【系譜】義爲の長男 【略歴】明治26年神宮宮掌に任じ、権禰宜正八位まで至り、勲八等を授けられた。 【書画暦】南画派。松田雪柯、日下部鳴鶴に師事し、漢魏六朝の書法も極めた。また詩画を能くした。

書:篆刻･鉄筆派

『高芙蓉先生印影』福井端隠？



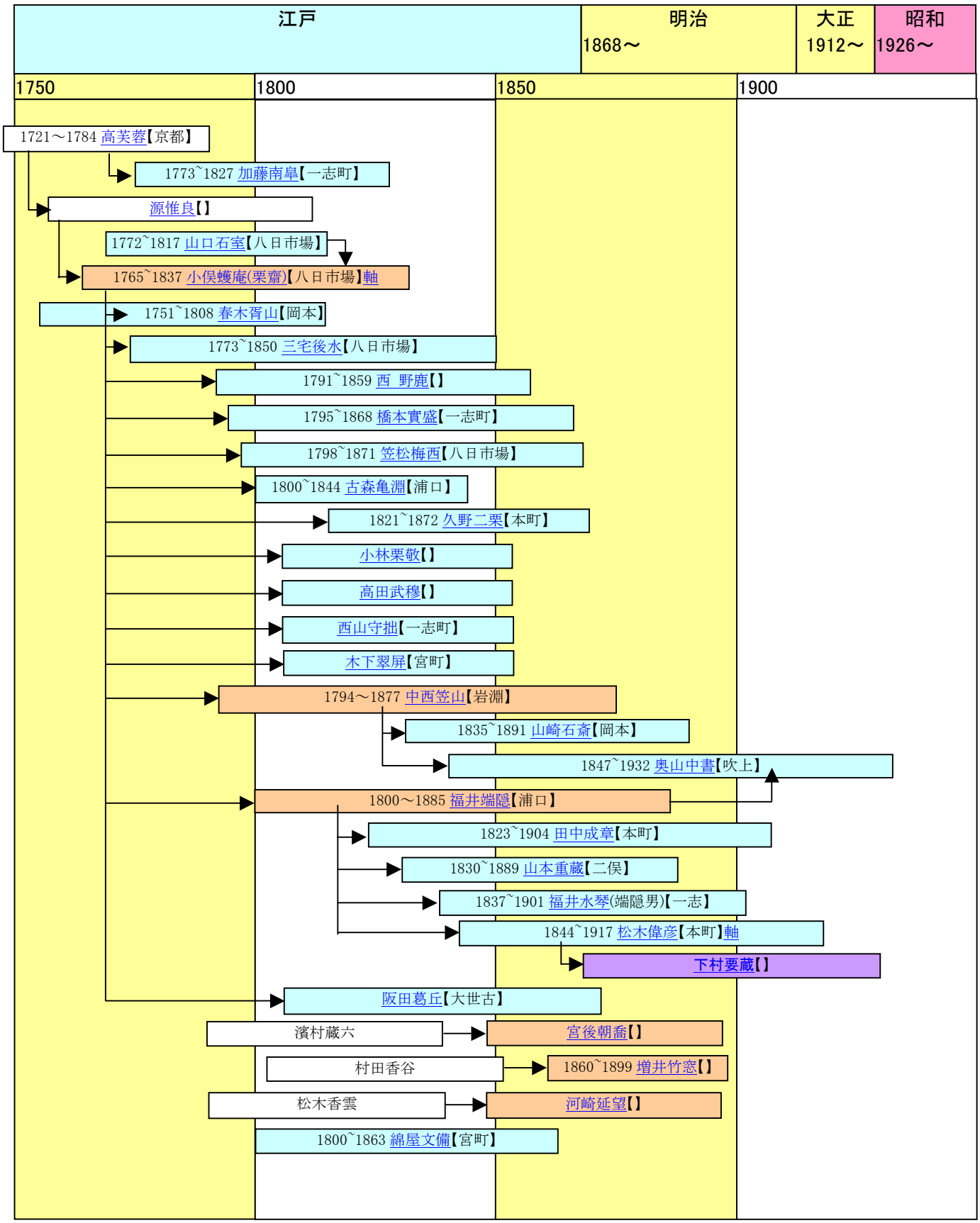
『篆書』松木偉彦



『七律詩』小俣蠖庵(栗齋)

『巖居』玉木町飯嶌氏所蔵
小俣蠖庵(栗齋)

書家（篆刻・鉄筆派）系譜


江戸
明治
1868～
大正
1912～
昭和
1926～
1750
1800
1850
1900
1721～1784 高芙蓉【京都】
1773~1827 加藤南皐【一志町】
源惟良【】
1772~1817 山口石室【八日市場】
1765~1837 小俣蠖庵(栗齋)【八日市場】軸
1751~1808 春木胥山【岡本】
1773~1850 三宅後水【八日市場】
1791~1859 西 野鹿【】
1795~1868 橋本實盛【一志町】
1798~1871 笠松梅西【八日市場】
1800~1844 古森亀洲【浦口】
1821~1872 久野二栗【本町】
小林栗敬【】
高田武穆【】
西山守拙【一志町】
木下翠屏【宮町】
1794～1877 中西笠山【岩洲】
1835~1891 山崎石斎【岡本】
1847~1932 奥山中書【吹上】
1800～1885 福井端隠【浦口】
1823~1904 田中成章【本町】
1830~1889 山本重蔵【二俣】
1837~1901 福井水琴(端隠男)【一志】
1844~1917 松木偉彦【本町】軸
下村要蔵【】
阪田葛丘【大世古】
濱村蔵六
宮後朝喬【】
村田香谷
1860~1899 増井竹窓【】
松木香雲
河崎延望【】
1800~1863 綿屋文備【宮町】

書家(篆刻・鉄筆派)略歴

高芙蓉 （こうふよう） 【本名・別称・字・号】 孟彪、孺皮、中岳画史	【享生没年】63歳 1721～1784 享保6～天明4【生地】京都【住地】【系譜】尤軒の子 【略歴】 【書画暦】江戸中期の儒者。宍戸侯に仕え、書画・篆刻を能くする。
加藤南皐 （かとう なんこう） 熊次郎、甚栄門、成苗、有年	【享生没年】55歳 1773~1827 安永2～文政10【生地】一志久保【住地】同【系譜】岸原孝言の長男、爲草の養嗣 【略歴】書舗を営むだ。性風雅にして俳句を好みて之を徳田椿堂に学び、且琵琶の名手にして、家業を顧みず、諸国を行脚して一生を風月と共に暮した。 【書画暦】高芙蓉に学びて篆刻を能くした。
源 惟良 （みなもとのいら） 森礼蔵、顕哉、石東壑	【享生没年】生没年未詳【生地】【住地】【系譜】 【略歴】 【書画暦】高美蓉に篆刻を学び、文もよくした。
山口石室 （やまぐち せきしつ） 奎、常正、金吾、煥章、他山楼、藤岡、梔子園	【享生没年】46歳 1772~1817 安永元～文化14【生地】【住地】横橋、八日市場【系譜】 【略歴】 【書画暦】雲水の僧として山田に来り、篆刻及び画を以て其名を著はした。 小俣蠖庵は其門下である。
小俣蠖庵 （おまた かくあん） 孟寛、孟奨、茂四郎、子猛、名六、**栗斎**、柴翁	【享生没年】73歳 1765～1837 明和2～天保8【生地】川崎世古（常盤） 【住地】横橋 八日市場【系譜】 【略歴】豊受宮の神楽(かぐら)職。世々外宮神楽職にして、宮掌大内人に補し、また家業として味噌を売った。外宮神楽職の家に生まれる。生家は常盤町にあり味噌商であった。 【書画暦】南画派。江戸中期の篆刻家。書画を能くし篆刻をに学んで一家を成す。性清雅博識、書画を好み、富裕であったので之を貯うるもの多く、従って其鑑織に長じた。画を越後の釧路雲泉に学びて最山水に工みに、書は蘇子膽、趙子昂、董玄宰に出入りして能く其法を得、篆刻を芙蓉門の源維良に従い其妙を得、又玉隣上人に就いて明楽（江戸期に明朝から日本に伝えられた廟堂(びょうどう)音楽の名称)をもよくし。孰れも皆其堂奥に入り門下頗多く幾多の秀才を輩出した。福井端隠（篆刻）、古森痴雲（南画派）、中西笠山（篆刻）、阪田葛丘（篆刻）等其尤なるものである。人格崇高、始終温容を以って人に接し、恬淡にして寡慾、慈悲を悦び、人の賊難に遇いたるを聞き、忽ち二十餘枚の画を爲して其人に贈り、以て復興の資となさしめ、青木木米（京都の陶工）の流澪して一妓楼にし、隠るるを聞き、之を救いて其志を翅べしめた。又嘗て中山寺書画会席上古森厚保（＝痴雲、南画派）の一石を携えて鉛筆を請えるに際し、月夜に彫らんか又は闇夜に彫らんかと戯言しながら懐中にして水月観の三字を刻し、運刀絶妙を極めたとの逸話もある。少壮の時より別号を好み、其数一百に達した。蠖庵とは晩年貧困にして居室身を容るるに艱かりし頃の称にて、主として書画に用い、篆刻には栗齋を称した。
春木胥山 （はるき しょざん） 近方、子栄、其鵬、白橋	【享生没年】58歳 1751~1808 宝暦元～文化5【生地】【住地】岡本【系譜】近渚の男 【略歴】 【書画暦】小俣栗斎門人、篆刻
三宅後水 （みやけ ごすい） 俶眞、治平、古今庵	【享生没年】78歳 1773~1850 安永2～嘉永3【生地】八日市場【住地】浦口【系譜】永俶の男 【略歴】俳句は其師詳ならねど、達吟聴くべきものがあった。又浦口町の切通は山間の渓路なりしを東庄右衛門のこれを開修せんとせし時、後水金16両余を寄附して其工を授け、これを成功せしめた。 【書画暦】鉄筆の技を小俣栗斎に受けた。
西 野鹿 （にし のじか） 言直、弥六	【享生没年】69歳 1791~1859 寛政3～安政6【生地】【住地】【系譜】伝四郎の男 【略歴】本居太平及び足代弘訓に和歌を学び、その風格を模した。亀松吉太夫、野間茂兵衛の家に寄食し、 【書画暦】小俣栗斎につきて篆刻を修め、終世鉄筆に遊んだ。

橋本實盛 （はしもと さねもり） 孟介、金太夫、刑部、薫郷、菊亭、介石	【享生没年】74歳 1795~1868 寛政7～慶應4【生地】西河原(一志町)【住地】同【系譜】 【略歴】嘉永7年外宮宮掌大内人祝部に捕した。学和漢を兼ね神典に通じた。人となり謹厚厳正であった。 【書画暦】書を小俣蠖庵に学んだ。
笠松梅西 （かさまつ ばいせい） 信義、庄蔵、義郷、煙浦	【享生没年】74歳 1798~1871 寛政10～明治4【生地】【住地】八日市場【系譜】 【略歴】爲田只青に俳諧を学むだ。 【書画暦】小俣栗齋に篆刻を、山本梅逸に画を学びて雅人間に知られた。
古森亀淵 （こもり きえん） 厚孝、内記、徳元、蕭々亭、南浦	【享生没年】45歳 1800~1844 寛政12～天保15【生地】浦口【住地】同字山名【系譜】別家、初代厚光の男【略歴】俳諧を能くした。 【書画暦】鉄筆を小俣栗斎に学び、巧緻にして風韻高く、同門中に一頭地を抜いて居た。 及び書を能くした。
久野二栗 （くの にぐり）政永、傅太夫、嵩年、行栗	【享生没年】52歳 1821~1872 文政4～明治5【生地】【住地】一志久保（本町）、並木 【系譜】【略歴】 【書画暦】栗斎の門人で篆刻を能くした。晩年南画を能くし伊孚九の筆意に倣った。
小林栗敬 （こばやし りつけい）	【享生没年】【生地】【住地】【系譜】 【略歴】文化14年4月大宮司公文職正八位上となり、文政6年同知家事、同8年11月検非違使超越主任となり、天保4年病に依りて職を辞し、のち嘉永2年豊受大神宮公文大内人、正六位上に叙した。又和泉流狂言方として著名にして、弘化3年5月皆伝を得、嘉永元年家元山脇和泉より伊勢志摩両国狂言取締を命ぜられ、同年5月29日及び30日の御即位能に奉仕した。其時摂津は「隠狸」を勤むる事となり光栄身に余れりとなし、一室を清め、沐浴斎戒して沈思瞑目、暮夜より暁に徹したる事もあった。或夜障子に映る物影の、手足の動揺毫も吾に違はざるを怪みて近寄り見れば、一疋の老狸であったと云ふ。 【書画暦】詩文及画を能くし、篆刻を小俣栗斎に学びて名があった。
高田武穆 （たかだ たけやす） 因幡、夏丸、清風、萩渚	【享生没年】【生地】【住地】【系譜】興正の男、武世の養嗣 【略歴】内宮権禰宜に補し、正四位下に叙せられた。 【書画暦】鉄筆に趣味を待ち小俣栗斎について学び、当時の篆刻家中にその霊筆を称せられた。
西山守拙 （にしやま しゅせつ） 総蔵、理右衛門、省父、凹庵	【享生没年】【生地】【住地】一志久保（一志町）【系譜】 【略歴】 【書画暦】小俣栗斎門人、篆刻
木下翠屏 （きのした すいびょう） 憲、公章	【享生没年】【生地】【住地】下中之郷（宮町）【系譜】 【略歴】 【書画暦】小俣栗斎門人 篆刻
中西笠山 （なかにし かざん） 成矩、大進、大眞、一園、蟇橋	【享生没年】84歳 1794～1877 寛政6～明治10【生地】【住地】岩淵【系譜】堀越成房の男、常昌の養嗣【略歴】 【書画暦】篆刻を小俣蠖庵に学び名人であったが、平生名利にして恬淡にして 人之を知るもの少なかった。
山崎石斎 （やまざき せきさい） 宗良、	【享生没年】56(67)歳 1835~1891 天保6～明治24【生地】岡本【住地】古市【系譜】多治平の長男 【略歴】爲田只青に俳諧を学び、麦林舎を再興し、其十指を襲いだ。 【書画暦】中西笠山につきて篆刻を習ひ之をよくした。
福井端隠 （ふくい たんいん） 武熙、末彰、帯刀、孔彰、凹隅、両洗	【享生没年】85歳 1800～1885 享和元～明治18【生地】上中ノ郷(浦口)【住地】一志久保、八日市場 【系譜】榎倉武繁の次男、帯刀の養嗣 【略歴】外宮権禰宜 正四位上に至った。茶道は初め千宗室の門に入り、後藪内紹智に従い表裏両道を極めた。 【書画暦】小俣蠖庵に就いて書画並びに篆刻を学ぶ、特に篆刻に妙技を揮ひ、専ら皇国古印体及漢の古体を宗として其の名一世に高く、贄（シ・にえ）を其の門に執るものが多かった。

奥山中書 （おくやま ちゅうしょ） 家鮒、眉峰、墨竹軒、桃雲庵	【享生没年】86歳 1847~1932 弘化4～昭和7【生地】吹上【住地】同【系譜】金陵の次男 【略歴】幼時父に漢学及び医方を習ひ、又龍三瓦、鷹羽雲涼涼、御巫清直に就いて皇漢の学を修めた。明治維新後京都及び東京に遊び、大村達吉並に侍医賢伊東盛貞について修業し、遂に東京及埼玉県に於て医術を開業し、居ること2年にして帰郷した。在京中長三州巌谷一六等と交遊し、又安田老山、田崎草雲等の説を聞き、猶家蔵せる明の朱鷺の墨竹によりて研究した。三州は其画の巧妙なるを賞賛して、墨竹軒の額を書して齢貽つた。茶道を京都の千碌々斎より伝へ、俳諧に熟達して神風館十八世を継承し、書画茶器等の鑑識にも長じた。大正10年一誉坊墓地大整理に当りて後援し、該地に建立する記念碑の案文を起草した。又平素其筆録し置ける神都人物の記録は今回編纂せる人物志の資料となるもの多かった。蓋し趣味該博にして熟れも超凡、博覧強記にして能く古実を諳（そら）んし、又故人の品格を評隲すること巧妙にして客の頤を解くの慨あった。遺稿の詩文中其一二を左に録した。 【書画暦】書を田玉渓に学び、嘗て、勤王家にして南画の名手たる藤本鐵石及村山金陵(半牧の父)の許に滞在せるに際し、日夜両氏より南画の真訣を聴き、好みて墨竹を画いた。又篆刻を好みて中西笠山、福井端隠に之を学ぶ。
田中成章 （たなか なりあき） 正知、助六太夫、司馬、子勇、梅甫	【享生没年】82歳 1823~1904 文政6～明治37 【生地】松阪【住地】田中中世古（本町）、松阪【系譜】長谷川次郎兵衛の次男 【略歴】明治2年山田組年寄を申付けられ、豊受太神宮權圭典となり、同6年12月少講義を兼ねた。蹴掬及び茶道にも悉しく、茶室を建てて聚蟻庵と命名した。鷹を愛し庭内に鷹部屋を建てて霜奉亭と称し、日々従僕と共に市中を巡りて其飼料の雀を刺捕へたが、其熟練せること人皆感ぜざるはなかった。又金魚を飼ひ、其飼育法の上手なることも人のよく知るところであった。明治19年松坂に移住い、専ら画事に従った。 【書画暦】初め画を小田海僊に学び梅圃と号し、後 大原呑舟の門に入りて成章と改め、又著色の法を疋田宇隆に学んだ。其他鉄筆を福井瑞隠に学ぶ。
山本重蔵 （やまもと しげぞう） 米十郎、貞裕、監物、釣青、無（カタナカのタに止したに口）	【享生没年】60歳 1830~1889 天保元～明治22【生地】二俣【住地】上中之郷（宮町） 【系譜】白米爲國の六男、孝貞の養嗣 【略歴】土宮物忌職に補し、正六位上に叙せられたが、明治4年神宮改革によりて位職を返上し、更に同年7月豊受宮主典を命ぜられたが、同5年3月之を辞した。宮崎語学校の開設に当たり、県命を含んで英人フレデリツク、サンデマン招聘の交渉に当り、又同校管理として新学の提噺に貢献する所多かった。学校廃止後三重県群馬県等に奉職した。漢学を初龍三瓦に受け、後斎藤拙堂に学んだ。又茶事を知友某に習ひ、皆達せざるなく、多芸の人であつたが、晩年は専ら文筆を楽みとした。又憐憫の心深く、町内の赤貧者に衣食を給して惜しまず。屢（しばしば）官より其の篤行を表彰された。 【書画暦】鉄筆を福井端隠に学んだ。
福井水琴 （ふくい すいきん） 末経、若狭、士朗	【享生没年】65歳 1837~1901 天保8～明治34【生地】下之久保（一志）【住地】同 【系譜】端隠の長男 【略歴】御巫清直につきて国文及和歌を習ひ、父端隠より篆刻及び茶道を受けた。天保10年6年6月外宮権禰宜従五位下となり累進正四位下に至ったが、明治4年神宮改革により廃官となった。同22年9月両宮正遷宮及び同33年9月内宮臨時遷宮に雇を勤め、同34年神都霊祭会の斎主となった。 【書画暦】龍三瓦並びに松田雪柯につきて漢文及筆道を学ぶ。父端隠より篆刻を受けた。
松木偉彦 （まつき くすひこ） 子温、香雲・五峰、松年	【享生没年】74歳 1844～1917 弘化元～大正6【生地】田中中世古（本町） 【住地】同、宮後【系譜】武彦の男、品彦の養子 【略歴】嘉永2年外宮権禰宜に補せられたが、明治4年神宮改革によりて一旦、解職となり、更に同禰宜となりまた内宮にも奉仕した。また神宮の故典儀式に通暁し、殊に殿内の秘事を知れるは当時其右に出づる者無く、明治22年の正遷宮に際して、祭主の宮の内奏によりて顧問を迎付けられた。著書に『五峰印譜』がある。資性温雅、読書を松田雪柯に、又大坪流の馬術を鳥羽藩の林又蔵に習った。 【書画暦】南画を谷口靄(あい)山に学んだ。篆刻を福井端隠に学び、最其薀奥に達したのは篆刻で、高芙蓉の伝統を受けたのは栗齋(小俣蠖庵)、端隠並びに偉彦である。嘗って(かって)伊藤博文の爲めに石印を刻し、博文よりは扁額を書して之に酬いられた。

下村要蔵 （しもむら ようぞう）	【享生没年】【生地】【住地】【系譜】 【略歴】永年教育に従事し、早修小亭校訓導を勤め、退職後今社々掌を勤めた。又俳句を好み、例月献咏句を募集して今社の社前に献掲し、私費を以て印刷物を頒つた。又早修区内の地誌、人物等を精査して之を記述した。 【書画暦】松木偉彦につきて篆刻を学びて之を能くした。
阪(坂)田葛丘 （さかた かきゅう） 光徳、禮蔵、	【享生没年】33歳【生地】【住地】大世古一之木【系譜】 【略歴】 【書画暦】小俣蠖庵に篆刻を学ぶ
宮後朝喬 （みやじり ちょうきょう） 高朝、袴田館磯水	【享生没年】75歳 1787~1861 天明7～万延2【生地】宮後【住地】同 【系譜】朝栄（あさよし）の男 【略歴】外宮禰宜に補し、長官に進み正三位に至り、後特旨を以て従二位に陞（のぼ）つた。久守に歌を學びて孰（いず）れもよくした。 【書画暦】二代目濱村蔵六につきて篆刻を学び、竹山に画を学びて之をよくした。
増井竹窓 （ますい ちくそう） 甚蔵、熙、孔淳、此君山房、	【享生没年】39歳 1860~1899 万延元～明治32【生地】【住地】【系譜】倉山の男 【略歴】 【書画暦】村田香谷の弟子、書、画、篆刻
河崎延望 （かわさき えんぼう）	【享生没年】【生地】【住地】【系譜】度會姓 【略歴】篳篥(ひちりき)に堪能にて神宮楽長を勤める。 【書画暦】松木香雲に学びて篆刻をよくした
綿屋文備 （わたや ふみひ） 内記	【享生没年】63歳 1800~1863 寛政12～文久3【生地】下中之郷（宮町）【住地】【系譜】 【略歴】和歌 【書画暦】篆刻

書:書家諸派

『華陽毛(タク？)？草花巻』
松田雪柯君一粲(サン)
山口華陽
ではないかと考えておりますが？？
華陽の下の字は何て字でしょうか？判る方はご一報下さい。

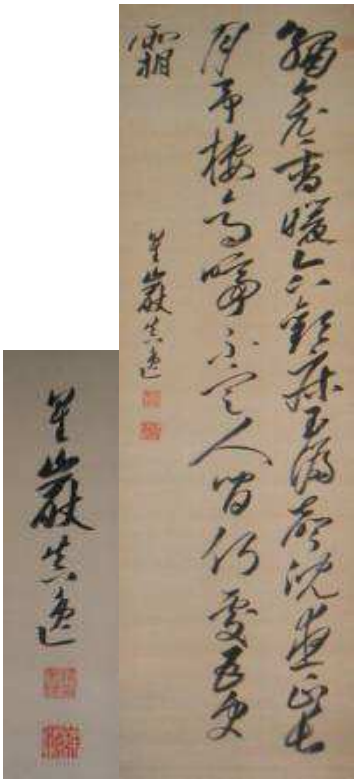
『書』山口顚庵(凹巷)

『詩』山口顚庵(凹巷)

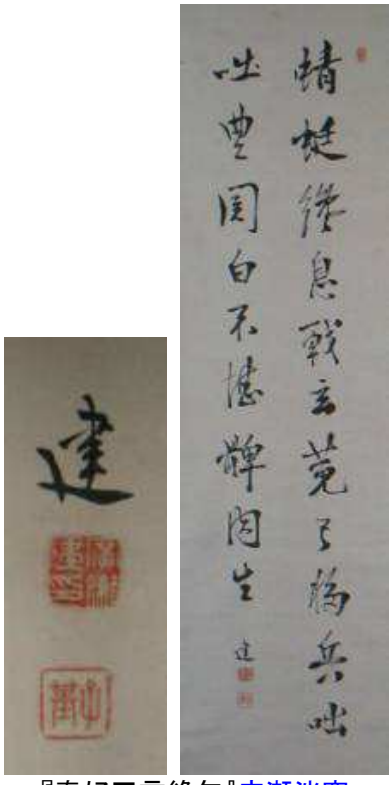
『一行物』土井贅牙

『七律詩』矢土錦山

『七律詩』矢土錦山



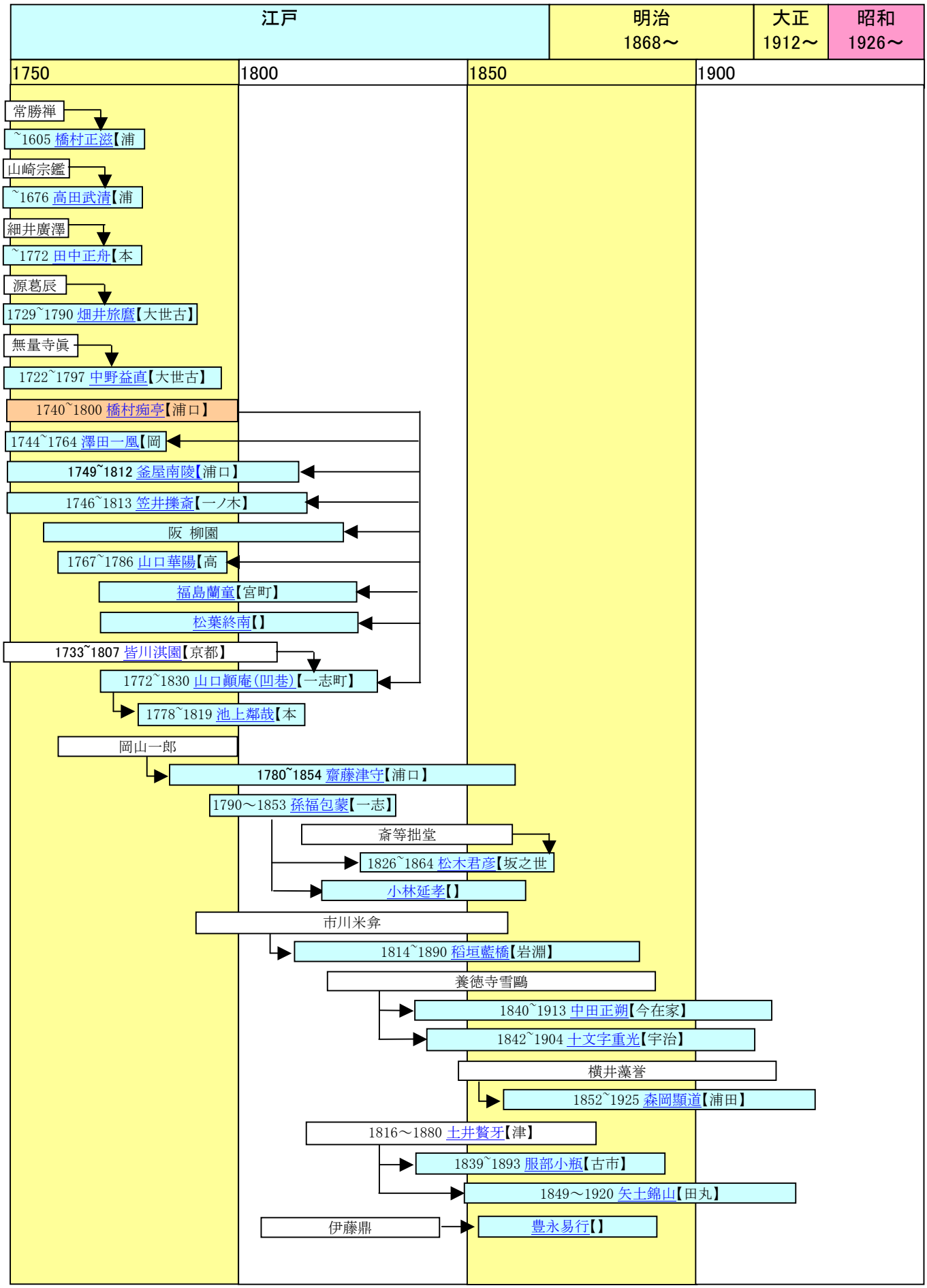
『絹本七絶』梁川星巌



『春好五言絶句』広瀬淡窓

『二行詩』広瀬淡窓

書家（諸派）系譜


江戸
明治
1868～
大正
1912～
昭和
1926～
1750
1800
1850
1900
常勝禅
~1605 橋村正滋【浦
山崎宗鑑
~1676 高田武清【浦
細井廣澤
~1772 田中正舟【本
源葛辰
1729~1790 畑井旅麿【大世古】
無量寺眞
1722~1797 中野益直【大世古】
1740~1800 橋村痴亭【浦口】
1744~1764 澤田一鳳【岡
1749~1812 釜屋南陵【浦口】
1746~1813 笠井擽斎【一ノ木】
阪 柳園
1767~1786 山口華陽【高
福島蘭童【宮町】
松葉終南【】
1733~1807 皆川淇園【京都】
1772~1830 山口顚庵(凹巷)【一志町】
1778~1819 池上鄰哉【本
岡山一郎
1780~1854 齋藤津守【浦口】
1790～1853 孫福包蒙【一志】
斎等拙堂
1826~1864 松木君彦【坂之世
小林延孝【】
市川米弁
1814~1890 稲垣藍橋【岩淵】
養徳寺雪鷗
1840~1913 中田正朔【今在家】
1842~1904 十文字重光【宇治】
横井藻誉
1852~1925 森岡顯道【浦田】
1816～1880 土井贅牙【津】
1839~1893 服部小瓶【古市】
1849～1920 矢土錦山【田丸】
伊藤鼎
豊永易行【】

書家（諸派）略歴

橋村正滋 （はしむら まさしげ） 才右衛門	【享生没年】~1605～慶長11【生地】上中ノ郷（浦口）【住地】同 【系譜】正康の三男、宰記家の祖【略歴】天正年間別家し、外宮権禰宜従五位に至った。飛鳥井家の門に入り蹴鞠に上達した。 【書画暦】常勝禅林に書を学びて巧みであった。
高田武清 （たかだ たけきよ） 長助、修理	【享生没年】~1676～延宝4【生地】【住地】上中之郷（浦口）【系譜】【略歴】 【書画暦】幼より書法を好み、山崎宗鑑の手墨を慕ふて習つたが、終に其極を得て、京都では伊勢宗鑑といはるる程になった。
田中正舟 （たなか せいしゅう） 大炊	【享生没年】~1772～明和9【生地】田中中世古（本町）【住地】同【系譜】 【略歴】 【書画暦】細井廣澤門人 草書
畑井旅麿 （はたい たびまろ） 正英、理兵衛、沼樹、	【享生没年】62歳 1729~1790 享保14～寛政2【生地】【住地】大世古 【系譜】蒔田必器の兄 【略歴】初め橋村正身につき．後加茂真淵に従ひて古学を修め、和歌を中西良佐にうけて令名かあった。山水弔古の癖あり、常に天下に遊縦して、履跡随所に普ねかった。【書画暦】書法を源葛辰にうけた
中野益直 （なかの えきなお） 通實、儀右衛門、**素梅**	【享生没年】76歳 1722~1797 享保7～寛政9【生地】大世古【住地】宮後 【系譜】梅津益親の次男、當恒の養嗣【略歴】 【書画暦】無量寺眞栄門人、書
橋村痴亭 （はしむら ちてい） 弥太郎、正令、佐兵衛、監物、主計、令祐、行美	【享生没年】60(58)歳 1740～1800 寛保3～寛政12【生地】上中ノ郷（浦口）【住地】同 【系譜】正身の長男、宇治久老の兄 【略歴】外宮権禰宜に補し、正四位上に至った。国学は父正身の流を汲み、漢学は伊藤東涯に受け、20歳に充たざるに夙に其名を成し、海内の諸名家に交わった。 【書画暦】屢京師紳縉の招を受け、且近畿諸侯の需に応じて書を講じた。釈蕉仲と交わり深く、痴亭の賦章整然たるは此人より得来つたもの多かったであろう。また書画をも能くした。奥田三角、恩田仲任、僧大典、月儕等と交遊し、山口凹巷、阪柳園、釜屋南陵等を其門に出した。
澤田一鳳 （さわだ いっぽう）	【享生没年】20歳 1744~1764 延享元～明和元【生地】【住地】岡本 【系譜】村林孝信の次男、庄蔵の養嗣【略歴】 【書画暦】橋村痴亭（書家）門人詩、書画
釜屋南陵 （かまや なんりょう） 亀丸、息正、興正、数馬、董卿、鼎湖	【享生没年】64歳 1749~1812 寛延2～文化9 【生地】上中ノ郷（浦口）【住地】下中之郷（宮町）【系譜】中西息雅の男、正富の養嗣 【略歴】内宮権禰宜となり、正四位上に進んだ。弱冠にして京都に上り、江村北海に従いて漢学を修め、詩文に長じ、令名があった。また医学本草学に通暁し、邸内の後園に珍草奇木を培ひ、終生研鑽を怠らなかった。また当時放縦俗をなし、覇気を？ふの悪風あり、南陵独り隠然身を持する謹厳、辞容温乎として人に接し、滔々たる世上の悪潮を訂し、時人その徳風を慕ふた。【書画暦】
笠井攀斎 （かさい れきさい） **末清**、士寧、南街	【享生没年】67歳 1746~1813 延享3(宝暦11=1761と書いてあるが)～文政10 【生地】一ノ木【住地】同【系譜】末顯の男 【略歴】擬符権禰宜、詩 【書画暦】橋村痴亭（書家）門人
山口華陽 （やまぐち かよう） 驥、徳甫、拙齋	【享生没年】20歳 1767～1786 明和4～天明6【生地】高柳【住地】堂【系譜】豹山の男 【略歴】 【書画暦】橋村痴亭の門人 詩、画
福島蘭童 （ふくしま らんどう） 末命	【享生没年】【生地】【住地】下中ノ郷（宮町）【系譜】 【略歴】 【書画暦】橋村痴亭門人、詩
松葉終南 （まつば しゅうなん） 齢	【享生没年】【生地】【住地】【系譜】 【略歴】 【書画暦】橋村痴亭門人、詩

皆川淇園 （みながわ　きえん） 愿、伯恭、有斐斎、有斐斎	【享生没年】74才 1733～1807 享保18～文化4【生地】京都【住地】【系譜】 【略歴】江戸後期の儒者。生まれ。父春洞は一説に東福門院の御典医と言われる。開物学と称する独自の説を樹立し、私塾弘道館を開き多くの門人を擁す。 【書画暦】画は初め望月玉蟾に学び、のち円山応挙・呉春・岸駒・長沢蘆雪らと交わる。
山口顚庵 （やまぐち　てんあん） 凹巷、揚菴、顚菴陳人	【享生没年】58歳 1772～1830 安永元～文政13【生地】一志久保（一志町）【住地】【系譜】遠山文圭の次男、豹山の養子 【略歴】 【書画暦】初め橋村痴亭に従ひ、後に皆川淇園の門に入り、詩を菅茶山に学んだ。博学多識にして詩名海内に重く、漢魏六朝より唐宋以後の諸家まで窺はざるは靡かった。同人河崎良佐、宇仁館雨航、西村維祺、北條霞亭、池上鄰哉、孫福包蒙、東垣軒等と恒心社を設けてその盟主となった。官を勤むるものあるも辞して就かず。酒を蒙り痛飲日夜に渉り、叉山水の癖あり、釣を祭しみ悠々自適した。文致二年月瀬に遊びて詩集月瀬梅花帖を著し、天下の知友に頒った。これは拙堂の月瀬記勝の先俑をなしたものである。 在 新墓
池上鄰哉 （いけがみ　りんや） 徳鄰、将曹、成斎	【享生没年】42歳 1778～1819 安永7～文政2【生地】【住地】田中【系譜】致鄰の男 【略歴】 【書画暦】山口凹巷門人。詩、文を能くする。
齋藤津守 （さいとう　つもり） 親卿、公恂、公、永孝、安山、大樗主人	【享生没年】75歳 1780~1854 安永9～嘉永 7【生地】【住地】下中之郷（浦口） 【系譜】元伯の男、元姓津守 【略歴】産科医にして、常時市中刀圭家の第一人であった。又漢学の造詣浅からす、揮毫殊の外見事であった。巷間の諺に「一（市）は河崎、二（荷）は鈴木屋、三（産）は津守」。云々と碍へた。【書画暦】書道を岡山一郎に受けた。
孫福包蒙 （まごふく　ほうもう） 公寛、公裕、内蔵、孟（糸片に卓）、楓窓	【享生没年】63歳 1790～1853 寛政3～嘉永6【生地】一志久保【住地】同 【系譜】損斎の男 【略歴】外宮に出仕して正六位上に至った。東垣軒に師事して漢学を修め詩書を能くした。【書画暦】
松木君彦 （まつき　きみひこ） 無逸、公微、子誠、藤？涯、錦渓、仁里	【享生没年】39歳 1826~1864 文政9～元治元【生地】【住地】坂之世古【系譜】 【略歴】 【書画暦】斎等拙堂、孫福包蒙門人、詩文、書
小林延孝 （こばやし　のぶたか）	【享生没年】【生地】【住地】【系譜】 【略歴】権禰宜。従四位に至り。子良物忌を奉仕した。趣味豊かなる人にして、足代弘訓の門に入りて、和歌に巧みに，且つ有職故実に通暁し、又茶を千家に就て裏流を学び、執れも之を能くした。 【書画暦】書を孫福包蒙に学ぶ。
稲垣藍橋 （いながき　あいきょう） 主馬、鉄心斎、槐日庵	【享生没年】76歳 1814～1890 文化11～明治23【生地】鳥羽【住地】岩淵 【系譜】弥惣右衛門 【略歴】烏羽落の家老職であった。廃藩後、度会府の刑法曹長を勤め。 【書画暦】書は市川米弁に師事し、画は岸駒の高弟、中村馬外に学び能手となった。
中田正朔 （なかた　まさもと） 康年、子稽、朧梅、稽山	【享生没年】74歳 1840~1913 天保11～大正2【生地】今在家【住地】中之切 【系譜】澤瀉久栄の三男、義運の養嗣 【略歴】漢学を鷹羽龍年に、国学を八羽光穂に学び、和歌を能くした。明治元年宇治山神社祠掌となり、宮崎郷学校幹事、度会県権少屬を経、同9年神宮主典に任じ、禰宜に進み、造紳宮頭、神宮皇学館長を兼ね、同26年摂津廣田神社宮司、後和泉大鳥神社宮司に転補して正六位に叙せられたが．同36年罷めて故山に帰臥した。神宮に奉職するの日は祭主官の寵命を辱うし、職掌に恪勤し、神宮司廳、神宮教院分離の際の如き努力の大に見るべきものがあった。 【書画暦】書を養徳寺雪鷗に学び巧みであった。

十文字重光 （じゅうもんじ しげみつ） 格三郎、格造、重遠、大炊、古青山史	【享生没年】63歳 1842~1904 天保13～明治37【生地】宇治【住地】同館 【系譜】木下正格の三男、重養の養嗣 【略歴】漢学を鷹羽雲涼に、皇典を平田鐵胤に受け、皆共造詣深きを致した。世々会合年寄として郷政に預り、文久2年内宮権禰宜酒造大内人に補し、正六位上に叙せられた。当特尊王攘夷論の盛んなるに奮起し、京都に上り、諸藩の志士と交はりて國事に奔走し、特に神宮警護の大切なる事を主張した。堺町御門の事件に座して捕はれんとしたが、遁（のが）れて水戸藩に隠れ、居る事二年、慶應三年郷里に帰り、明治元年有志と共に神宮警護、山田奉行の廃止、府廳の設置に運動し、略其目的を貫徹し、度合府御用掛兼監察を命ぜられ、次で府兵曹に転じ、又騎兵隊長となった。其後度会県、神宮教授、皇学館、神宮、に歴任し明治33年神宮禰宜に補し、従七位に叙せられた。同31年内宮炎上の際、身を挺して御神体の安全を計ったのは特記すべきである。在官に傍、青年子弟を教育せしこと多年、其門より出でて栄達した者が多くある。 【書画暦】幼時書道を養徳寺雪鷗に学ぶ。
森岡顯道 （もりおか けんどう） 椎彰、雙石、北崖、城南、南亭、	【享生没年】74歳 1852~1925 嘉永5～大正14【生地】尾張横須賀【住地】浦田 【系譜】良右衛門の次男 【略歴】尾藩の儒中出梅軒に経学を学び、藩校貴明倫堂に入り、執れも之を能くした、又国語を石橋知空、漢学を中山弘斎に、詩を村田梅村に学んだ。明治19年以降神宮教院に奉職し、同会幹事となり、後度会本部長となった。冷泉伯につき歌道を研究し、又常に煎茶を好み、小川流の秘奥を究めた。 【書画暦】山口五水に南画を、横井藻誉に書を学び、孰(いず)れも之を能くした。
土井贅牙 （どい ごうが） 有恪、士恭、松径	【享生没年】64才 1816～1880 文化13～明治13【生地】【住地】津【系譜】 【略歴】幕末・維新の津藩儒学者、漢学者。川村竹坡・斎藤拙堂に学ぶ。藩校有造館助教・講官。学風は清朝の考証学を尊ぶ。【書画暦】
服部小瓶 （はっとり こへい） 正質、徳三	【享生没年】55歳 1839~1893 天保10～明治26【生地】古市【住地】同 【系譜】長兵衛の長男【略歴】医を業とした。 【書画暦】土井贅牙に就いて詩文及び書法を学び、晩年江村香厳につき南画を習うた。
矢土錦山 （やつち きんざん） 勝之、實夫	【享生没年】72歳 1849～1920 嘉永2～大正9【生地】田丸【住地】飯南郡射和村 【系譜】源八の弟 【略歴】25歳の頃上京して賞勲局の官吏となり、森春濤（漢詩人）の門に入り巌谷一六、川田甕江等の名士と交を結び，名声大に楊り、退官後、伊藤博文に漢詩を授け、其別荘滄浪閣を案じて、扁額を揮毫したと云ふ。常に西園寺公望其他名流と詩酒徴逐し、嘗て末松謙澄をして、森槐南に比すれば、覇気満々なりと評せしめた。 【書画暦】幼より學問を好み、十七八歳の頃、藤川三渓，松田雪柯につきて漢学を学び、後津藩の名儒土井贅牙の門人となり、詩文をよくし、且書に巧みであった。
豊永易行 （とよなが えきこう）	【享生没年】【生地】【住地】【系譜】 【略歴】明治元年7月度会府御用係、同2年4月仮府兵輜(シ)重方を申付けられ、後度会県に出仕した。後同6年神宮司庁雇となり、同31年内官報仮遷宮に宮掌補として奉仕した。晩年俳句を好み、天主耕雨及び喜多寄青につきて研究した。 【書画暦】伊藤鼎に就いて書道を習った。
梁川星巌 （やながわ せいがん） 孟緯（もうい）、新十郎	【享生没年】69歳 1789～1858 寛政元～安政5【生地】美濃（岐阜）【住地】【系譜】 【略歴】15才に江戸に出て古賀精里（せいり）、山本北山に学んだ。女流詩人であった妻紅蘭（こうらん）とともに20年間も各地を旅したり、江戸で玉池 吟社（ぎょくちぎんしゃ）を開いたりした後、京都に住んだ。たまたま寛永6年ペリーの開港要求により、幕府は翌年下田で仮条約を結んだ。かくて尊王攘夷（そんのうじょうい）の論が起こり、星巌も諸藩の志士と画策するところが多かった。幕府は勤王の志士を捕らえ、吉田松陰、橋本左内等皆を投獄した。星巌は、志士の頭領と目せられ捕らえられる所、安政5年9月2日病気のため70才で急死した。越えて4日、捕吏（ほり：罪人を捕らえる役人）が家に到ったが既に没した後で難を免れた。当時「星巌は詩に上手より死に上手なり」と言ったという。【書画暦】
広瀬淡窓 （ひろせ たんそう） **建**、子基	【享生没年】75歳 1782～1856 天明2～安政3【生地】豊後国日田（大分）【住地】 【系譜】【略歴】儒学者で、漢詩人、教育者。筑前国の亀井南冥、亀井昭陽父子に師事する豊後国日田に私塾を開き桂林荘とし日本最大級の私塾となった。古市古楼備前屋主人で敬神家の太田小三郎が幼時、朱子学を学んだ。【書画暦】

秋　田　耕　司
Homepage: http://homepage3.nifty.com/NFC/
メールアドレス: koji.akita@nifty.com
〒259-1206　神奈川県平塚市真田３－１０－１８